高畑遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業下矢次地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業に関連して平成22年度に発掘調査を行った岩手県紫波郡矢巾町大字下矢次第４地割151番他に所在する高畑遺跡の調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、この地域に縄文・古代・近世の遺構や遺物が見つかっており、長きにわたって断続的に生活に利用されていた場所であることが判りました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県盛岡広域振興局農政部農村整備室・矢巾町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成24年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　　言

1　本報告書は岩手県紫波郡矢巾町大字下矢次第４地割151番他に所在する高畑遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県盛岡広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時）が委託を受け、受託事業として実施した。なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県盛岡広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。

3　本遺跡の調査成果は、すでに『平成22年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第588集）において発表しているが、内容については本書が優先する。

4　岩手県遺跡登録台帳に登録されている高畑遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。

　遺跡番号　ＬＥ46－0301　　遺跡略号　ＴＢ－10

5　野外調査の面積・期間・担当者は次の通りである。

調査面積	2,634㎡
野外調査期間	平成22年５月６日～７月２日
野外調査担当者	溜 浩二郎・西澤正晴

6　室内整理の期間・担当者は次の通りである。

室内整理期間	平成22年12月１日～平成23年２月15日
室内整理担当者	溜 浩二郎

7　遺物の鑑定は次の機関に依頼した。

　石材鑑定：花崗岩協会、火山灰同定：パリノサーヴェイ

8　基準点測量は、北光コンサル株式会社に委託した。

9　野外調査・室内整理にあたって機関の御協力・御指導をいただいた（敬称略）。

　矢巾町教育委員会

10　本報告書の編集については、溜浩二郎が行った。各章の執筆については第Ⅰ章「調査に至る経過」は岩手県盛岡広域振興局農政部農村整備室に原稿を依頼し、執筆していただいたものである。第５表　古代土器観察表は西澤正晴が作成し、それ以外を溜が執筆した。

11　本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

1　遺跡の位置 …… 1
2　地形と地質 …… 1
3　遺跡周辺の歴史的環境 …… 6
（1）矢巾町の遺跡 …… 6
（2）周辺の遺跡 …… 7
4　基本土層 …… 12

Ⅲ　調査の経過と方法

1　野外調査の経緯 …… 13
2　野外調査の方法 …… 13
（1）グリッドの設定 …… 13
（2）基準点の設定 …… 13
（3）表土除去と遺構の検出 …… 15
（4）遺構の精査と実測 …… 15
（5）遺物の取り上げ方 …… 15
（6）写真撮影 …… 15
3　室内整理の手順と方法 …… 15
（1）作業経過 …… 15
（2）遺物 …… 15
（3）遺構 …… 15
（4）掲載図 …… 16
（5）遺構の名称 …… 16

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

1　調査の概要 …… 21
2　検出した遺構と遺物 …… 21
（1）土坑 …… 21
（2）井戸跡 …… 24
（3）溝跡 …… 24
（4）墓壙 …… 33
（5）掘立柱建物跡 …… 39
（6）柱穴状土坑 …… 40

Ⅴ　遺構外出土遺物 …… 47

Ⅵ　ま　と　め …… 60

附編　高畑遺跡の自然科学分析 …… 63
火 山 灰 分 析 …… 63

報 告 書 抄 録 …… 91

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… ９・12
第２表　基準点・捕助点一覧表 …… 13
第３表　遺構名対応表 …… 16
第４表　墓壙一覧表 …… 38
第５表　柱穴状土坑一覧表 …… 40・41
第６表　古代土器観察表 …… 54・55
第７表　縄文・弥生土器観察表 …… 55
第８表　石器観察表 …… 56
第９表　木製品観察表 …… 56
第10表　陶磁器観察表 …… 57
第11表　古銭観察表 …… 58・59
第12表　金属遺物観察表 …… 59

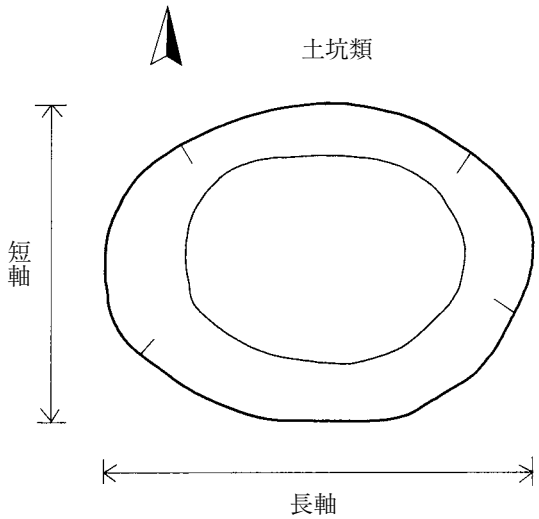
図 版 目 次

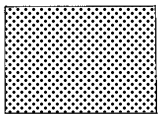
第１図　遺跡の位置図 …… 2
第２図　地形分類図 …… 4
第３図　遺跡周辺の地形 …… 5
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 8
第５図　基本土層 …… 12
第６図　グリッド配置図 …… 14
第７図　遺構配置図（全体）…… 17
第８図　遺構配置図（Ａ区）…… 18
第９図　遺構配置図（Ｂ区）…… 19
第10図　遺構配置図（Ｃ・Ｄ区）…… 20
第11図　１～５号土坑 …… 25
第12図　６～10号土坑 …… 26
第13図　11～13号土坑、１号井戸跡 …… 27
第14図　１号溝跡 …… 28
第15図　２号溝跡 …… 30
第16図　３号溝跡 …… 31
第17図　４・５号溝跡 …… 32
第18図　墓地跡 …… 36
第19図　１～５号墓壙 …… 37
第20図　６～12号墓壙 …… 38
第21図　１号掘立柱建物跡 …… 42
第22図　２号掘立柱建物跡 …… 43
第23図　３号掘立柱建物跡 …… 44
第24図　柱穴状土坑（Ｐ23・24・31～34・55～61）
…… 45
第25図　柱穴状土坑（Ｐ35～43・53・54）…… 46
第26図　出土遺物１ …… 48
第27図　出土遺物２ …… 49
第28図　出土遺物３ …… 50
第29図　出土遺物４ …… 51
第30図　出土遺物５ …… 52
第31図　出土遺物６ …… 53

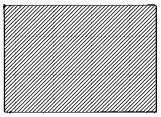
写真図版目次

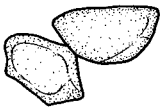
写真図版１　航空写真 …… 69
写真図版２　調査区近景、風景 …… 70
写真図版３　調査区、基本土層 …… 71
写真図版４　１～４号土坑 …… 72
写真図版５　５～８号土坑 …… 73
写真図版６　９～12号土坑 …… 74
写真図版７　13号土坑、１号井戸跡、１号溝跡 …… 75
写真図版８　２～４号溝跡 …… 76
写真図版９　５号溝跡、１～３号墓壙 …… 77
写真図版10　３～６号墓壙 …… 78
写真図版11　７～12号墓壙 …… 79
写真図版12　１号掘立柱建物跡（１）…… 80
写真図版13　１号掘立柱建物跡（２）…… 81
写真図版14　１号掘立柱建物跡（３）…… 82
写真図版15　２・３号掘立柱建物跡（１）…… 83
写真図版16　２・３号掘立柱建物跡（２）…… 84
写真図版17　Ｃ・Ｄ区近景 …… 85
写真図版18　出土遺物（古代土器１）…… 86
写真図版19　出土遺物（古代土器２）…… 87
写真図版20　出土遺物（古代土器３、縄文土器、石器）…… 88
写真図版21　出土遺物（陶磁器、木製品）…… 89
写真図版22　出土遺物（金属遺物）…… 90

〔遺構〕

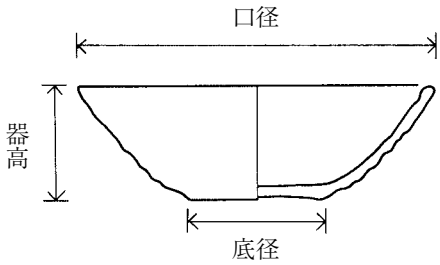



焼　土


柱　痕


礫

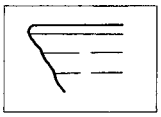
〔遺物〕

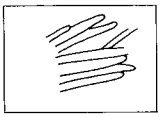


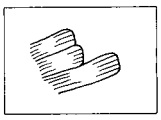
土　器

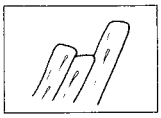
須恵器

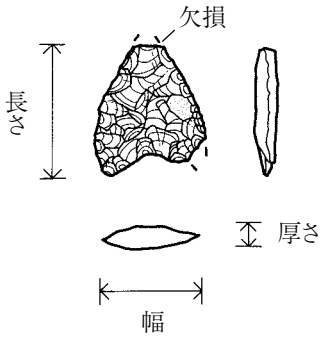
黒色処理


ロクロナデ

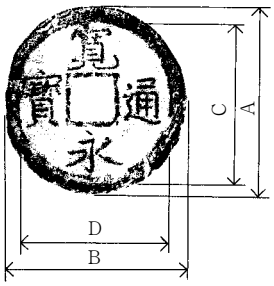

ミガキ


ヘラナデ


ヘラケズリ



石　器



銭貨（測点）

Ⅰ　調査に至る経過

高畑遺跡は、「経営体育成基盤整備事業下矢次地区」のほ場整備に伴い、試掘調査を行った結果、その事業区域内に存在が確認されたことから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は、紫波郡矢巾町下矢次に位置し、北側及び東側を芋沢川、西側を東北新幹線、南側を町道安庭線に囲まれた約40haの水田地帯である。農地を取り巻く現況は、水田は小区画で作業効率が悪く、水路は用排兼用の土水路で用水不足及び排水不良を引き起こし、さらには農道の幅員は狭小で車両の通行に支障を来たしている状況であった。

このことから、ほ場の区画整理を始め、用水路のパイプライン化、排水路及び道路の整備などを一体的に行い、担い手への農地集積を進めるとともに農家経営の安定と農村環境の改善を図ることを目的として、平成20年度から事業着手したものである。

当事業の実施にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、当農村整備室から平成21年10月５日付盛地農整第380号「経営体育成基盤整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について」により岩手県教育委員会に試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年10月13日、10月14日、11月9日に試掘調査を実施し、平成22年2月2日付教生第1345号により「埋蔵文化財が確認され、当初計画どおり工事を実施するためには高畑遺跡の発掘調査が必要となる」との回答を受けた。

当農村整備室はこの回答を踏まえて極力保護盛土による現状保存を基本に県教育委員会と工法協議を行い、一部対応出来ない範囲についてのみ、発掘調査することで協議調整し、発掘調査箇所について平成22年4月1日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなったものである。

（岩手県盛岡広域振興局 農政部 農村整備室）

Ⅱ　遺跡周辺の地理的環境

１　遺 跡 の 位 置

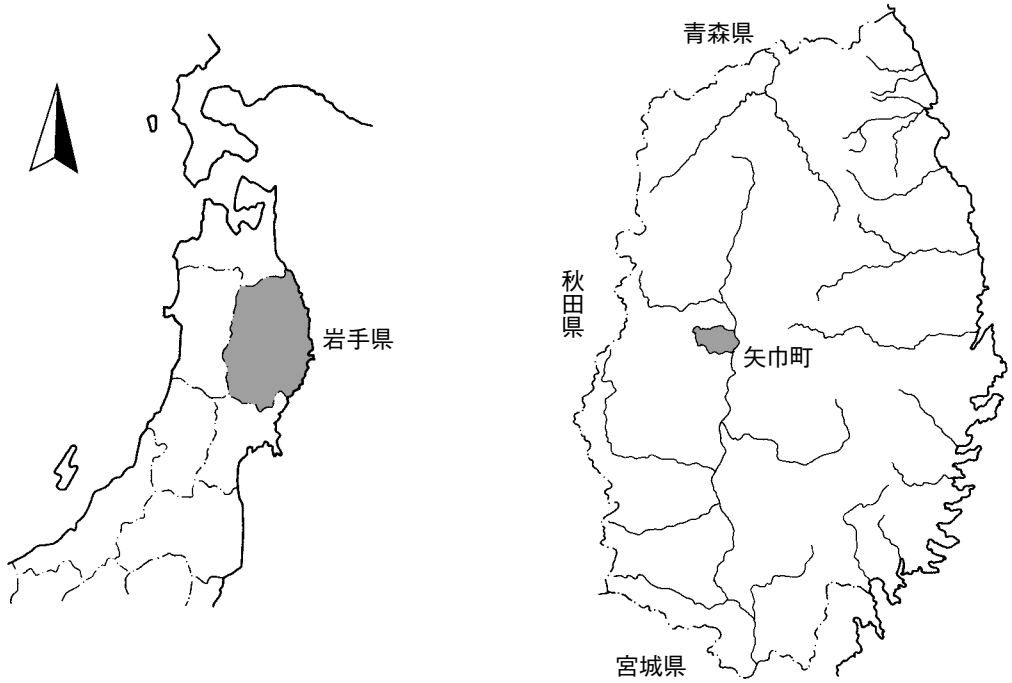
高畑遺跡は紫波郡矢巾町北部の北緯39度37分26秒、東経141度08分47秒の地点に位置する。遺跡は国土地理院発行の５万分の１地形図「日詰」NJ-54-13-15（盛岡15号）の図幅に含まれる。

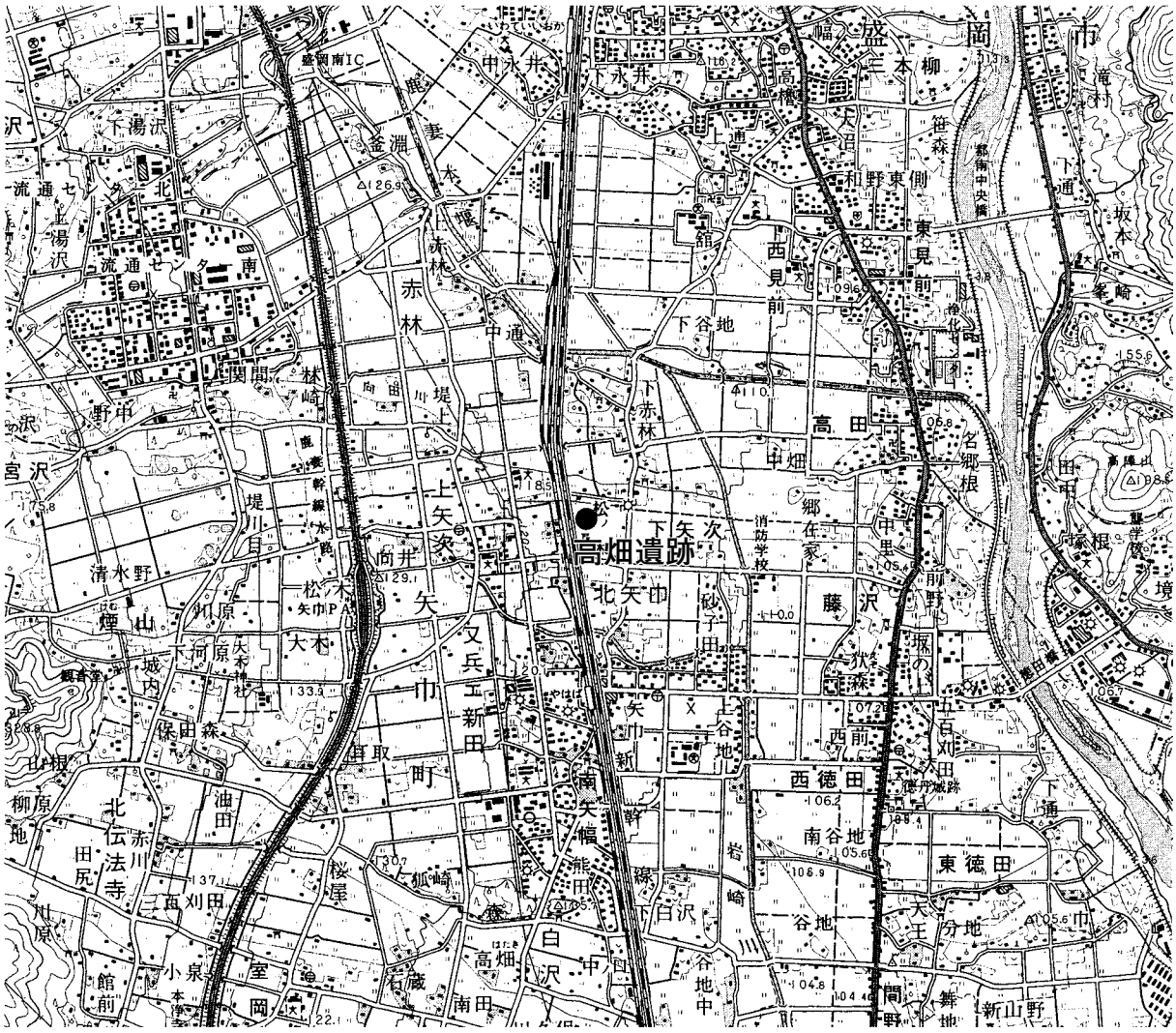
矢巾町は岩手県の中央部にあり、総面積は67.29㎢である。県都盛岡市の南西部に位置し、南に紫波町、西に雫石町と接する。町の中央に東北本線と新幹線、西に東北縦貫自動車道、東に国道４号がそれぞれ南北に貫き、東端に北上川が南流している。

２　地 形 と 地 質

遺跡のある矢巾町の地形は奥羽山脈側にある西側が高く、北上川のある東側が低位となっており、西側の山岳地帯、その東側に広がる洪積台地、北上川、雫石川の流路移動によって形成された沖積平野とに大別される。

1　遺跡の位置





第１図　遺跡位置図

西部山岳地帯は西端の南昌山（848m）を主峰とし、金壺山（502m）、城内山（328m）、北谷地山（338m）などがあり、これらの残丘を含めると、町域の約20％を占める。山岳地帯の東縁には第三紀中新世末頃に生じた盛岡－花巻断層線が南北に走り、比高差は300m以上もある。これが洪積台地とほぼ境を形成している。

町域の約半分を占める洪積台地は盛岡市と境を接する北側は、雫石川の流路移動によって形成されたほぼ河岸段丘上にあり、東部地域は、赤林より矢幅駅前を通り、東北本線にそって走る。北上川によって形成された河岸段丘によって沖積平野と境を接している。

この沖積平野は北上川の流路移動によって形成された河成平野であり、都市開発されるまでは肥沃な穀倉地帯でもあった。

河川は向田川、芋沢川、岩崎川、大白沢川、太田川などがあり、これらは西部山岳地帯を水源とし、比較的軟弱な第三紀凝灰岩地帯を浸食しつつ、深い渓谷や断層崖後方に滝をつくり、山麓地帯では各河川が干渉して複合扇状地を広げ、洪積台地に開析地帯を形成、沖積平野を横切って北上川に流入する。

地質は沖積層は古来から本町の水田地帯を占めているが、洪積層との段丘によって境を接し、上部段丘下には広大な湿地帯が存在し、土地改良前は湿地性植物群が繁茂し、独特な植生をみせていた。地層の下部は、北上川・簗川・雫石川流域の各種水磨円礫で、その上部を細砂及び植物遺体を含む砂質壌土が覆っている。遺跡のある下矢次地区は向田川と岩崎川によって開析された沖積地に立地している。

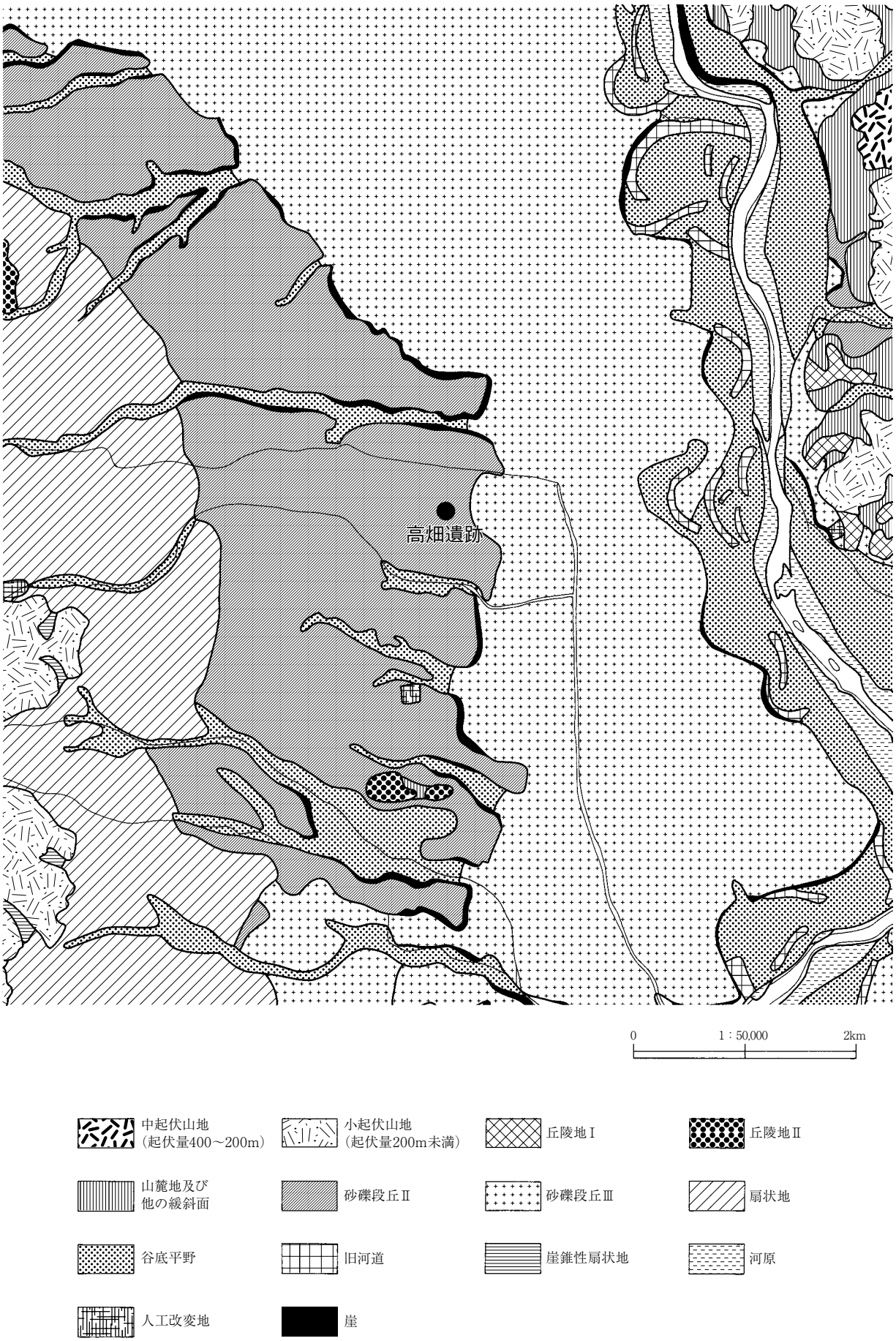
矢巾町を構成する岩相であるが、基盤は花崗岩類であり、これを覆うように基底岩である安山岩がある。この上には安山岩質集塊岩・安山岩質凝灰岩によりなる第三系の幕館層があり、西部山岳地帯では基底部に変朽安山岩の露頭が認められる。また、北上川河床としては泥炭層・頁岩層がある。

表層地質においても地形同様に北上川河谷平野を境として東西で対照的な様相を呈している。北上山地側では沖積世の砂礫層を挟み、南北に古生代の泥岩、中生代の蛇紋岩質岩石が大部分を占め、奥羽山脈側では第三紀の火山性岩石である安山岩・流紋岩・集塊岩が占める。遺跡のある北上川河谷平野は未固結堆積物である沖積世の砂礫層で構成されている。

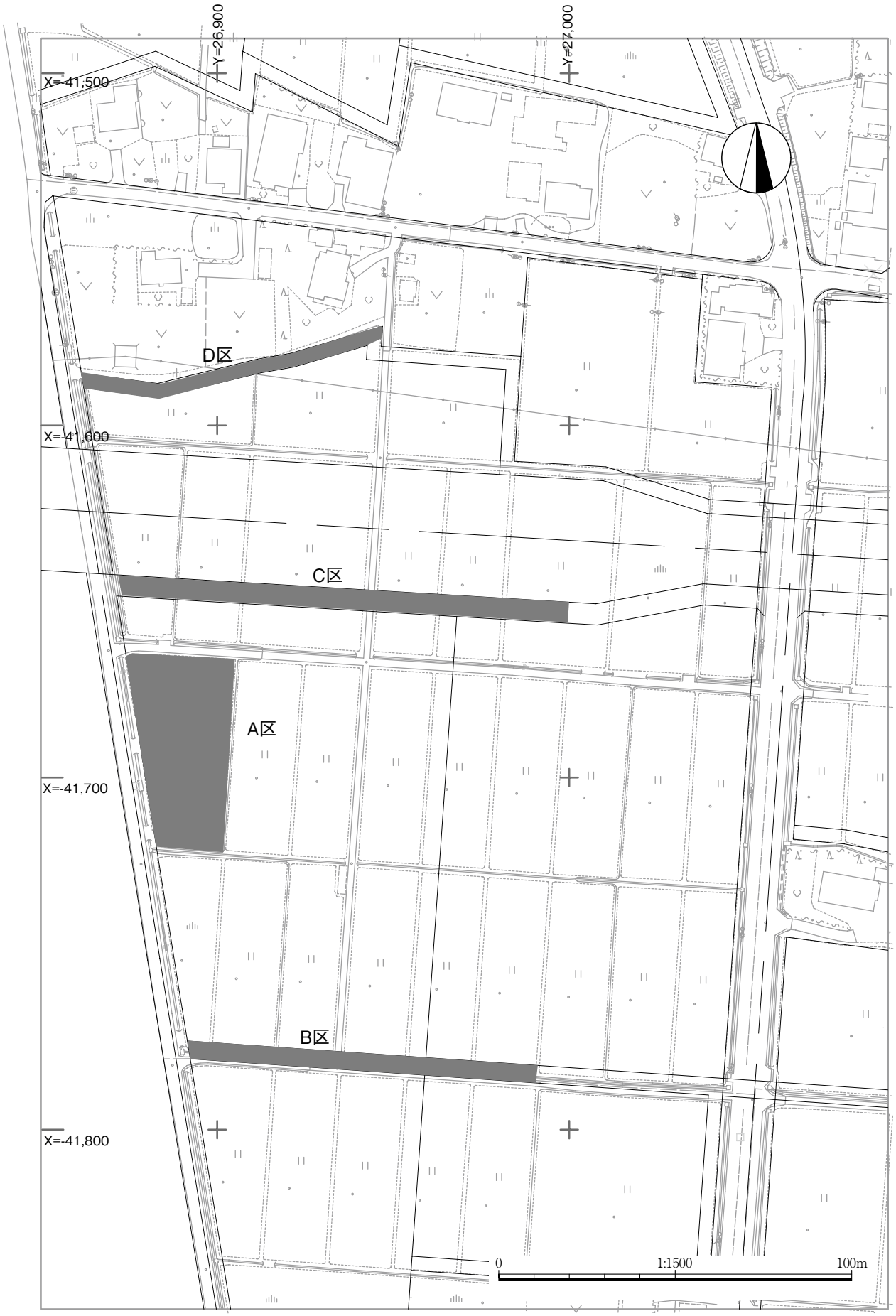
参考文献

岩手県企画開発室（北上山系開発）　1976　『北上山系開発地域　土地分類基本調査　日詰』

矢巾町（矢巾町史編纂委員会）　1985　『矢巾町史（上巻）』


高畑遺跡
0
1：50,000
2km
中起伏山地
（起伏量400～200m）
小起伏山地
（起伏量200m未満）
丘陵地Ⅰ
丘陵地Ⅱ
山麓地及び
他の緩斜面
砂礫段丘Ⅱ
砂礫段丘Ⅲ
扇状地
谷底平野
旧河道
崖錐性扇状地
河原
人工改変地
崖

第２図　地形分類図


Y=26,900
Y=27,000
X=-41,500
X=-41,600
X=-41,700
X=-41,800
D区
C区
A区
B区
0
1:1500
100m

第３図　遺跡周辺の地形

３　遺跡周辺の歴史的環境

（１）矢巾町の遺跡

平成22年３月現在、岩手県教育委員会が作成した『岩手県遺跡情報検索システム（盛岡地方振興局管内)』によれば、矢巾町内では161箇所の遺跡が登録されている。時代別にみると旧石器時代の遺跡はなく、縄文時代38遺跡、古代85遺跡、中世８遺跡、近世４遺跡で、複数の時代に重複する遺跡を含めると縄文時代56遺跡、古代102遺跡、中世10遺跡、近世７遺跡で、遺跡全体数の約63％が古代に関連する遺跡で、次いで縄文時代35％、中世６％、近世４％となっている。

地勢でみると、西部の山岳地帯から東部に広がる洪積台地上には縄文時代の遺跡が多く確認されている。また、北谷地山、城内山などの残丘には中世の城館跡がある。一方で、古代の遺跡は洪積台地上には少なく、北上川の流路移動により形成された沖積地上に多く分布し、反対に縄文時代の遺跡は少ない傾向にある。

弥生時代は遺構が見つかった遺跡はなく、大渡野遺跡、山王茶屋遺跡で土器や石器が出土しているが遺跡数は少ない。

以降、７世紀前半代までの遺跡は見つかっておらず、７世紀後半期には藤沢狄森古墳群がある。古墳群は徳丹城の北１㎞の藤沢地区に所在し、徳丹城同様、北上川右岸に沿って連なる島状の低位段丘上に載っている。県内でも有数の大古墳群で、現在67基を調査しているが、段丘全体では300基以上の古墳が存在するものと推定されている。古墳は、基本的には円墳であり、墳丘の周囲に溝を巡らす。出土遺物には須恵器、土師器、玉類、錫製品、青銅製品、鉄製品、青銅製品、鉄製品、土製品、石製品、漆器などの遺物がある。

史跡徳丹城は、西暦812～813（弘仁３～４）年頃、征夷将軍文室綿麻呂によって造られた「律令国家最後の城柵」で、これまでの蝦夷征伐の中心であった志波城が水難に見まわれたことにより、南約10㎞離れたこの場所に移築されたものである。1969（昭和44）年に国指定史跡となったこの遺跡は、これまでに70次の発掘調査が行われ、政庁跡や運河跡の遺構や木製兜の出土など貴重な発見がされている。また、平成８年の第42次調査を機に徳丹城よりも古い時期の官衙遺跡が、徳丹城の東門付近を中心に発見された。規模は一片150ｍで、形状は平行四辺形を呈し、内部からは大形の建物跡、井戸、広場、各種工房跡、竪穴住居跡などが配置されるが、徳丹城の施設が完成していくとともに、それらの施設が撤去されていることから、徳丹城の造営に関わり、これに先行する官衙であった可能性が考えられている。

12世紀の遺跡では城内山頂遺跡があり、渥美袈裟襷紋壺が出土している。また高田館跡からも12世紀代の渥美大甕が出土している。

中世の遺跡は西部山岳地帯に多く、金壺山より北東に鳶ヶ平Ⅱ遺跡、城内山の東山麓に煙山館、北谷地山一帯には伝法寺館、釈迦堂跡、岩清水館、北谷地山南東斜面遺跡、舘前遺跡などがある。このうち伝法寺館跡では発掘調査が行われ、15～16世紀の輸入陶磁器、銭貨が出土している。また他にも輸入陶磁器や銭貨などが出土し、15～16世紀頃の遺跡と考えられる高田館跡がある。

近世の遺跡には盛岡城下から志和稲荷神社（1057年の創建と伝えられる）へ参拝するための街道で、天保５－６年（1834－1835年）に盛岡藩第12代藩主、南部利済により整備されたとされる稲荷街道に稲荷街道松並木遺跡、稲荷街道井戸跡がある。街道の様子が描かれている絵図が盛岡市都南歴史民俗資料館に収蔵されており、当時の活況をその絵から読み取ることができる。他には赤林一里塚、和味一里塚、間野々一里塚の塚跡、中世城館の白沢館、縄文時代との複合遺跡である柳原遺跡などがある。

（2）周 辺 の 遺 跡

高畑遺跡のある下矢次地区周辺には、他に茨垣遺跡（縄文・古代）、欠堰遺跡（縄文後期）が知られているが、いずれも本格的な発掘調査は行われていない。北側に隣接する赤林地区や南側に隣接する又兵エ新田地区では東北新幹線の建設に伴う開発により、昭和47～48年に赤林地区の下赤林Ⅰ遺跡・下赤林Ⅱ遺跡・下赤林Ⅲ遺跡、昭和49年の調査には又兵エ新田地区の又兵エ新田遺跡の一部においてそれぞれ調査が行われた。また、この建設工事に伴って本遺跡の一部も調査が行われた。以下、その調査結果である。

又兵エ新田遺跡（紫波郡矢巾町大字又兵エ新田60- 1ほか）
　調査期間・・・昭和49年10月18日
　調査面積・・・2,080㎡
　検出遺構・・・なし。
　出土遺物・・・土師器坏片２点。

高畑遺跡（紫波郡矢巾町下矢次第４地割字松ノ木ほか）
　調査期間・・・昭和47年11月24日～12月２日
　調査面積・・・640㎡。
　検出遺構・・・なし。
　出土遺物・・・土師器坏片４点、土師器甕片33点、須恵器坏片６点。

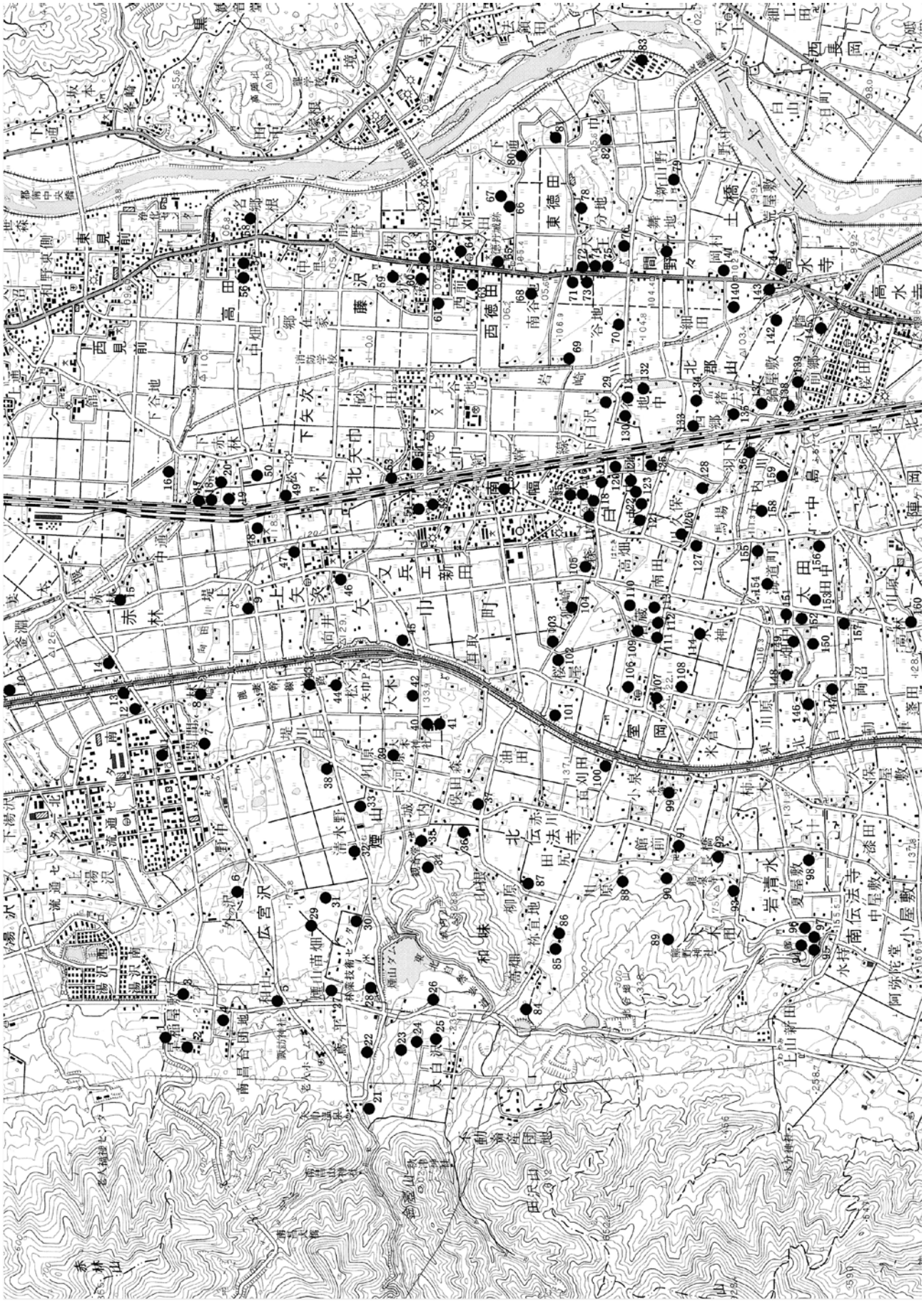
下赤林Ⅰ遺跡（紫波郡矢巾町大字赤林第15地割字茨垣ほか）
　調査期間・・・昭和47年10月25日～12月16日
　調査面積・・・2,720㎡
　検出遺構・・・竪穴住居跡１棟、土坑10基、焼土遺構１基。
　出土遺物・・・土師器・須恵器の坏・甕破片。

下赤林Ⅱ遺跡（紫波郡矢巾町大字赤林第15地割字茨垣71-1ほか）
　調査期間・・・昭和48年11月13日～12月19日
　調査面積・・・3,200㎡
　検出遺構・・・土坑３基。（小土坑２基含む。）
　出土遺物・・・土師器坏・甕、剥片石器、砥石、フイゴ羽口。

下赤林Ⅲ遺跡（紫波郡矢巾町大字赤林第12地割字的場ほか）
　調査期間・・・昭和47年12月２日～12月18日
　調査面積・・・2,560㎡
　検出遺構・・・なし。
　出土遺物・・・土師器甕片３点、須恵器甕片１点、石器26点。

参考文献

岩手県教育委員会　1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅲ』岩手県文化財調査報告書第35集



第４図　周辺の遺跡分布図

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	所在地
1	早稲屋敷Ⅰ	散布地	縄文	大字広宮沢第1地割字早稲屋敷
2	早稲屋敷Ⅱ	散布地	縄文	大字広宮沢第1地割字早稲屋敷
3	早稲屋敷Ⅲ	散布地	縄文	大字広宮沢第1地割字早稲屋敷
4	楢木立	散布地	縄文	大字広宮沢第1地割字早稲屋敷
5	和山	散布地	古代	大字広宮沢第1地割字早稲屋敷
6	夏明	集落跡	縄文	大字広宮沢第4地割字夏明
7	天戸	集落跡	平安	大字広宮沢第6地割字宮田
8	宮田	キャンプ地	古代	大字広宮沢第6地割字宮田
9	南野	キャンプ地	縄文	大字広宮沢第8地割字南野
10	一本松	キャンプ地	平安	大字赤林第1地割字一本松
11	野田新田	散布地	縄文	流通センター南2丁目
12	大渡野Ⅱ	キャンプ地	縄文	大字赤林第5地割字大渡野
13	大渡野Ⅰ	散布地	古代・縄文	大字赤林第5地割字大渡野
14	赤林一里塚	塚跡	江戸	大字赤林第5地割字大渡野
15	上浅子	散布地	古代	大字赤林第7地割字上浅子
16	下赤林Ⅳ	散布地		大字赤林第17地割字林崎
17	下赤林Ⅲ	キャンプ地	縄文	大字赤林第12地割字的場
18	下赤林Ⅱ	集落跡	古代	大字赤林第15地割字茨垣
19	下赤林Ⅰ	集落跡	古代	大字赤林第15地割字茨垣
20	赤林	散布地	縄文	大字赤林第16地割字前郷
21	鳶ヶ平Ⅱ	城館跡	中世	大字煙山第2地割字鳶ヶ原
22	鳶ケ平	集落跡	縄文	大字煙山第2地割字鳶ケ平
23	月ケ森Ⅱ	集落跡	縄文	大字煙山第5地割字六串田
24	月ケ森Ⅰ	集落跡	縄文	大字煙山第5地割字六串田
25	月ケ森祭葬	祭祀跡	縄文	大字煙山第5地割字六串田
26	和味一里塚	塚跡	江戸	大字煙山第5地割字大串田
27	和山Ⅱ	散布地	縄文	大字煙山第3地割字清水
28	稲荷街道井戸跡	井戸跡、散布地	縄文・江戸	大字煙山第2地割字鳶ケ平
29	稲荷街道松並木	街道跡	江戸	大字煙山第3地割字清水
30	和山Ⅳ	散布地	縄文	大字煙山第4地割字川原
31	和山Ⅲ	散布地	縄文	大字煙山第3地割字清水
32	谷地苗圃	散布地	縄文（後期）	大字煙山第3地割字清水
33	清水野	集落跡	縄文	大字煙山第4地割字川原
34	煙山館	城館跡	中世	大字煙山第6地割字高田
35	町	散布地	縄文（中期）	大字煙山第9地割字町
36	石切茶屋西方	散布地	古代	大字和味第14地割字小倉
37	油田	散布地		大字北伝法寺第10地割字油田
38	山王茶屋	散布地	縄文	大字煙山第3地割字清水
39	大木Ⅰ	散布地	縄文	大字煙山第11地割字田屋
40	大木Ⅱ	散布地	縄文	大字煙山第11地割字田屋
41	田屋	散布地	縄文	大字煙山第24地割字耳取
42	山道	散布地	縄文	大字煙山第22地割字山道
43	大道	散布地	縄文	大字煙山第18地割字大道
44	煙山Ⅰ	キャンプ地	古代	大字煙山第19地割字松ノ木
45	上矢次Ⅱ	キャンプ地	縄文	大字上矢次第1地割字伝戸
46	上矢次Ⅰ	キャンプ地	古代	大字上矢次第3地割字向井

No.	遺跡名	種別	時代	所在地
47	木代	散布地	平安	大字上矢次第7地割字木代
48	欠堰	散布地	縄文	大字下矢次第6地割字欠堰
49	高畑	散布地	縄文・古代	大字下矢次第1地割字柳原
50	茨垣	集落跡	縄文・古代	大字下矢次第6地割字欠堰
51	下海老沼	散布地	縄文・奈良・平安	大字又兵エ新田第4地割字下海老沼
52	明堂	散布地	縄文・奈良・平安	大字又兵エ新田第5地割字明堂
53	又兵エ新田	集落跡	平安	大字又兵エ新田第4地割字下海老沼
54	南矢巾	散布地	古代	大字又兵ェ新田第6地割字谷地
55	中村	散布地	古代	大字南矢幅第8地割字中村
56	高田	散布地	古代	大字高田第12地割字北田
57	高田館（吉兵衛館）	城館跡	中世・古代	大字高田第12地割字北田
58	高田幅	散布地	古代	大字高田第14地割字名郷根
59	藤沢狄森古墳群	古墳	古代	大字藤沢第6地割字畑中
60	矢巾口	散布地	古代	大字西徳田第5地割字田郷
61	田郷	散布地	古代	大字西徳田第5地割字田郷
62	白山堂	散布地	古代	大字西徳田第6地割字五百刈田
63	西前	散布地	古代	大字西徳田第3地割字西前
64	館畑	散布地	古代	大字西徳田第6地割字五百刈田
65	徳丹城	官衙跡	古代	大字西徳田第6地割字五百刈田
66	川村	散布地	古代	大字東徳田第10地割字川村
67	徳丹城運河跡	運河跡	平安	大字西徳田第7地割字風張229・230・233ほか
68	南谷地	城館跡	古代	大字東徳田第6地割字谷地
69	十文字	散布地	平安	大字東徳田第3地割字十文字
70	谷地	散布地	縄文・古代	大字間野々第3地割字南谷地
71	間野々一里塚	塚跡	江戸	大字間野々第1地割字北谷地
72	間野々Ⅱ	散布地	古代	大字間野々第13地割字塚
73	間野々Ⅰ	散布地	古代	大字間野々第1地割字北谷地
74	間野々Ⅲ	散布地	古代	大字間野々第13地割字塚
75	間野々Ⅳ	散布地	古代	大字間野々第13地割字塚
76	（天王）	散布地	縄文・平安	大字間野々第18地割字天王
77	舞地	散布地	平安	大字間野々第12地割字定法田
78	（重島）	散布地	平安	大字間野々第15地割字重島
79	（新山）	散布地	平安	大字土橋第5地割字新山
80	下通	散布地	縄文・古代	大字東徳田第11地割字下通
81	渋川	集落跡	古代	大字東徳田第12地割字幅
82	（常光坊）	散布地	縄文・平安	大字東徳田第13地割字常光坊
83	権現堂	集落跡	古代	大字土橋第3地割字下袋
84	町場	散布地	縄文	大字和味第4地割字町場
85	称宜地Ⅰ	散布地	縄文	大字和味第7地割字称宜地
86	称宜地Ⅱ	散布地	縄文	大字和味第7地割字称宜地
87	柳原	散布地	縄文、近世	大字和味第10地割柳原57-1他
88	伝法寺館	城館跡	中世	大字和味第7地割字称宜地
89	北谷地山南東斜面	祭祀跡	中世	大字和味第7地割字称宜地
90	釈迦堂跡	祭祀跡	中世？	大字和味第7地割字称宜地
91	舘前	城館跡	中世	大字北伝法寺第1地割字長橋
92	長仙寺院	散布地		大字岩清水第4地割字長橋

No.	遺跡名	種別	時代	所在地
93	岩清水Ⅰ	キャンプ地		大字岩清水第4地割字長橋
94	(岩清水館)	城館跡・集落跡	中世	大字岩清水第1地割字城内
95	岩清水Ⅳ	キャンプ地		大字岩清水第6地割字夏屋敷
96	岩清水Ⅱ	キャンプ地	縄文	大字岩清水第1地割字城内
97	岩清水Ⅲ	キャンプ地	縄文	大字岩清水第6地割字夏屋敷
98	上横枕	散布地	古代	大字岩清水第7地割字上横枕
99	小泉	散布地	古代	大字北伝法寺第1地割字長橋
100	室岡館(久保屋敷)	城館跡	中世	大字室岡第5地割字久保
101	桜屋	散布地	古代	大字北伝法寺第15地割字間明田
102	下煙山	キャンプ地	古代	大字煙山第27地割字赤森
103	煙山	集落跡	古代	大字煙山第27地割字赤森
104	細屋	散布地	古代	大字煙山第29地割字九田坊
105	白沢森	散布地	縄文	大字白沢第6地割字森
106	室岡Ⅲ	キャンプ地	古代	大字室岡第11地割字金屋
107	室岡Ⅱ	キャンプ地	古代	大字室岡第12地割字金屋
108	室岡Ⅰ	集落跡	古代	大字室岡第9地割字米倉
109	白沢Ⅲ	集落跡	古代	大字白沢第8地割字石堂
110	白沢Ⅱ	集落跡	古代	大字白沢第8地割字石堂
111	石蔵Ⅱ	散布地	古代	大字白沢第10地割字石蔵
112	石蔵	散布地	古代	大字白沢第10地割字石蔵
113	白沢Ⅰ	集落跡	古代	大字白沢第10地割字石蔵
114	太田Ⅷ	集落跡	古代	大字太田第5地割字谷地館
115	熊田Ⅲ	散布地	縄文	大字白沢第5地割字熊田
116	熊田Ⅱ	散布地	縄文	大字白沢第5地割字熊田
117	白沢館	城館跡	中～近世	大字白沢第5地割字熊田
118	熊田Ⅰ	散布地	縄文	大字白沢第5地割字熊田
119	白沢ⅩⅡ	集落跡	古代	大字白沢第4地割字土居場
120	白沢えぞ森古墳群	集落跡・古墳	縄文・古代	大字白沢第2地割字{¥森
121	白沢Ⅷ	集落跡	古代	大字白沢第4地割字土居場
122	白沢Ⅹ	集落跡	古代	大字白沢第4地割字土居場
123	白沢Ⅸ	集落跡、キャンプ地	縄文・古代	大字白沢第5地割字熊田
124	白沢ⅩⅠ	集落跡	古代	大字白沢第4地割字土居場
125	白沢ⅩⅢ	集落跡	古代	大字白沢第4地割字土居場
126	白沢Ⅶ	集落跡	古代	大字白沢第12地割川久保
127	不動馬場	集落跡	縄文・古代	大字白沢第14地割字馬場
128	羽下	集落跡	縄文・古代	大字白沢第13地割字羽下
129	姥谷地	散布地	古代	大字北郡山第6地割字飯島
130	白沢ⅩⅣ	城館跡	古代	大字白沢第2地割字{¥森
131	白沢ⅩⅤ	散布地	古代(平安)	大字白沢第2地割字{¥森
132	谷地中Ⅰ	散布地	古代	大字北郡山第2地割字谷地中
133	飯島Ⅱ	集落跡	古代	大字北郡山第6地割字飯島
134	飯島Ⅰ	散布地	古代	大字北郡山第6地割字飯島
135	柳田Ⅰ	散布地	古代	大字北郡山第12地割字柳田
136	北郡山Ⅰ	散布地	古代	大字北郡山第10地割字糠屋敷
137	柳田Ⅱ	散布地	古代	大字北郡山第12地割字柳田
138	樋口	散布地	古代	大字北郡山第14地割字樋口

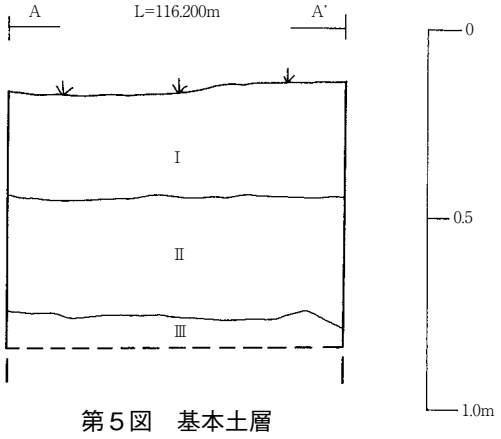
No.	遺跡名	種別	時代	所在地
139	田中	散布地	古代	大字北郡山第15地割字蓬田
140	岡村	散布地	古代	大字間野々第9地割字岡村
141	西田	散布地	古代	大字間野々第10地割字西田
142	北郡山Ⅱ	城館跡	古代	大字北郡山第18地割字町田
143	井島	散布地	古代	大字土橋第10地割字井島
144	高水寺	散布地	古代	大字土橋第9地割字三枚橋
145	蓬田	散布地	古代	大字北郡山第15地割字蓬田
146	太田I	集落跡	縄文・古代	大字太田第1地割字三合
147	三合	散布地	古代	大字太田第1地割字三合
148	太田Ⅱ	集落跡	古代	大字太田第2地割字大畑
149	太田Ⅴ	集落跡、キャンプ地	縄文・古代	大字太田第12地割字後田
150	太田Ⅳ	集落跡	古代	大字太田第13地割字中屋敷
151	杉の下	散布地	古代	大字太田第11地割字杉ノ下
152	両沼Ⅲ	集落跡	古代	大字太田第13地割字中屋敷
153	太田Ⅵ	集落跡	古代	大字太田第14地割字畑中
154	太田Ⅶ	集落跡	古代	大字太田第11地割字杉ノ下
155	太田Ⅸ	集落跡	古代	大字太田第8地割字高畑
156	太田ⅩⅡ	散布地	古代	大字太田第10地割字海道町
157	太田Ⅲ	集落跡、キャンプ地	縄文・古代	大字太田第15地割字南太田
158	太田Ⅹ	集落跡	古代	大字太田第8地割字高畑
159	太田ⅩⅠ	集落跡	古代	大字太田第8地割字高畑
160	太田川原	散布地	縄文	大字太田第16地割字高林

4　基　本　土　層

岩崎川によって形成された沖積段丘上にあり、調査前の現況は主に水田と農道で、Ａ区の一部に約１ｍの盛土が施された場所がある。現況は開田時の造成により、おおよそ平坦な地形を呈しているが、旧地形は旧沢跡の一部が確認されるなど、起伏があった地形であったことが調査で明らかになった。調査にあたっては開田時の造成工事によって古代の遺構検出面の大半が削平されている状況であったが、その下層にある縄文面（Ⅱ層）はＡ区とＣ区の一部で確認され、少量の遺物が出土した。

基本土層は調査区全体で最も土層の残りが良いＡ区の北壁（ⅡＡ17ｙグリッド）に観察のためのトレンチを設置し、記録した。

Ⅰ　10YR3/1 黒褐色粘土 粘性・しまりあり
　　旧耕作土。
Ⅱ　10YR2/1 黒色シルト 粘性・しまりあり
　　炭化物微量（１％未満）含む。
　　縄文～古代の遺物を含む。
Ⅲ　10YR8/1 灰白色粘土 しまりあり 地山。
　　地点により10YR8/4 ～ 7/6に変色。



第５図　基本土層

Ⅲ　調査の経過と方法

１　野外調査の経緯

平成22年５月６日　　調査開始。現場設営・環境整備。
５月10日　　重機による表土除去を開始する。（～５月31日まで順次）
５月17日　　基準点の設置。
６月23日　　終了確認を実施。
６月25日　　航空写真撮影実施。
６月29日　　重機による埋め戻し作業を開始する。（～７月２日まで）
７月２日　　調査終了。現場撤収。
（＊終了確認は委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの３者による）

２　野外調査の方法

（１）グリッドの設定

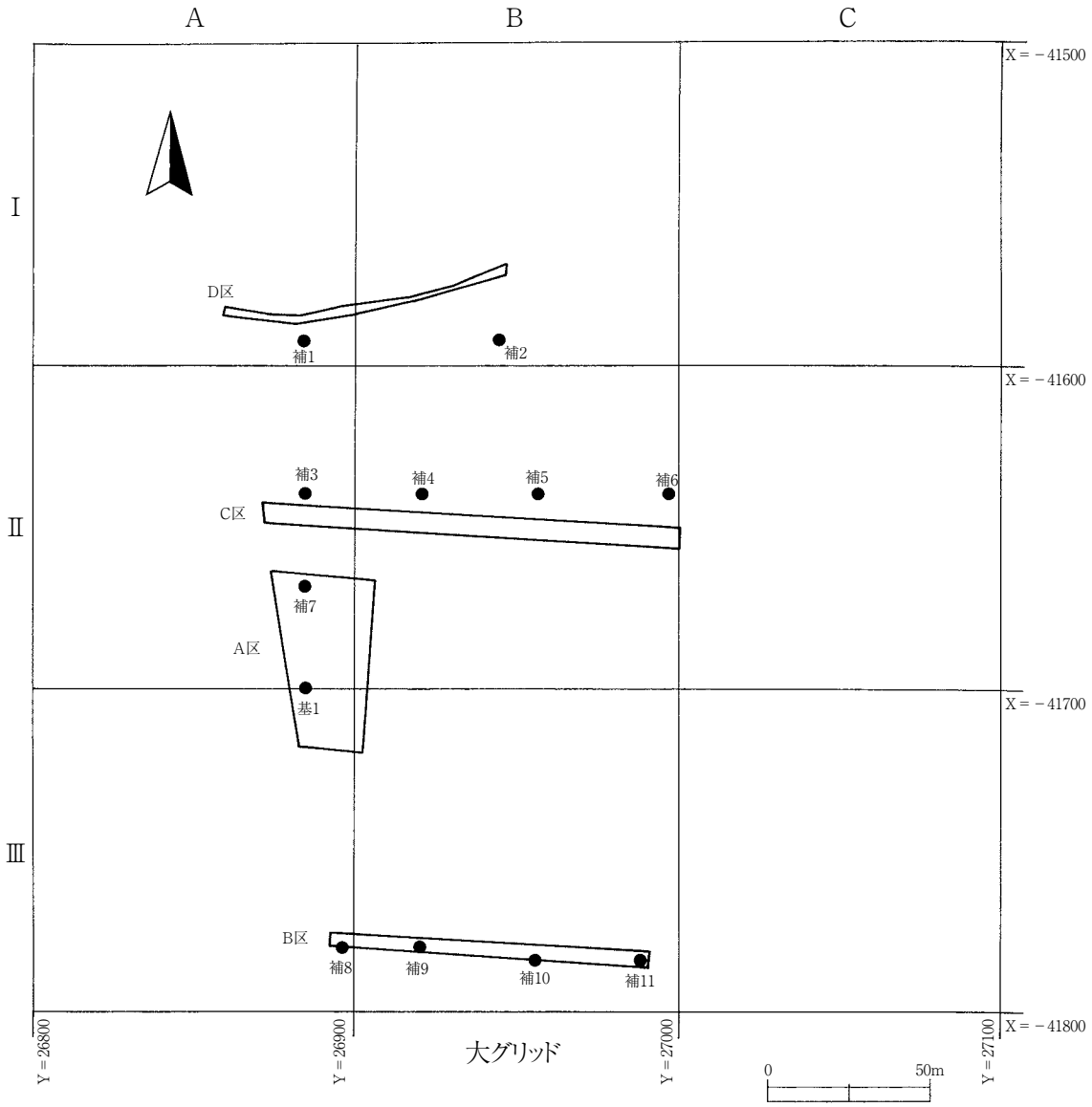
平面直角座標第Ｘ系のＸ＝－41,500.000、Ｙ＝26,800.000を原点として100×100ｍの大グリッドを設定し、これを25等分し、４×４ｍの小グリッドとしている。大グリッドの呼称は原点を起点に南方向へⅠ～Ⅸ、東方向へＡ～Ｌ、小グリッドの呼称は南方向へ１～25、東方向へａ～ｙとしている。小グリッドの呼称はＩＡ１ａとなる。

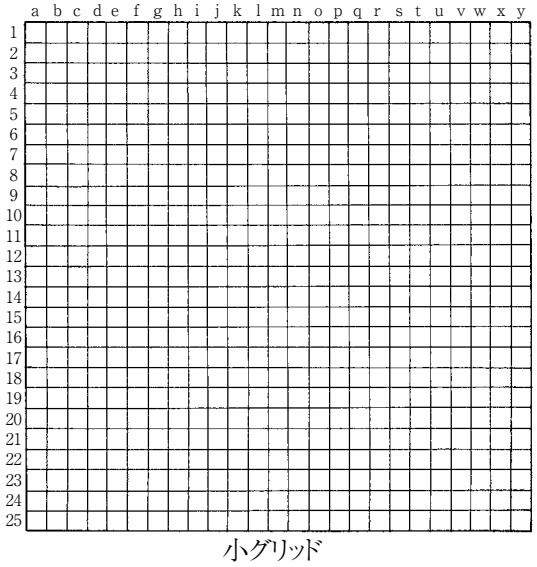
（２）基準点の設定

遺構の実測に利用するため調査区内に基準点および補助点を北光コンサル株式会社に委託して打設した。座標値はいずれも世界測地系によるもので、各遺跡の基準点および補助点の成果値と杭高は以下のとおりである。

第２表　基準点・補助点一覧表

点名	X座標値	Y座標値	Z座標値	点名	X座標値	Y座標値	Z座標値
基準点1	-41700	26884	116.041	補助点6	-41640	26996	115.459
補助点1	-41592	26884	116.247	補助点7	-41668	26884	116.078
補助点2	-41592	26944	115.961	補助点8	-41780	26896	115.837
補助点3	-41640	26884	116.204	補助点9	-41780	26920	115.585
補助点4	-41640	26920	115.937	補助点10	-41784	26956	115.362
補助点5	-41640	26956	115.833	補助点11	-41784	26988	114.929


A
B
C
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
X＝－41500
X＝－41600
X＝－41700
X＝－41800
D区
補1
補2
補3
補4
補5
補6
C区
補7
A区
基1
B区
補8
補9
補10
補11
Y＝26800
Y＝26900
Y＝27000
Y＝27100
大グリッド
0
50m


a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
小グリッド

第６図　グリッド配置図

（３）表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の水田・畑・未舗装道路などに盛土・耕作土が厚く堆積し、その下に古代の遺構・遺物が包蔵されているのが確認された。また、調査に先立って行った現地確認の際にも水田の耕作土に古代の土器片が多数混入しているのが確認された。そのため、表土除去は重機で行い、その後は人力による遺構検出を行った。また、人力による検出作業で古代の遺構・遺物がない箇所についてはさらに重機で下層まで掘り下げ、縄文時代の遺構・遺物の有無を確認した。

（４）遺構の精査と実測

調査で検出された遺構は以下の手順で調査を進めた。

土坑・墓壙は２分法で精査を行い、溝は適宜に土層確認用の断面ベルトを残し、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。柱穴状土坑については検出時に柱痕を確認し、平面図作成（株式会社ＣＵＢＩＣの遺構実測支援システムによる）後、セクションベルトを設け、断面確認→完掘の順で作業を行った。井戸跡は湧水のため、断面は写真撮影・実測は行わず、土層注記による記録に留めた。

（５）遺物の取り上げ方

遺物の取り上げは遺構内と遺構外に大別し、遺構内出土遺物については遺構名と相対的層位（検出面・上位・中位・下位・底面）を記し、遺構外出土遺物についてはグリッドおよび出土層位を記して取り上げたが、この際、グリッドを跨いで取り上げたものについてはグリッド名を複数記した。また、取り上げに際しては事前に必要に応じて平面図の作成および写真撮影を行っている。

（６）写　真　撮　影

調査記録用にデジタル一眼レフカメラ（Canon　EOS　50D）１台、モノクローム６×７㎝版カメラ１台を使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、調査期間中にセスナ機による航空写真撮影を実施した。

３　室内整理の手順と方法

（１）作　業　経　過

各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は出土遺物の洗浄と遺物の仕分けは野外調査と平行して現地および室内で行った。また、土器の接合・復元作業・実測図作成・拓影作成などの作業は室内で行った。整理担当者はこれらの作業の確認・点検と平行して、図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

（２）遺　　物

現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、続いて接合・復元を行った。その過程で本書に掲載するものを抽出し、それらの実測図を作成、トレースした。抽出にあたっては遺構内のものについては小破片でもなるべく掲載するようにした。遺構外のものについては出土地点・層位などを考慮して選別した。実測と平行して、これらを撮影し、合わせて登録作業を行った。

（３）遺　　構

実測図を点検･合成しながら遺構の検討を行った。その後、第２原図を作成し、そのトレースを行った。また、野外調査で撮影した遺構の写真も整理し、台帳登録をしている。その後、掲載するものを抽出し、トリミングなどを行った後に写真図版とした。

（４）掲　載　図

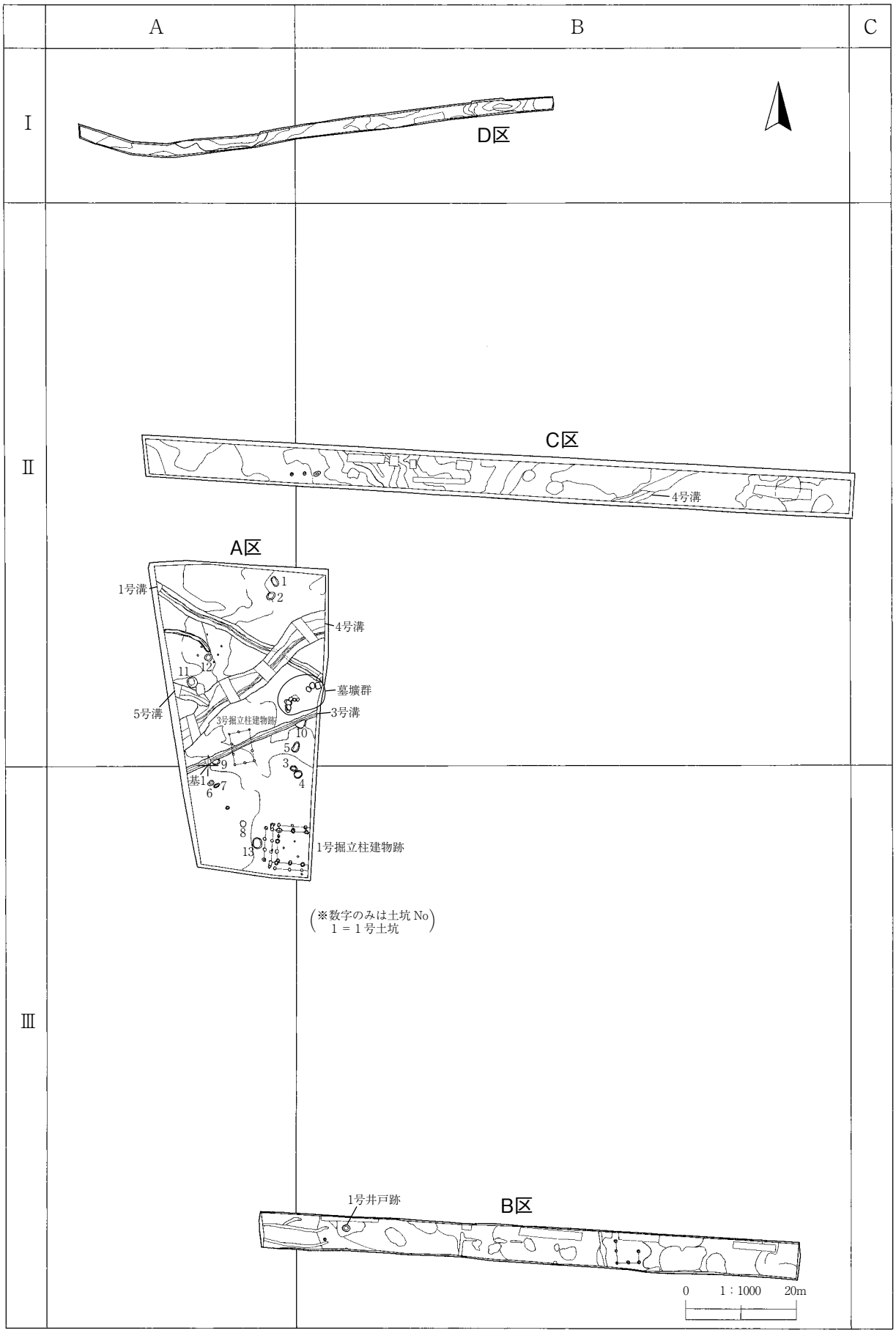
掲載している遺構の縮尺は平面図・断面図ともに土坑・墓壙・井戸跡・柱穴状土坑は平面図・断面図ともに１/40、溝跡は平面図は1/40～1/250、断面図は1/40とした。また、遺物掲載縮尺は土器・礫石器は1/3、剥片石器・金属遺物・古銭は2/3、他は1/2をとした。ただし、一部異なるものもあるため、各図にスケールおよび縮尺を付した。写真図版については縮尺不定である。また、図中において掘立柱建物跡・柱穴列を含む柱穴状土坑は「Ｐ」、土器は「Ｐ」、石器・礫は「Ｓ」、遺構内出土の掲載遺物は（　）内に掲載番号を表記した。スクリーントーンの使用は凡例図のとおりであるが、これ以外の使用については使用箇所に用例を表記した。各遺構の計測値表記については土坑類は長軸×短軸である。

（５）遺 構 の 名 称

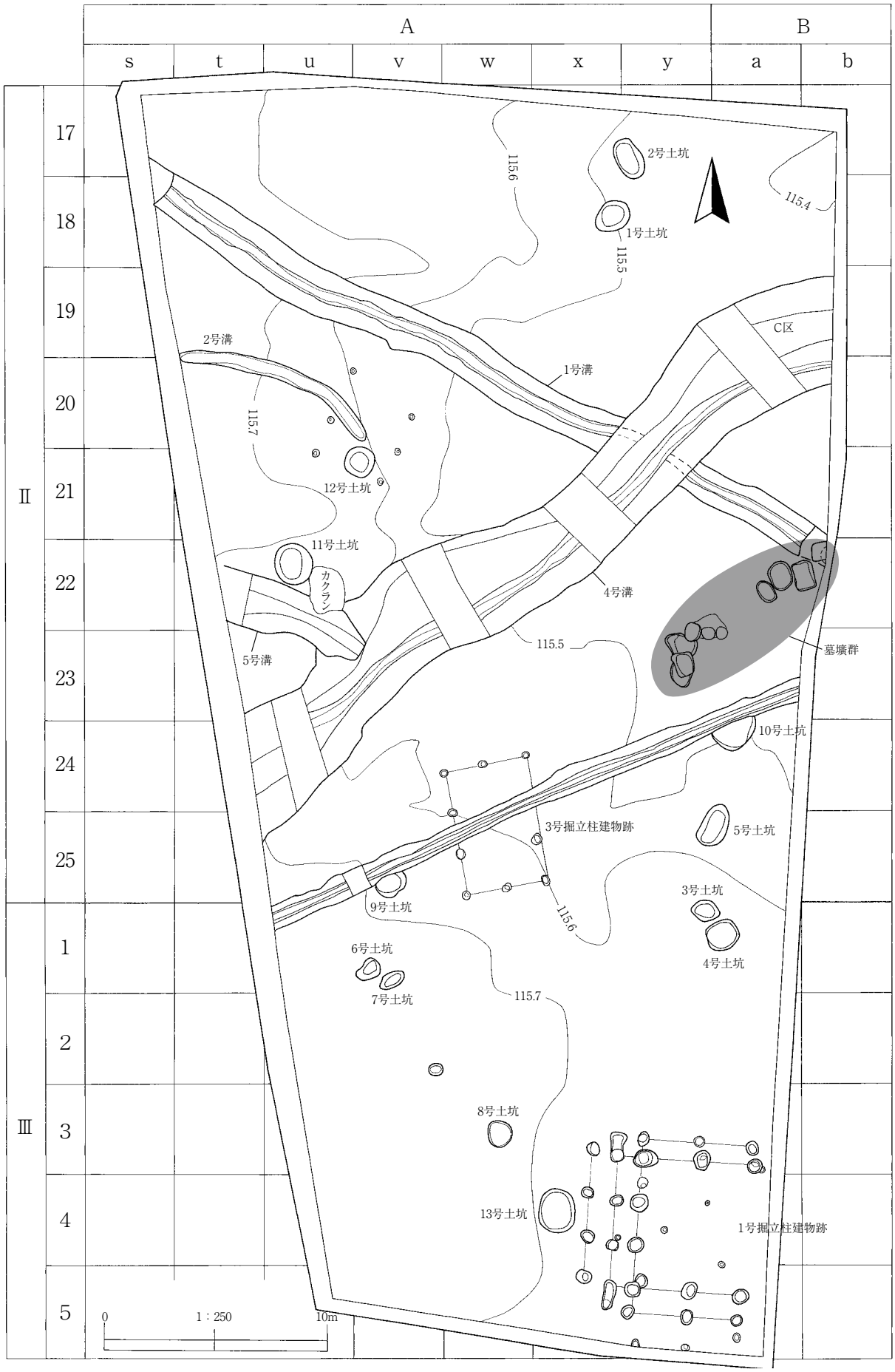
調査時においては検出、および精査順に遺構名を付したが、調査途中で遺構でないものも多くあったため、報告書掲載時に遺構名を変更した。変更前と変更後の名称は以下の表のとおりである。

第３表　遺構名対応表

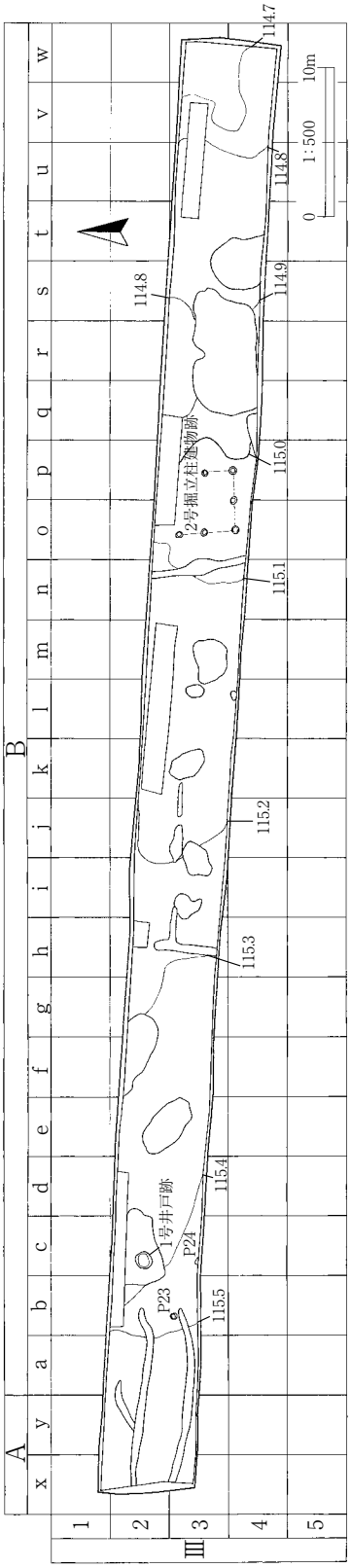
旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名	旧遺構名	掲載遺構名
1号土坑	1号土坑	8号墓	8号墓壙	P21	P21	P47	P47
2号土坑	2号土坑	9号墓	9号墓壙	P22	P22	P48	P48
3号土坑	3号土坑	10号墓	10号墓壙	P23	P23	P49	P49
4号土坑	4号土坑	11号墓	11号墓壙	P24	P24	P50	P50
5号土坑	5号土坑	12号墓	12号墓壙	P25	P25	P51	P51
6号土坑	6号土坑	P1	P1	P26	P26	P52	P52
7号土坑	7号土坑	P2	P2	P27	P27	P61	P53
8号土坑	8号土坑	P3	P3	P28	P28	P62	P54
9号土坑	9号土坑	P4	P4	P29	P29	P63	P55
10号土坑	10号土坑	P5	P5	P30	P30	P64	P56
14号土坑	11号土坑	P6	P6	P33	P31	P65	P57
15号土坑	12号土坑	P7	P7	P34	P32	P66	P58
13号土坑	13号土坑	P8	P8	P35	P33	P67	P59
1号井戸	1号井戸	P9	P9	P37	P34	P68	P60
1号溝	1号溝跡	P10	P10	P53	P35	P69	P61
2号溝	2号溝跡	P11	P11	P54	P36	11号土坑	ⅢB4l（撹乱）
3号溝	3号溝跡	P12	P12	P55	P37	12号土坑	ⅢB3l（撹乱）
沢跡→4号溝	4号溝跡	P13	P13	P56	P38	P31	C区（撹乱）
5号溝	5号溝跡	P14	P14	P57	P39	P32	〃
1号墓	1号墓壙	P15	P15	P58	P40	P36	〃
2号墓	2号墓壙	P16	P16	P59	P41	P38	〃
3号墓	3号墓壙	P17	P17	P60	P42	P39	〃
4号墓	4号墓壙	P18	P18	P43	P43	P40	〃
5号墓	5号墓壙	P19	P19	P44	P44	P41	〃
6号墓	6号墓壙	P19	P19	P45	P45	P42	〃
7号墓	7号墓壙	P20	P20	P46	P46		


A
B
C
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
D区
C区
4号溝
A区
1号溝
4号溝
墓壙群
5号溝
3号溝
3号掘立柱建物跡
基1
1号掘立柱建物跡
（※数字のみは土坑 No
1 ＝ 1 号土坑）
1号井戸跡
B区
0
1：1000
20m

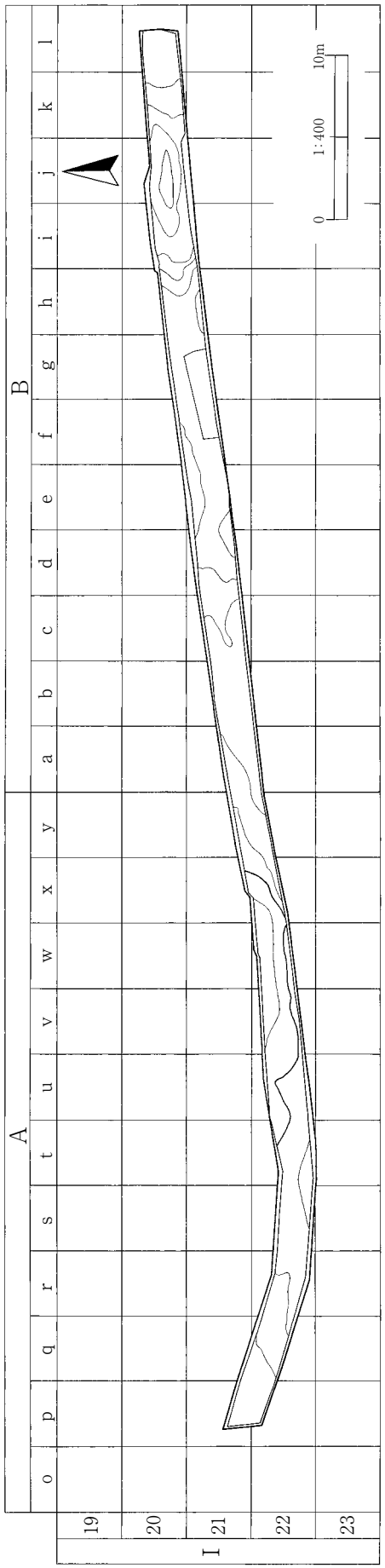
第７図　遺構配置図（全体）


A
B
s
t
u
v
w
x
y
a
b
Ⅱ
Ⅲ
17
18
19
20
21
22
23
24
25
1
2
3
4
5
2号土坑
1号土坑
115.6
115.5
115.4
C区
2号溝
1号溝
115.7
12号土坑
11号土坑
カクラン
4号溝
5号溝
115.5
墓壙群
10号土坑
3号掘立柱建物跡
5号土坑
3号土坑
9号土坑
115.6
4号土坑
6号土坑
7号土坑
115.7
8号土坑
13号土坑
1号掘立柱建物跡
0
1：250
10m

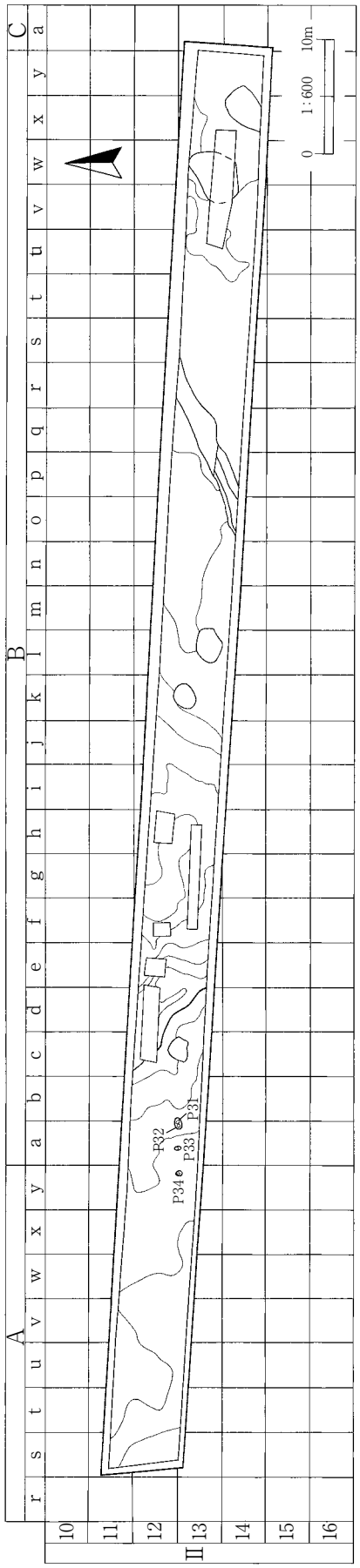
第８図　遺構配置図（Ａ区）


A
B
x
y
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
q
r
s
t
u
v
w
1
2
3
4
5
Ⅲ
1号井戸跡
2号掘立柱建物跡
P23
P24
114.7
114.8
114.8
114.9
115.0
115.1
115.2
115.3
115.4
115.5
0
1:500
10m

第９図　遺構配置図（Ｂ区）



(D区)



(C区)

第10図　遺構配置図（C・D区）

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

１　調 査 の 概 要

検出遺構は、土坑13基、溝５条、掘立柱建物３棟、墓壙12基、井戸跡１基、柱穴状土坑24個である。また、遺構ではないが、風倒木痕に起因すると考えられる撹乱に焼土が多く混入していた。

２　検出した遺構と遺物

（１）土　　坑

13基検出した。いずれもＡ区で見つかり、形状は円形、楕円形、不整形と様々である。１・６・７・９・10・13号土坑からは古代の土器片が出土している。

１号土坑（第11図、写真図版４）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＡ18ｘ・18ｙグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形を呈し、規模は開口部径170×128㎝、底部径102×98㎝、深さは36㎝である。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で３層に分かれる。上位は黒色シルト、中位は黒褐色シルト、下位は暗褐色シルトを主体とする層である。
＜遺物＞　埋土から土師器片が出土したが、小片のため図化にはいたらなかった。
時期　出土した遺物から古代の遺構と考えられる。

２号土坑（第11図、写真図版４）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＡ17ｘ・17ｙ・18ｙグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は不整な楕円状を呈し、規模は開口部径180×112㎝、底部径142×80㎝、深さは36㎝である。
＜埋土＞　埋土は黒色シルト主体の単層で、層中ににぶい黄燈色シルト粒を少量含む。
＜遺物＞　なし。
時期　出土した遺物がないため、詳細は不明である。

３号土坑（第11図、写真図版４）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ25ｙ、ⅢＡ１ｙ、ⅢＢ１ａグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　不整な形状で、規模は開口部径134×92㎝、底部径88×64㎝、深さは18㎝である。
＜埋土＞　埋土の大半が黒褐色シルトで、壁面付近に褐灰色シルトを含む浅黄燈色粘土層が堆積している。
＜遺物＞　なし。
時期　出土した遺物がないため、詳細は不明である。

４号土坑（第11図、写真図版４）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＢ１ａグリッドに位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は不整な円形で、規模は開口部径142×128㎝、底部径124×108㎝、深さは９㎝である。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で上位は灰黄褐色シルトと灰白色粘土の混合土層、中位は黒褐色シルト主体の層、下位は浅黄燈色粘土を主体とする。
＜遺物＞　なし。
時期　出土した遺物がないため、詳細は不明である。

５号土坑（第11図、写真図版５）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ24ｙ・25ｙ、ⅢＢ24ｙ・25ｙグリッドに跨って位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は不整な円形で、規模は開口部径195×114㎝、底部径154×68㎝、深さは32㎝である。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で３層に分かれるが、主体は黒褐色シルトで中～下位ににぶい黄褐色シルトが混入している。
＜遺物＞　なし。
時期　出土した遺物がないため、詳細は不明である。

６号土坑（第12図、写真図版５）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＡ１ｖグリッドに位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は不整形で、規模は開口部径112×80㎝、底部径72×46㎝、深さは20㎝である。
＜埋土＞　埋土は６層に分かれるが、主体は黒褐色シルトで西側の一部に明黄褐色粘土が混入している。
＜遺物＞　埋土から土師器片が出土したが、小片のため図化にはいたらなかった。
時期　出土した遺物から平安時代の遺構と考えられる。

７号土坑（第12図、写真図版５）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＡ１ｖグリッドに位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径124×64㎝、底部径79×34㎝、深さは12㎝である。
＜埋土＞　埋土は２層に分かれ、西側が黒褐色シルトと灰黄色シルトの混合土層。東側が黒褐色シルトを主体とする層である。
＜遺物＞　埋土から土師器片が出土したが、小片のため図化にはいたらなかった。
時期　出土した遺物から平安時代の遺構と考えられる。

８号土坑（第12図、写真図版５）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＡ３ｗグリッドに位置する。Ⅱ層で検出し、重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は不整な円形基調で、規模は開口部径118×108㎝、底部径110×96㎝、深さは10㎝である。
＜埋土＞　埋土は２層に分かれるが、全体に黒褐色シルトを主体とする堆積で、中～下位に明黄褐色

シルトが混入している。
＜遺物＞　なし。
時期　出土した遺物がないため、詳細は不明である。

９号土坑（第12図、写真図版６）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ25ｖグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。３号溝と重複し、遺構の北半がこれに切られる。
＜形状･規模＞　形状は楕円形で､規模は３号溝に切られているため不明であるが､深さは23cmである。
＜埋土＞　５層に分かれる。大半が黒褐色シルトを主体とする層で、一部に黒色シルトとにぶい黄色粘土の混合土層がある。
＜遺物＞　１～３が出土した。土師器甕の破片で胴～底部の破片で同一個体の可能性が高い。底部は丸底の形状を呈し、器面の調整は外面がタタキメで内面にアテグ痕が確認できる。
時期　出土した土器から９世紀代前半の遺構と考えられる。

10号土坑（第12図、写真図版６）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ24ａグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。３号溝と重複し、遺構の北半がこれに切られる。
＜形状・規模＞　３号溝に切られているが、形状は円形と推測される。深さは14cmで、底面から土師器坏が出土した。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で２層に分かれる。上～中位は黒褐色シルト、下位は黒褐色粘土質シルト層による。
＜遺物＞　４・５が出土した。須恵器坏でいずれも遺構の底面からの出土であるが、一部破片は重複する３号溝の埋土に混入している。底部の切り離し技法は４は回転糸切、５は回転糸切後、ヘラケズリ調整を施している。
時期　出土した遺物から９世紀前半代の遺構と考えられる。

11号土坑（第13図、写真図版６）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ22ｕグリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。重複遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は円形基調で、規模は開口部径182×174cm、底部径126×100cm、深さは29cmである。
＜埋土＞　埋土は自然堆積で２層に分かれる。上～中位は黒色シルト、下位は黒褐色粘土質シルトを主体とする。
＜遺物＞　なし。
時期　不明である。

12号土坑（第13図、写真図版６）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ20ｖ・21ｕ・21ｖグリッドに位置する。Ⅱ層で検出した。重複する遺構はない。
＜形状・規模＞　形状は開口部位が円形、底面が楕円形を呈する。規模は開口部径136×128cm、底部径80×80cm、深さ24cmである。

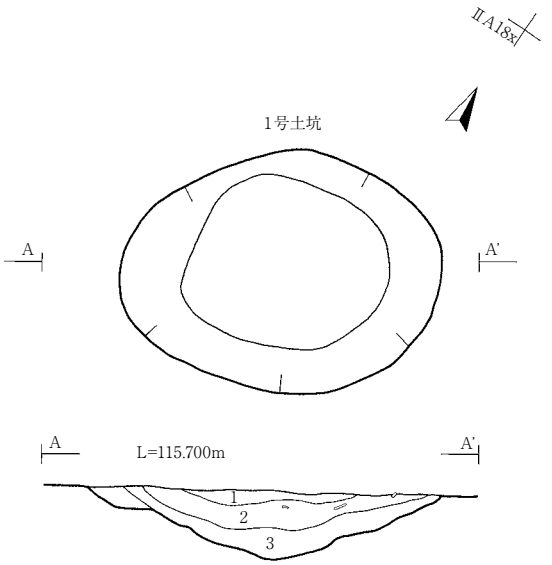
＜埋土＞　埋土は自然堆積で３層に分かれる。上位は黒色シルト、中～下位は黒褐色粘土質シルトと灰白色粘土の混合土層で中位ほど灰白色粘土の混合率が高い。
＜遺物＞　なし。
時期　不明である。

13号土坑（第13図、写真図版７）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅢＡ４ｘグリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。１号掘立柱建物跡に隣接するが、重複はしていない。
＜形状・規模＞　形状は楕円形で、規模は開口部径は184×164㎝、底部径は154×134㎝、深さは14㎝である。
＜底面＞　底面には焼土が176×114㎝の範囲で堆積している。
＜埋土＞　埋土は上～中位に褐色粘土・黒褐色シルト、下位には赤褐色焼土粒が堆積している。
＜遺物＞　６・７が埋土から出土した。６は須恵器坏で底部の切り離し技法は回転ヘラ切による。７は土師器甕の胴部破片である。
時期　出土した遺物から９世紀代の遺構と考えられる。

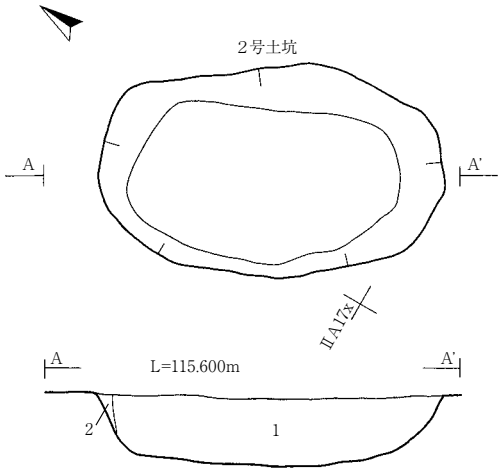
（２）井　戸　跡
１号井戸跡（第13図、写真図版７）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｂ区・ⅢＢ20ｃグリッドに位置し、表土下のⅢ層で検出した。重複する遺構はない。調査においては底面付近まで掘り下げたが、２ｍ近い深さのため、断面を残しながら掘り下げことは難しく、また湧水のため、ポンプによる排水を行いながらの作業となった。安全対策上、早急に埋め戻しが必要であったため、断面図記録などの一部は省いた。
＜平面形・規模＞　形状は円形で、規模は開口部径1.15×1.02m、底径0.88×0.68㎝、深さは湧水のため底面まで達していないが、ほぼ下端と考えられる位置で計測し、1.88㎝である。
＜埋土＞　埋土上位は粘性の強い褐灰色粘土、中層以下は黒褐色シルトと地山ブロックが混合する緑灰色粘土である。
＜遺物＞　なし。
時期　時期を特定できる遺物が見つかっていないため詳細は不明である。

（３）溝　　跡
調査区全体で５条検出した。いずれも端部が調査区外へと延びるため、全長は不明である。

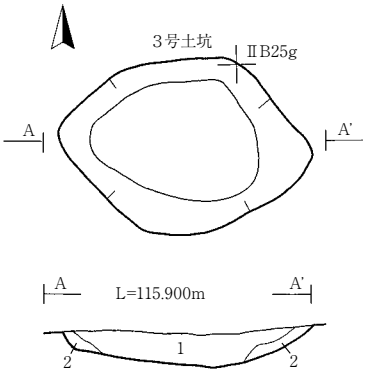
１号溝跡（第14図、写真図版７）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ18ｓ～ｕ・19ｔ～ｖ・20ｖ～ｙ・21ｙ・ⅡＢ21ａ・21ｂ・22ｂ・22ｂグリッドを跨いで位置し、表土下のⅡ層中で検出した。３・４号墓壙、４号溝と重複し、これらに切られる。
＜規模・形態・方向＞　遺構の両端が調査区外へと延びているが、規模は長さが約34ｍ、上端幅132～212㎝、下端幅24～36㎝、方向は北西－南東でほぼ直線に延びる。両端部底面の比高差は約23㎝で、南東端が低い。
＜埋土＞　埋土全体が暗褐色シルトを主体とした堆積である。層中には褐色シルトが粒状・ブロック



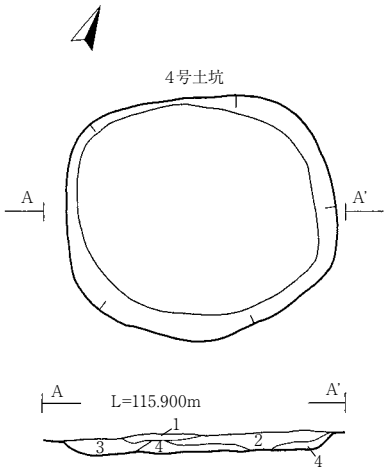
1号土坑
A－A'
1　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　橙色焼土粒（7.5YR6/6　径３～７㎜）、径５～10㎜炭化物１～２％混入。
2　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　橙色焼土（7.5YR6/6　径５～10㎜）、径５～７㎜炭化物10％、にぶい黄燈色土粒（10YR7/2　径７～10㎜）10％含む。
3　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄燈色土粒（10YR7/2　径10～15㎜）２％含む。



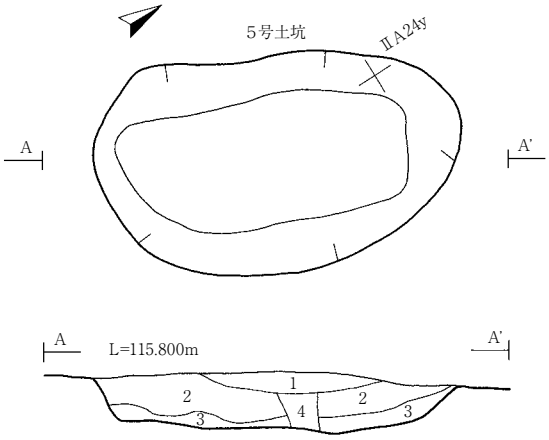
2号土坑
A－A'
1　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりややあり　にぶい黄燈色土粒（10YR7/2　径20～25㎜）５％含む。
2　10YR2/2　黒褐色土　粘性・しまりあり　掘りすぎ部分？



3号土坑
A－A'
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄燈色土粒（10YR7/2）１～２％含む。
2　10YR8/3　浅黄燈色粘土　粘性・しまりあり　褐灰色土（10YR4/1）10～20％含む。



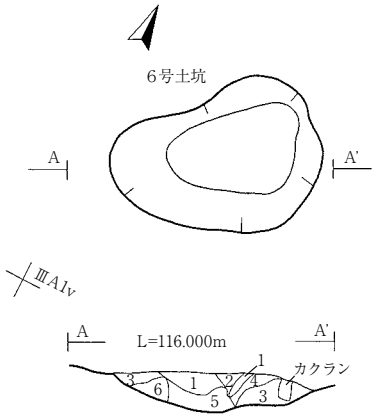
4号土坑
A－A'
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト50％、10YR7/1　灰白色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり　明赤褐色焼土（5YR5/6）５％含む。
2　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　浅黄燈色粘土（10YR8/3）ブロックで３％含む。
3　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性あり　しまりなし　明赤褐色焼土（5YR5/6）３％、浅黄燈色粘土（10YR8/3）１～２％含む。
4　10YR8/3　浅黄燈色粘土　粘性・しまりあり　褐灰色粘土質シルト（10YR4/1）３％含む。



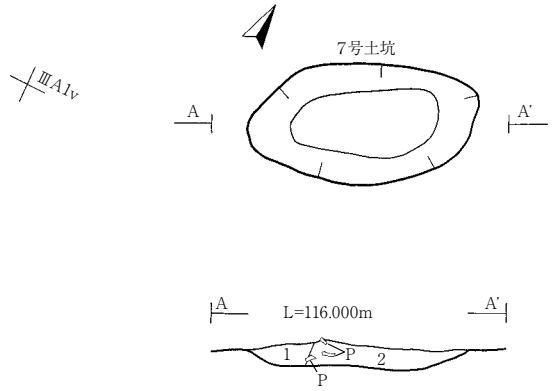
5号土坑
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・しまりあり
2　10YR3/1　黒褐色シルト90％、10YR5/3　にぶい黄褐色シルト10％の混合土層。粘性・しまりあり　径５㎜の炭化物粒１％未満含む。
3　10YR3/1　黒褐色シルト90％、10YR6/2　灰黄褐色粘土10％の混合土層。粘性・しまりあり　炭化物ブロックで１％含む。
4　10YR3/1　黒褐色シルト60％、10YR5/4　にぶい黄褐色シルト40％の混合土層。粘性・しまりあり

0　1:40　1m

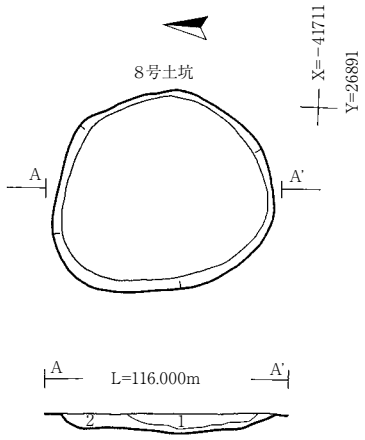
第11図　１～５号土坑



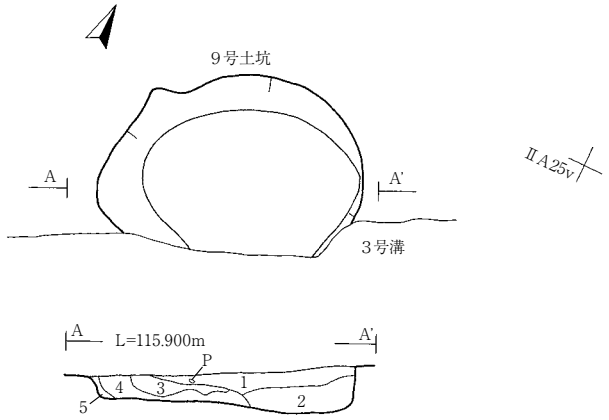
6号土坑
A－A'
1　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　明赤褐色焼土粒（7.5YR5/6　径２～５㎜）１％未満含む。
2　10YR2/1　黒色シルト　粘性あり　しまりなし
3　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりややあり　明赤褐色焼土粒（7.5YR5/6　径１㎜）１％未満含む。
4　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄色シルト（2.5YR6/3）５～７％含む。
5　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　明黄褐色シルト（10YR7/6）10～15％含む。
6　10YR2/2　黒褐色シルト60％、10YR7/6　明黄褐色粘土40％の混合土層。粘性・しまりあり　焼土粒（径１㎜）１％未満含む。



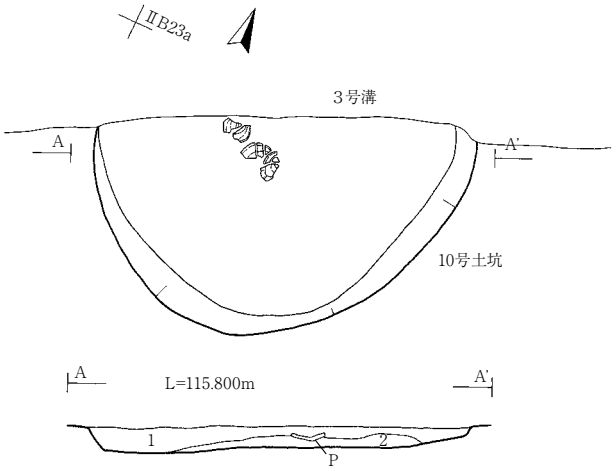
7号土坑
A－A'
1　10YR2/2　黒褐色シルト50％、2.5Y7/2　灰黄色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり　明褐色焼土（7.5YR5/6　径５～７㎜）１％含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　明褐色焼土粒（7.5YR5/6　径３～10㎜）１％、径２～５㎜の炭化物粒１～２％含む。



8号土坑
A－A'
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　径８㎜の炭化物粒１％含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト70％、10YR6/6　明黄褐色シルト30％の混合土層。粘性・しまりあり



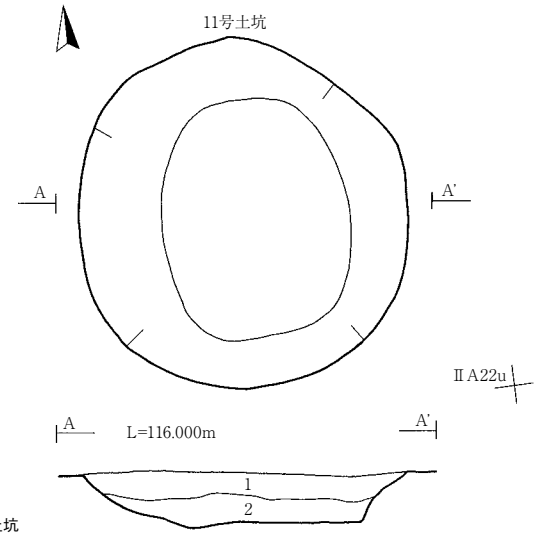
9号土坑
A－A'
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性ややあり　しまりあり　橙色焼土粒（7.5YR6/6　径５㎜）１％未満含む。
2　10YR2/3　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　橙色焼土粒（7.5YR 6/6　径５～10㎜）、径５～７㎜の炭化物粒１～２％未満含む。
3　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性ややあり　しまりあり　径５㎜炭化物１％未満含む。
4　10YR2/1　黒色土シルト　粘性なし　しまりあり　にぶい黄色粘土（2.5Y6/4）50％混合。
5　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性ややあり　しまりあり　掘りすぎ？



10号土坑
A－A'
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　黄橙色焼土粒（7.5YR7/8　径３～７㎜）１％含む。
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　にぶい橙色焼土（7.5YR7/4）１％未満含む。

0　1:40　1m

第12図　6～10号土坑

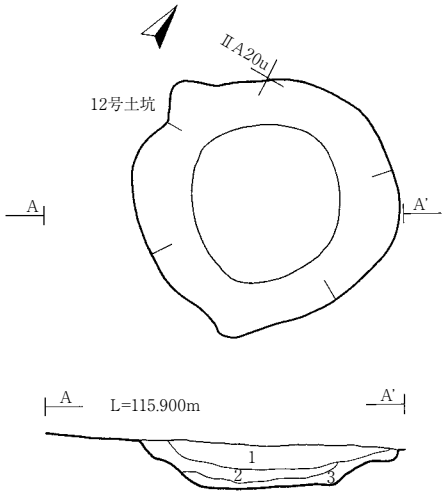


11号土坑

A－A'

1　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄燈色粘土（10YR7/4　径５～７㎜）１％含む。

2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）１～２％混入。



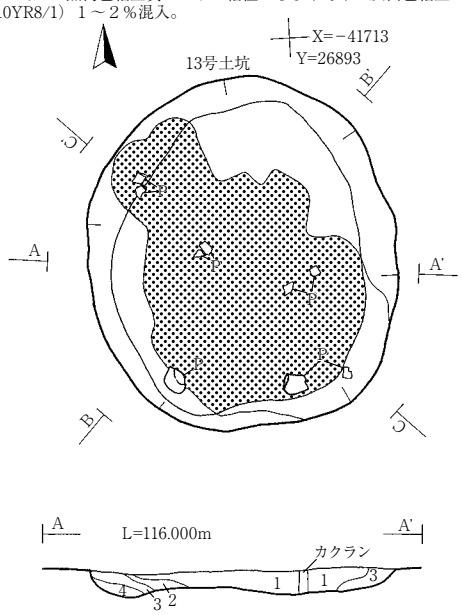
12号土坑

A－A'

1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　明褐色焼土粒（7.5YR5/6）１％未満含む。

2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト50％、10YR8/1　灰白色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり

3　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）10～15％含む。



13号土坑

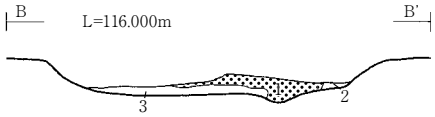
A－A'

1　10YR4/4　褐色粘土　粘性・しまりあり

2　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　褐色粘土（10YR4/4　径５㎜）１～２％混入。

3　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・しまりあり

4　10YR3/1　黒褐色シルト60％、10YR4/4　褐色シルト40％の混合土層。粘性・しまりあり　赤褐色焼土粒（5YR 4/8　径２～５㎜）１％未満含む。

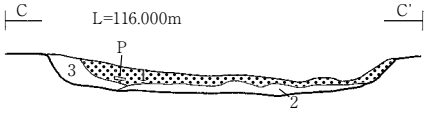


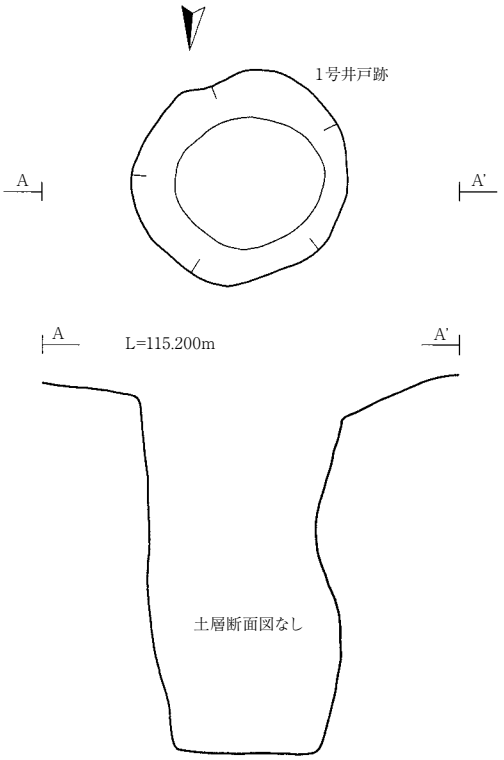
B－B'

1　10YR3/1　黒褐色シルト10％、5YR5/8　赤褐色焼土90％の混合土層。径10～20㎜の炭化物片１％含む。

2　10YR2/2　黒褐色粘土80％、10YR8/6　黄燈色粘土20％の混合土層。粘性・しまりあり

3　10YR2/2　黒褐色シルト90％、5YR5/8　赤褐色焼土10％の混合土層。粘性・しまりややあり　径10㎜の炭化物１％含む。





C－C'

1　10YR3/1　黒褐色シルト10％、5YR5/8　赤褐色焼土90％の混合土層。径10～20㎜の炭化物片１％含む。

2　10YR2/2　黒褐色粘土80％、10YR8/6　黄燈色粘土20％の混合土層。粘性・しまりあり

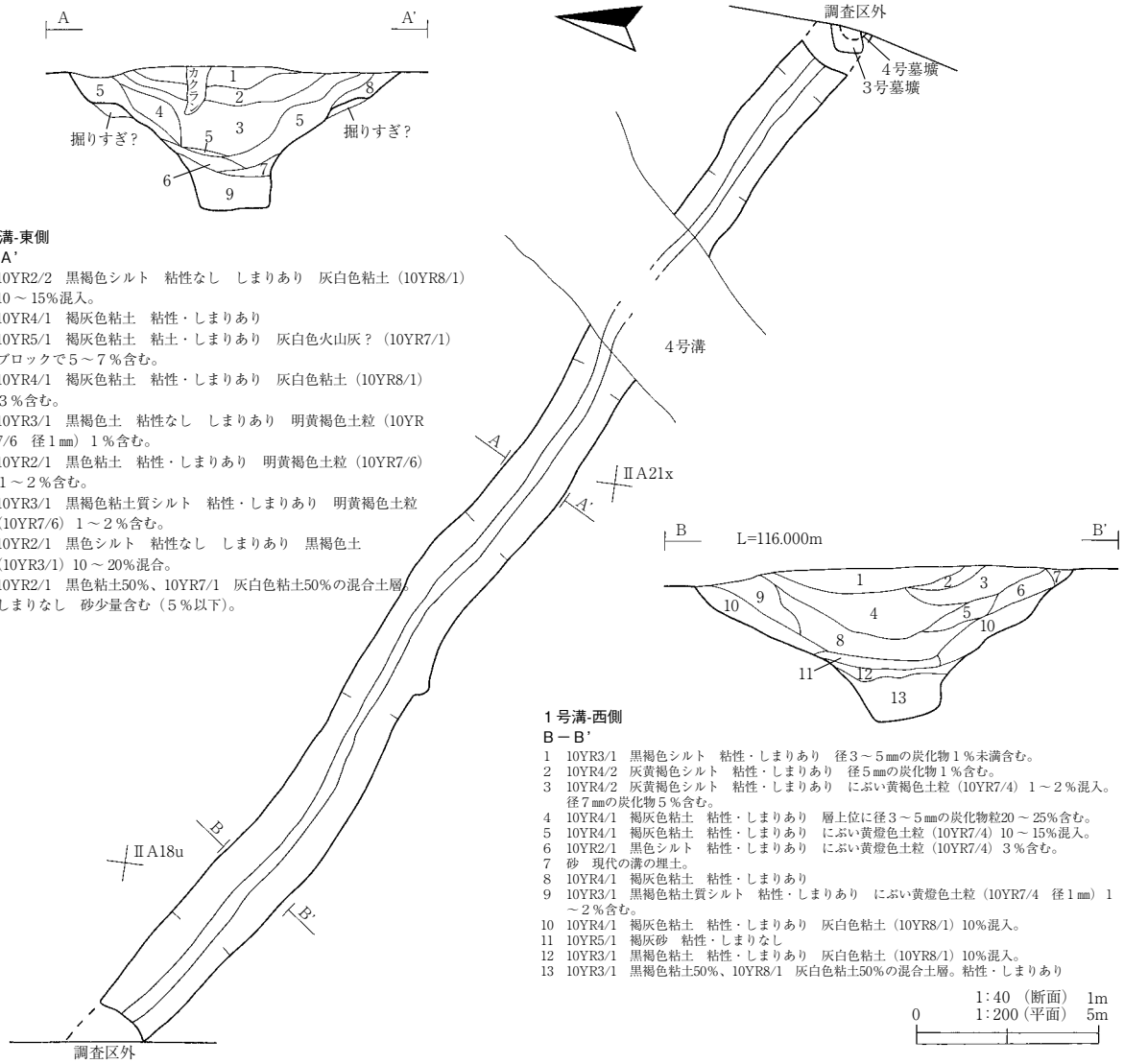
0　1:40　1m

第13図　11～13号土坑、１号井戸跡

で混入するが、下位に多い。

＜遺物＞　11 ～ 26がいずれも埋土上～中位から出土した。

時期　出土した遺物の年代観は９世紀代前半であるが、同じ層位に灰白色火山灰（白頭山苫小牧テフラ、Ｂ－Ｔｍ）が混入していることから、遺物は二次混入である可能性が考えられ、遺構の年代はＢ－Ｔｍ降下以降の10世紀中葉以降であると考えられる。



１号溝-東側

Ａ－Ａ'

1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性なし　しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）10 ～ 15%混入。
2　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり
3　10YR5/1　褐灰色粘土　粘土・しまりあり　灰白色火山灰？（10YR7/1）ブロックで５～７％含む。
4　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）３％含む。
5　10YR3/1　黒褐色土　粘性なし　しまりあり　明黄褐色土粒（10YR 7/6　径１㎜）１％含む。
6　10YR2/1　黒色粘土　粘性・しまりあり　明黄褐色土粒（10YR7/6）１～２％含む。
7　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　明黄褐色土粒（10YR7/6）１～２％含む。
8　10YR2/1　黒色シルト　粘性なし　しまりあり　黒褐色土（10YR3/1）10 ～ 20%混合。
9　10YR2/1　黒色粘土50%、10YR7/1　灰白色粘土50%の混合土層。しまりなし　砂少量含む（５％以下）。

１号溝-西側

Ｂ－Ｂ'

1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　径３～５㎜の炭化物１％未満含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性・しまりあり　径５㎜の炭化物１％含む。
3　10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄褐色土粒（10YR7/4）１～２％混入。径７㎜の炭化物５％含む。
4　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり　層上位に径３～５㎜の炭化物粒20 ～ 25%含む。
5　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり　にぶい黄燈色土粒（10YR7/4）10 ～ 15%混入。
6　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄燈色土粒（10YR7/4）３％含む。
7　砂　現代の溝の埋土。
8　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり
9　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　にぶい黄燈色土粒（10YR7/4　径１㎜）１～２％含む。
10　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）10%混入。
11　10YR5/1　褐灰砂　粘性・しまりなし
12　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）10%混入。
13　10YR3/1　黒褐色粘土50%、10YR8/1　灰白色粘土50%の混合土層。粘性・しまりあり

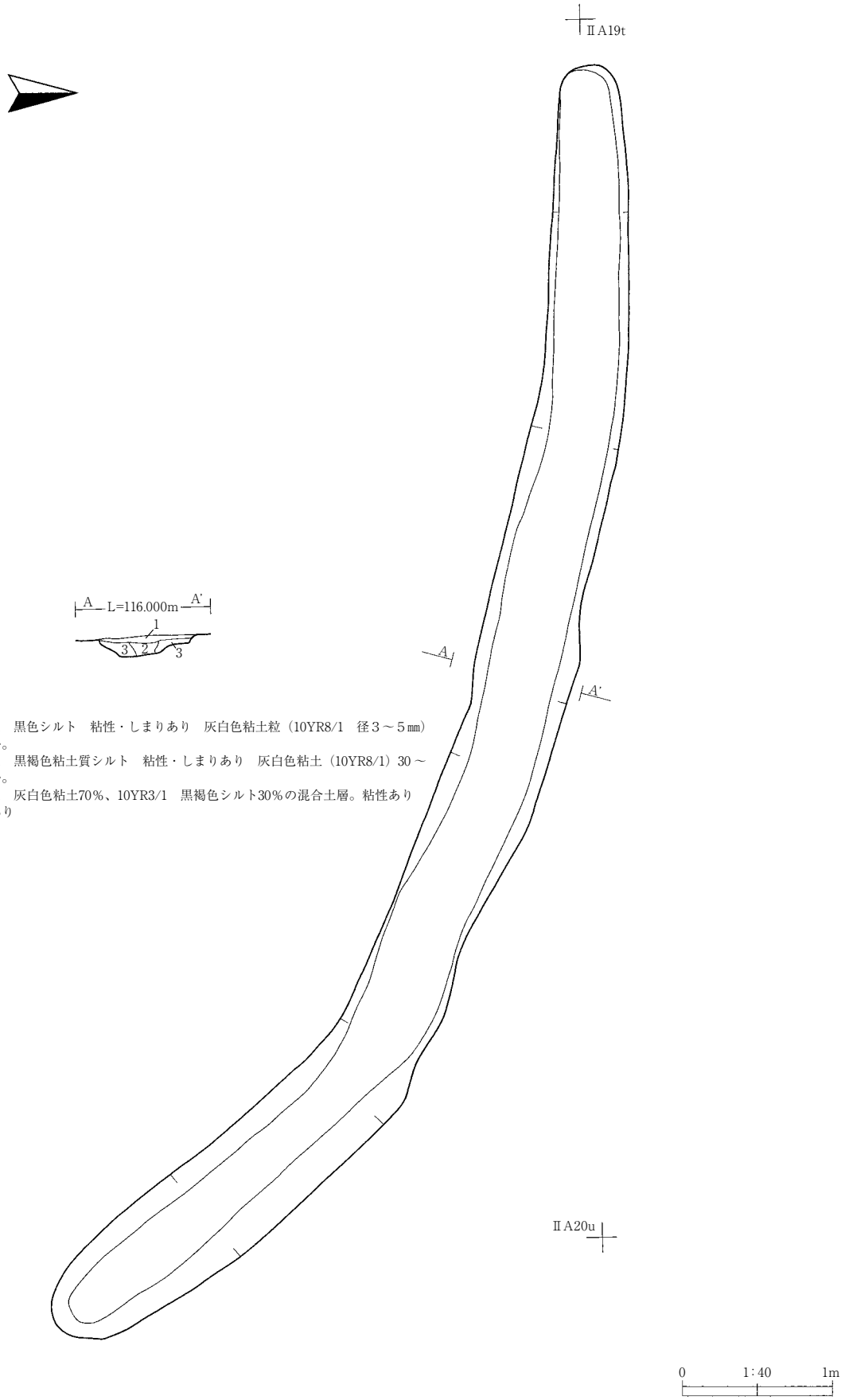
第14図　１号溝跡

２号溝跡（第15図、写真図版８）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ19ｔ・20ｔ～ｖグリッドを跨いで位置し、表土下のⅡ層中で検出した。北西側の一部が溝状の撹乱と接し、また、遺構の北西側は調査区へと延びている。
＜規模・形態・方向＞　規模は長さ9.48m、上端幅40～68cm、下端幅32～50cm、方向は北西－南東方向で、両端部底面の比高差は約13cmで、南東端が低い。
＜埋土＞　上位は黒色シルト、中～下位は黒褐色シルトと灰白色粘土の混合土層が堆積している。
＜遺物＞　なし。
時期　出土した遺物がないことから時期は不明である。

３号溝跡（第16図、写真図版８）
＜位置・検出・重複関係＞　南西端のⅢＡ１ｕグリッドから北東端のⅡＢ23ａグリッドまでをほぼ直線に延び、ⅡＡ25ｕ・25ｖ・24ｗ・24ｘ・23ｙ・24ｙ・ⅡＢ24ａグリッドを跨っている。９・10号土坑と重複関係にあり、これらを切る。
＜規模･形態･方向＞　遺構の両端が調査区外へと延びているが､規模は長さ25.6m､上端幅71～104cm、下端幅11～32cm、方向は南西－北東でほぼ直線に延びる。両端部底面の比高差は約18cmで、北東端が低い。
＜埋土＞　層全体が黒褐色粘土シルトで、一部ににぶい黄燈色シルトが混合している。
＜出土遺物＞　埋土から擂鉢の破片が１点（45)、甕の破片（46）１点が出土した。
時期　出土した遺物などから近世以降に属すると考えられる。

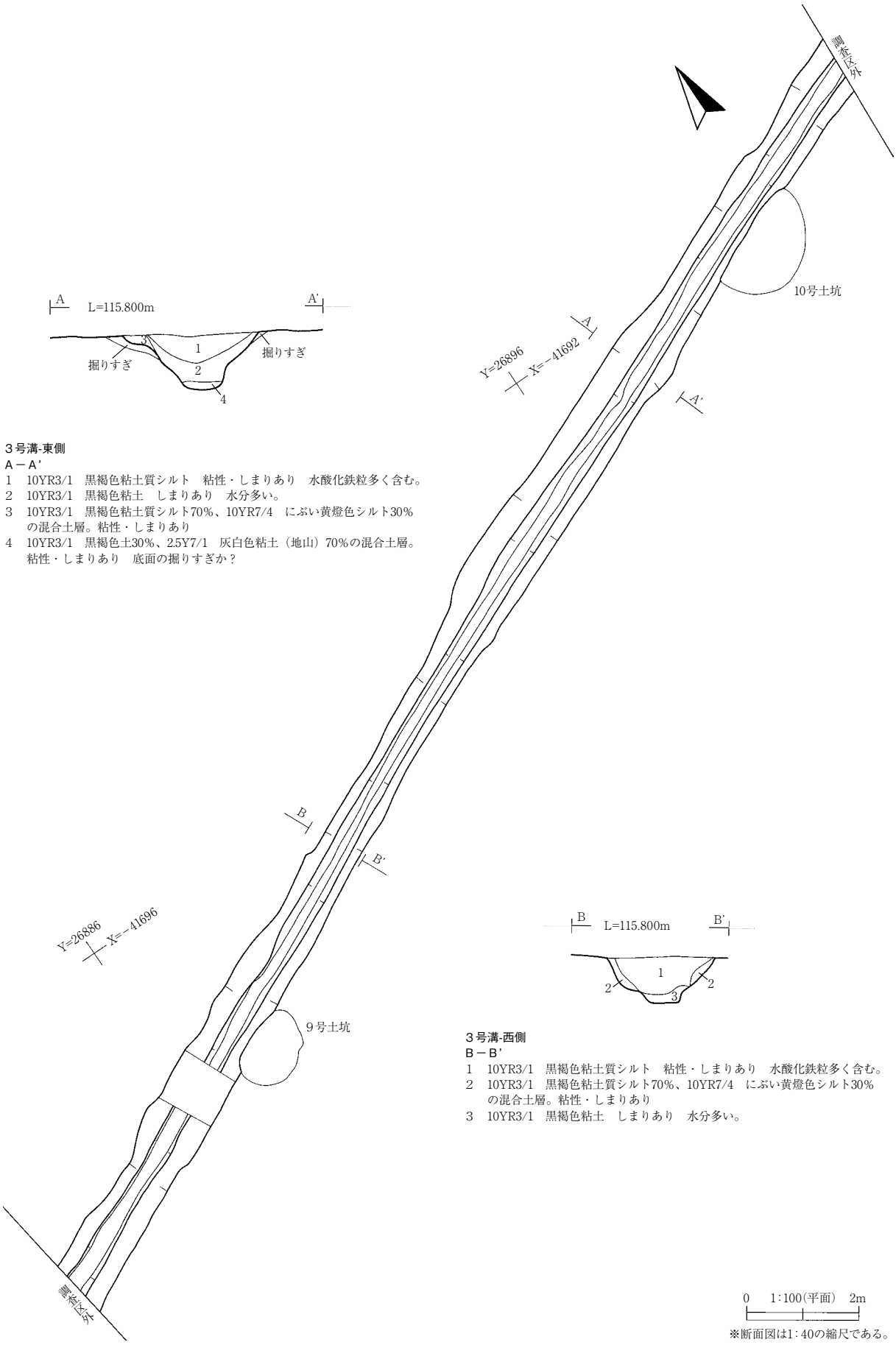
４号溝跡（第17図、写真図版８）
＜位置・検出・重複関係＞　Ａ区とＣ区に跨って検出された。表土下のⅡ層で検出した。１・５号溝と重複関係にあり、１号溝を切る。５号溝との重複関係は不明である。
＜規模･形態･方向＞　Ａ区とＣ区に跨っており、長さはＡ区部分が約32m、Ｃ区部分が12mで、Ａ・Ｃ区間の未調査部分を含めると100mを超える規模である。上端幅340～472cm、下端幅128～322cm、で南西－北東方向に延びる。両端部底面の比高差は約60cmで、北東端が低い。
＜埋土＞　８層に分かれる。上位は灰黄褐～褐灰色粘土、中位は黒褐色粘土と砂層の互層、下位は黒褐色粘土質シルトがそれぞれ堆積している。
＜遺物＞　埋土から須恵器坏片１点（18)、木製の椀４点（53～56)、皿１点（57)、陶磁器片６点（47～52）が出土した。陶器（47～49）は大堀相馬産、磁器（50～52）は肥前産で18世紀代である。
時期　検出状況・出土遺物などから近世～近代に使用された遺構と考えられる。

５号溝跡（第17図、写真図版９）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ22ｔ・22ｕ・23ｕグリッドを跨いで位置し、表土下のⅢａ層で検出した。４号溝と重複するが新旧関係は不明である。
＜規模・形態・方向＞　遺構の西端が調査区外へ延びるため全体の規模は不明であるが、約5.5mで、東端が４号溝と重複（合流？）する。上端幅182～242cm、下端幅38～100cm、方向は北西－南東でほぼ直線に延びる。底面の比高差は調査した範囲ではなかった。
＜埋土＞　６層に分かれ、全体に黒褐色・褐灰色粘土質シルトを主体とする層が堆積している。
時期　出土遺物はないが、４号溝との重複関係などから近世～近代に属する可能性が高い。

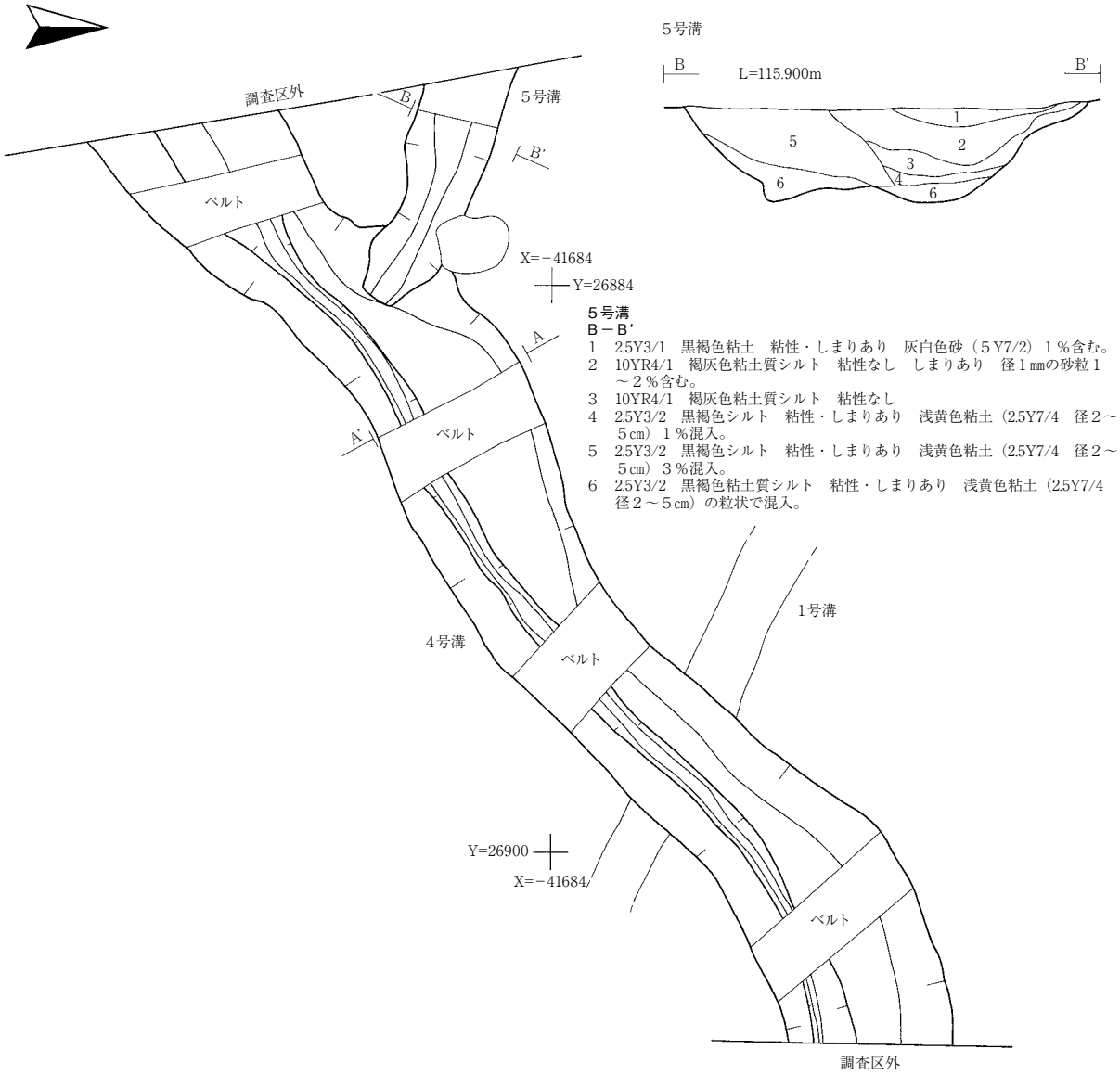


２号溝
Ａ－Ａ'
1　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　灰白色粘土粒（10YR8/1　径３～５㎜）１％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）30～40％含む。
3　10YR8/1　灰白色粘土70％、10YR3/1　黒褐色シルト30％の混合土層。粘性ありしまりあり

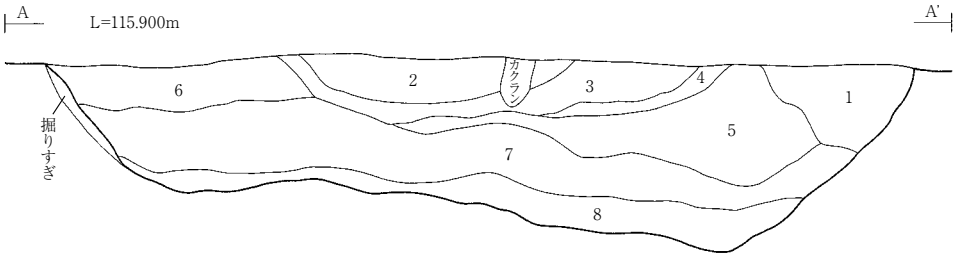
第15図　２号溝跡


A
L=115.800m
A'
1
2
3
4
掘りすぎ
掘りすぎ
3号溝-東側
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　水酸化鉄粒多く含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり　水分多い。
3　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト70%、10YR7/4　にぶい黄燈色シルト30%の混合土層。粘性・しまりあり
4　10YR3/1　黒褐色土30%、2.5Y7/1　灰白色粘土（地山）70%の混合土層。粘性・しまりあり　底面の掘りすぎか？
10号土坑
Y=26896
X=−41692
A
A'
B
B'
Y=26886
X=−41696
9号土坑
B
L=115.800m
B'
1
2
2
3
3号溝-西側
B－B'
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　水酸化鉄粒多く含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト70%、10YR7/4　にぶい黄燈色シルト30%の混合土層。粘性・しまりあり
3　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり　水分多い。
0　1:100(平面)　2m
※断面図は1:40の縮尺である。

第16図　３号溝跡



5号溝
B－B'
1　2.5Y3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり　灰白色砂（5Y7/2）1％含む。
2　10YR4/1　褐灰色粘土質シルト　粘性なし　しまりあり　径1㎜の砂粒1～2％含む。
3　10YR4/1　褐灰色粘土質シルト　粘性なし
4　2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　浅黄色粘土（2.5Y7/4　径2～5㎝）1％混入。
5　2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　浅黄色粘土（2.5Y7/4　径2～5㎝）3％混入。
6　2.5Y3/2　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　浅黄色粘土（2.5Y7/4　径2～5㎝）の粒状で混入。



4号溝－西側断面
A－A'
1　10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性なし　しまりあり
2　10YR4/1　褐灰色粘土質シルト　粘性なし　しまりあり　径1㎜の砂粒1～2％含む。
3　2.5Y3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり　灰白色砂（5Y7/2）筋状に10～15％含む。
4　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり　層上位に砂層10％堆積。
5　2.5Y3/1　黒褐色粘土と砂層が互層になっている。粘性・しまりあり　径10㎜の炭化物粒1％未満含む
6　10YR4/1　褐灰色粘土質シルト　粘性・しまりあり　浅黄色粘土（2.5Y7/4　径3～5㎜）の粒状で1～2％含む。
7　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性・しまりあり
8　砂層　黒褐色粘土（10YR3/1）10～15％含む。粘性なし・しまりややあり

1:40（断面）　1m
0　1:200(平面)　5m

第17図　4・5号溝跡

（４）墓　　壙

Ａ区の中央部より東側で12基検出した。調査前の現況は水田であり、墓石など墓に関連する遺物はなく、事前に墓地とは確認できなかった。重機による表土除去後に人力で検出したところ、銭貨と人骨の一部が出土したこと、また円形・楕円形の平面プランが複数検出されたことなどから、当該区域は墓域として使われた場所であると推測し、調査を行った。墓壙が検出された区域の周辺は湧水を伴う溝（４号溝）に隣接することなどから、精査時には雨により、何度も水をかぶり、遺物が流されるなど調査に支障をきたすこともあった。また、墓壙としたプランのなかには遺物が全く出土しないものやプランの重複により、遺構の一部しか残存していないものもあり、必ずしも墓とは断定できないものもあった。

１号墓壙（第19図、写真図版９）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＢ22ａ・22ｂグリッドに跨って位置する。２号墓壙に隣接するが、重複関係にはない。
＜規模・形態・方向＞　開口部径1.28×0.90m、深さ26cmの規模である。平面形は長方形で、長軸方向は北西－南東である。
＜埋土＞　３層に分かれるが、全体が黒褐色シルトを主体とし、層中に灰白色粘土を少量含む。
＜人骨・副葬品＞　人骨・副葬品ともに見つかっていない。
時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

２号墓壙（第19図、写真図版９）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＢ22ａグリッドに位置する。重複する遺構はない。
＜規模・形態・方向＞　開口部径1.21×1.0m、深さ24cmの規模である。平面形は惰円形で、長軸方向は北西－南東である。
＜埋土＞　２層に分かれるが、大半が灰白色粘土を少量含む黒褐色シルトである。底面西側の一部には灰白色粘土が多く含まれている。
＜人骨･出土遺物＞　人骨は粒状の状態で出土した。副葬品は古銭３点（58 ～ 60)､火打金１点（96)、煙管１点（97）である。
時期　重複する墓壙の出土遺物から近世以降に属するものと思われる。

３号墓壙（第19図、写真図版９・10）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＢ22ｂグリッドに位置する。遺構の東側は調査区外へと延びる。４号墓壙と重複し、これを切る。
＜規模・形態・方向＞　遺構の一部が調査区外へと延びるため、規模は不明である。形状は方形状を呈すると推定される。平面形は方形状で、長軸方向は北北東－南南西である。
＜埋土＞　黒褐色シルトの単層で、層中に人骨片、炭化物を含む。
＜人骨・埋葬状況＞　人骨と思われる骨片が出土したが、部位を特定できるものはなかった。副葬品として古銭23点（61 ～ 83）が出土した。
時期　出土遺物から18世紀前半～ 19世紀後半に属するものと思われる。

４号墓壙（第19図、写真図版10）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＢ22ｂグリッドに位置する。墓壙の大半が３号墓壙と重複し、これに切られている。また、遺構の東側が調査区外へと延びる。
＜規模・形態・方向＞　遺構の一部が調査区外へと延びているが、調査した部分から形状は円形基調と考えられる。詳細規模は不明であるが、深さは44㎝である。
＜埋土＞　３層に分かれる。上位は褐灰色粘土、中位は黒褐色粘土、下位は褐灰色粘土と黒褐色粘土の混合土で、埋土には人骨片が含まれていた。
＜人骨・埋葬状況・副葬品＞　下位に円形の棺桶の底板を確認したが、今回調査した部分に副葬品はなかった。
時期　詳細時期は不明であるが、重複する３号墓壙より古い時期の遺構である。

５号墓壙（第19図、写真図版10）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＢ22ａグリッドに位置する。重複する遺構はない。
＜規模・形態・方向＞　形状は楕円形を呈し、開口部径1.0×0.66ｍ、底径92×56㎝、深さ14㎝の規模である。
＜埋土＞　２層に分かれる。主体は黒褐色シルトで下位の一部が黒褐色粘土層である。
＜人骨・副葬品＞　なし
時期　重複する墓壙はなく、人骨・遺物も出土していないため、時期は不明である。

６号墓壙（第20図、写真図版10）
＜位置･検出･重複関係＞　ⅡＡ23ｙグリッドに位置する。８・９･11号墓壙と重複し、これらを切る。
＜規模・形態・方向＞　形状はやや不整な長方形で開口部径1.05×0.80ｍ、深さ36㎝の規模である。長軸方向は北西－南東である。
＜埋土＞　２層に分かれる。主体は黒褐色で上位はシルト、下位は粘土質シルトである。
＜人骨・埋葬状況＞　人骨と思われる骨片が出土したが、部位を特定できるものはなかった。副葬品として古銭４点（84 ～ 87）が出土した。
時期　出土遺物から近世以降に属するものと思われる。

７号墓壙（第20図、写真図版11）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ22ｙ・23ｙグリッドに跨って位置する。11号墓壙と重複し、これを切る。
＜規模・形態・方向＞　形状は円形を呈し、開口部径0.84×0.76ｍ、底径0.67×0.64ｍ、深さ38㎝の規模である。
＜埋土＞　６層に分かれるが、いずれも黒褐色粘土と地山の混合土層である。
＜出土人骨・埋葬状況＞　人骨と思われる骨片が出土したが、部位を特定できるものはなかった。棺桶の底と枠の一部が残っており、これら枠の大きさは径50×42㎝である。副葬品として古銭３点（88 ～ 90）が出土した。
時期　出土遺物から近世以降に属するものと思われる。

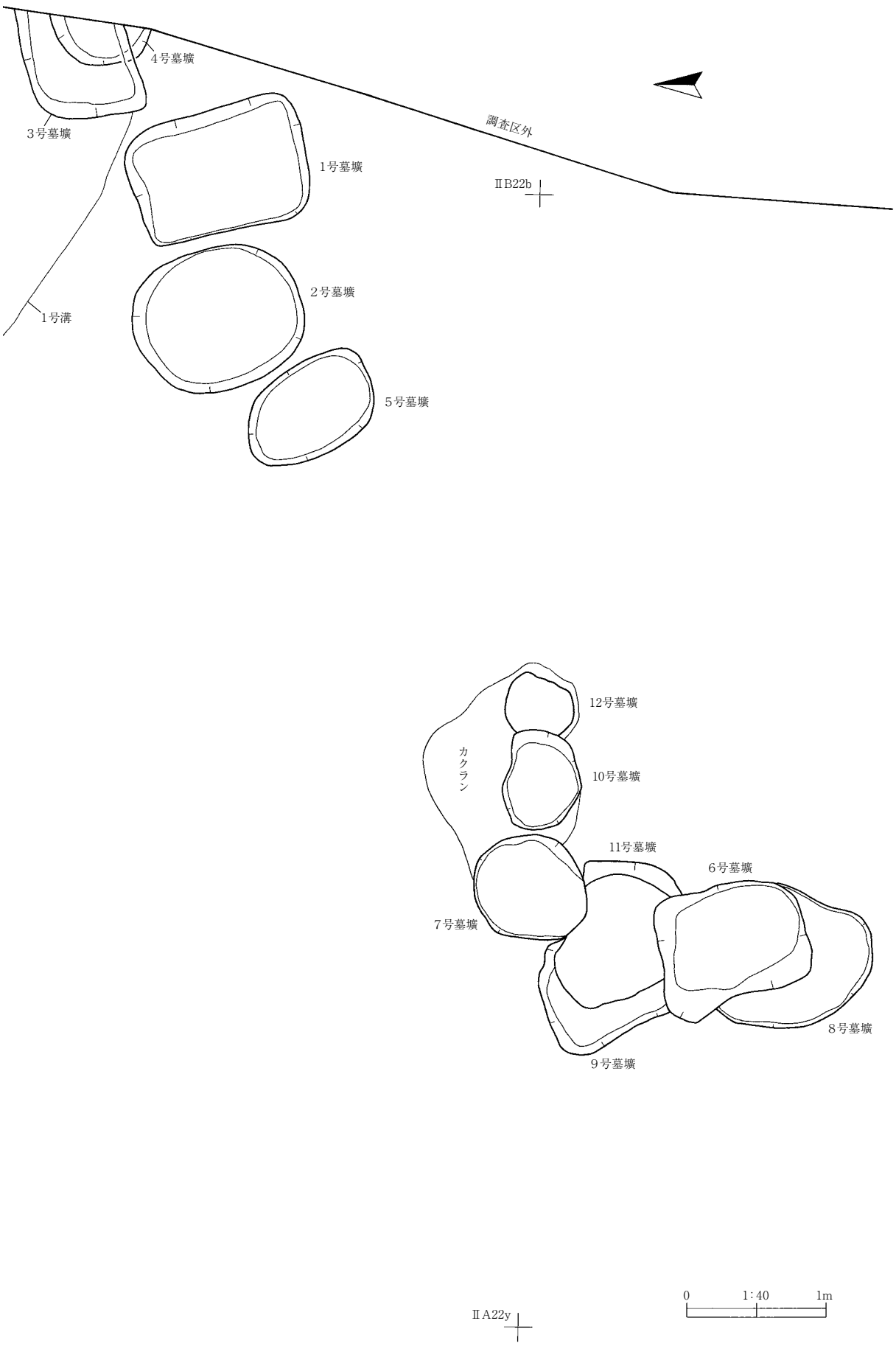
８号墓壙（第20図、写真図版11）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ23ｙグリッドに位置する。６号墓壙と重複し、これに切られる。
＜規模・形態・方向＞　形状は不整な楕円形状を呈すると思われ、規模は重複のため詳細不明であるが、深さは６㎝と浅い。
＜埋土＞　黒色シルトの単層である。
＜出土人骨・出土遺物＞　底面から古銭が１点（91）出土した。
時期　出土遺物から近世に属するものと思われる。

９号墓壙（第20図、写真図版11）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ23ｙグリッドに位置する。６・７・11号墓壙と重複し、これらに切られる。
＜規模・形態・方向＞　重複した遺構に切られているため、形状は不明である。深さは10㎝である。
＜埋土＞　地山を少量含む黒褐色粘土質シルトの単層である。
＜出土人骨・埋葬状況＞　人骨は出土していない。底面から古銭が４点（92・93）出土した。
時期　出土遺物から近世に属するものと思われる。

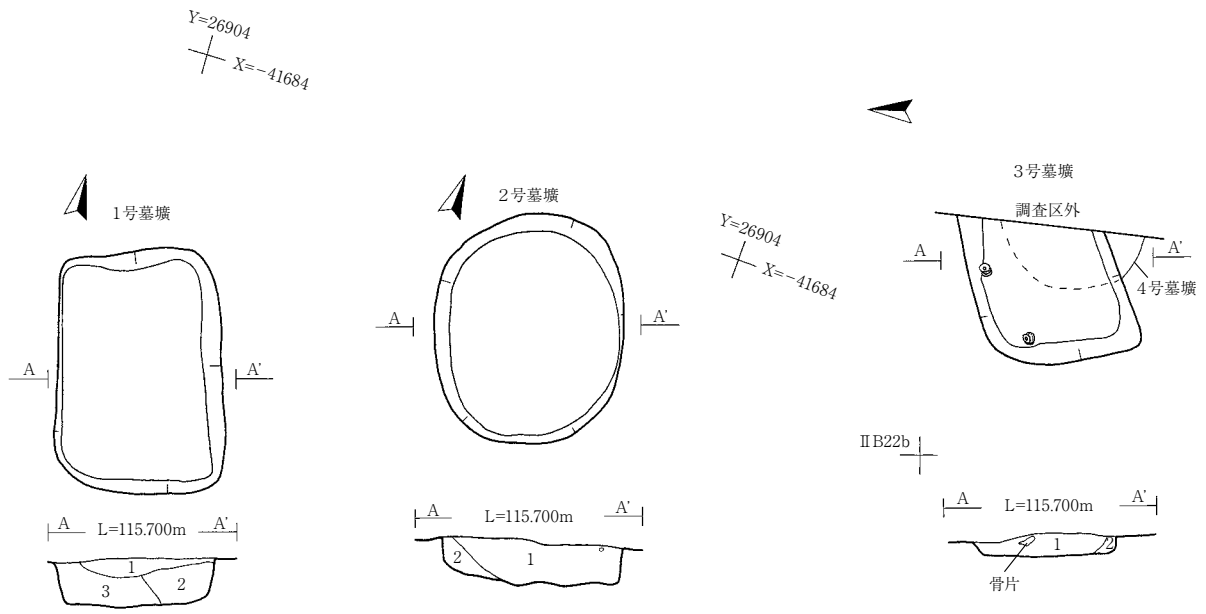
10号墓壙（第20図、写真図版11）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ22ｙ・23ｙグリッドに跨って位置する。12号墓壙と重複関係にあり、これを切る。
＜規模・形態・方向＞　開口部径0.70×0.56ｍ、底径0.56×0.52ｍ、深さ20㎝の規模である。平面形は不整な形状である。
＜埋土＞　３層に分かれるが、いずれも黒褐色で上位は粘土、中～下位はシルトである。
＜出土遺物・人骨＞　底面から棺桶材の一部と思われる木片が出土した。副葬品はなかった。
時期　出土遺物がないため詳細は不明であるが、検出状況等から近世以降に属すると思われる。

11号墓壙（第20図、写真図版11）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＡ23ｙグリッドに位置する。６・７・11号墓壙と重複関係にあり、６・７号墓壙より古く、11号墓壙より新しい。
＜規模・形態＞　重複のため、形状および規模は不明である。底面の南東に棺桶の存在した痕跡があるが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。
＜埋土＞　７号墓壙との重複のため埋土の残存状況は悪いが、黒褐色粘土質シルト層のみ確認できた。
＜出土人骨・副葬品＞　なし。
時期　出土遺物がないため詳細は不明であるが、検出状況等から近世以降に属すると思われる。

12号墓壙（第20図、写真図版11）
＜位置・検出・重複関係＞　ⅡＢ22ａ・23ａグリッドに位置する。10号墓壙と重複し、これに切られる。
＜規模・形態＞　撹乱を受けているため形状・規模は不明である。
＜埋土＞　黒褐色粘土質シルトの単層である。
＜出土人骨・副葬品＞　遺構の南西部で焼けた骨片が出土した。
時期　出土遺物がないため詳細は不明であるが、検出状況等から近世以降に属すると思われる。


4号墓壙
3号墓壙
1号墓壙
調査区外
ⅡB22b
2号墓壙
1号溝
5号墓壙
12号墓壙
カクラン
10号墓壙
11号墓壙
6号墓壙
7号墓壙
8号墓壙
9号墓壙
ⅡA22y
0
1:40
1m

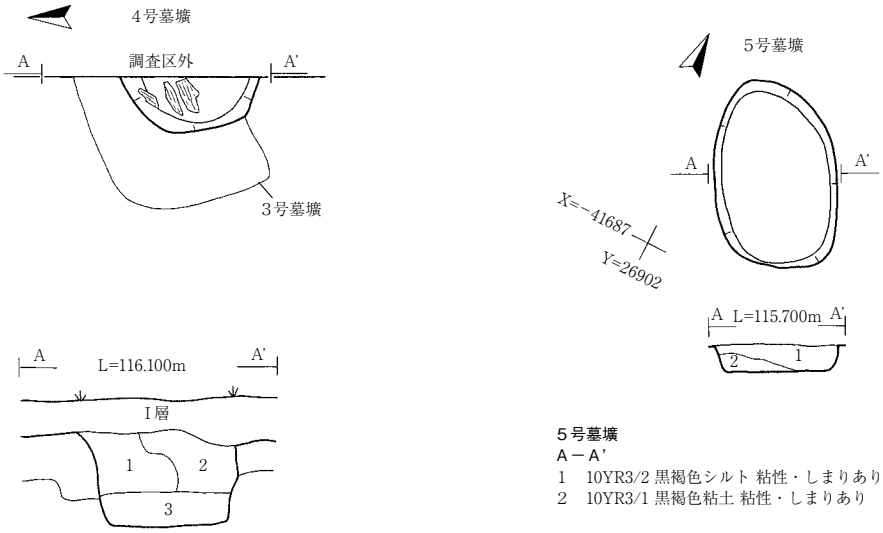
第18図　墓地跡



1号墓壙
A－A'
1　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）１～２％含む。
2　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　黒色シルト（10YR2/1）５％含む。
3　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　灰白色粘土（10YR8/1）３～５％含む。

2号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・しまりややあり　灰白色粘土（10YR8/1）５～７％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土70％、10YR8/1　灰白色粘土30％の混合土層。粘性・しまりあり

3号墓壙
A－A'
1　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　炭化物・骨ブロックで出土。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性あり　しまりややあり（4号墓壙埋土）

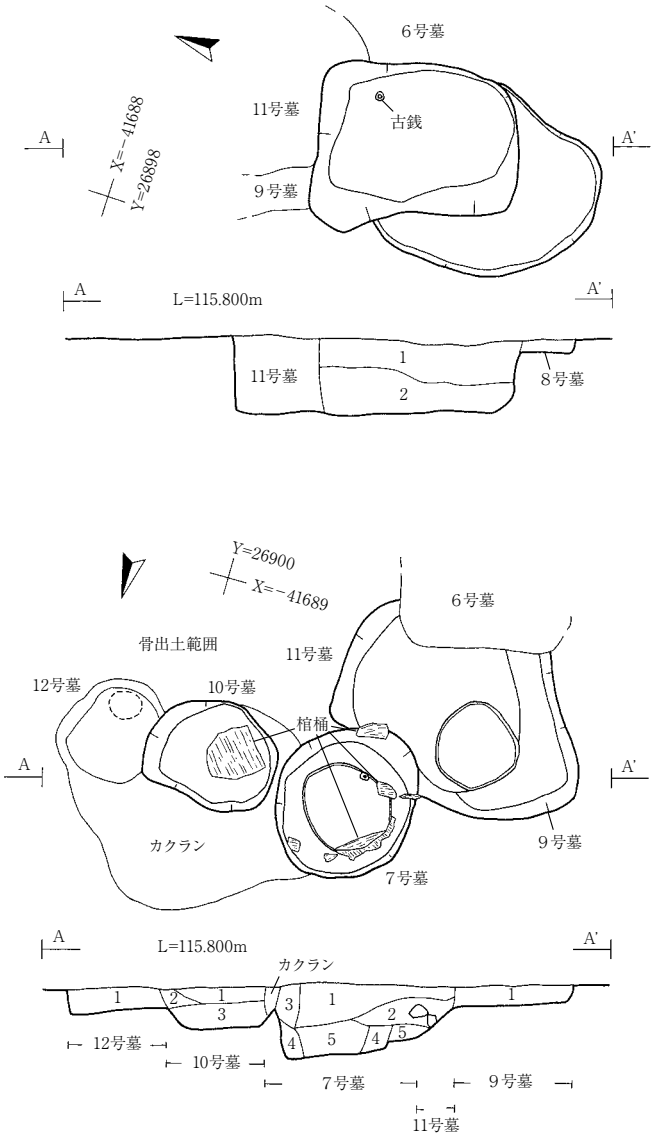


4号墓壙
A－A'
1　10YR4/1　褐灰色粘土　粘性・しまりあり　地山１％混入。
2　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり　地山１％混入。
3　10YR4/1　褐灰色粘土50％、10YR3/1　黒褐色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり　地山３％混入。

5号墓壙
A－A'
1　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまりあり 骨片微量含む。
2　10YR3/1 黒褐色粘土 粘性・しまりあり

0　1:40　1m

第19図　１～５号墓壙



6号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性･しまりあり　地山土（径10㎜）１％含む。
2　10YR2/1　黒色粘土質シルト　粘性・しまりあり　地山土（径10㎜）10％含む。

8号墓壙
A－A'
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり

7号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　地山土（径10㎜）10％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト60％、地山40％の混合土層。径５～10㎝の礫少量含む。
3　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト60％、地山40％の混合土層。径５～10㎝の礫少量含む。
4　2.5YR3/1　黒褐色粘質シルト60％、地山40％混合土層。
5　2.5YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり　地山３～５％含む。骨片含む。
6　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり

9号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性･しまりあり　地山10％含む。

10号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり　地山土５～10％含む。
2　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　粘性･しまりあり　骨片少量含む。
3　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりややあり

11号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　地山土（径10㎜）10％含む。
2　10YR2/1　黒色粘土質土　粘性･しまりあり　地山土（径10～15㎜）ブロックで含む。

12号墓壙
A－A'
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　地山１～２％含む。

0　1:40　1m

第20図　６～12号墓壙

第４表　墓壙一覧表

遺構名	グリッド	形状	開口部径	底面径	深さ	重複
1号墓壙	ⅡB22a･22b	長方形	128×90	110×74	26	
2号墓壙	ⅡB22a	楕円形	121×100	108×90	24	
3号墓壙	ⅡB22b	方形状	(70)×78	(62)×62	12	4号墓壙に切られる。
4号墓壙	ⅡB22b	円形？	(72)×(30)	(56)×(24)	44	3号墓壙を切る。
5号墓壙	ⅡB22a	楕円形	100×66	92×56	14	
6号墓壙	ⅡA23y	長方形？	105×80	90×67	36	8･9･11号墓壙を切る。
7号墓壙	ⅡA22y･23y	円形	84×76	67×64	38	11号墓壙を切る。
8号墓壙	ⅡA23y	楕円形？	(86)×(98)	(82)×(92)	6	6号墓壙に切られる。
9号墓壙	ⅡA23y	長方形？	(80)×		10	6･11号墓壙に切られる。
10号墓壙	ⅡA22y･23y	不整形	70×56	56×52	20	12号墓壙を切る。
11号墓壙	ⅡA23y	円形？	(106)×			9号墓壙を切り、6･7号墓壙に切られる。
12号墓壙	ⅡB22a･23a	撹乱のため不明	62×(50)	50×(40)	12	10号墓壙に切られる。

＊単位は㎝、（ ）部分は残存値。

（5）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第21図、写真図版12～14）
＜位置・検出・重複関係＞　Ａ区・ⅢＡ３～５ｘ・３～５ｙ・ⅢＢ３ａ・５ａグリッドに跨って位置する。重複する遺構はないが、遺構の東側が調査区外へと延びる。
＜柱穴＞　建物を構成している柱穴はＰ１～22であり、いずれの遺構からも柱痕を確認できた。柱痕径は18～30cmの範疇である。Ｐ１・２で礎盤が確認された。
＜平面規模＞　遺構の東側が調査区外へと延びるため、遺構全体の規模は不明であるが、東西に延びる長方形を呈する建物であると考えられる。規模は南北（梁行き）が３間で790cmである。調査で確認した北・南・西面のいずれにも庇をもつ構造である（Ｐ９～18）。また、西端部のＰ19～22が南北に列となっており、これに付随するものと考えられる。
＜柱間寸法＞　桁行きの柱間寸法は230cm・240cm・250cm・270cmと一定ではない。
＜出土遺物＞　数個の埋土から土師器の破片が出土している。
＜時期＞　不明である。

２号掘立柱建物跡（第22図、写真図版15・16）
＜位置・検出・重複関係＞　Ｂ区・ⅢＢ21ｏ・21ｐ・22ｏ・22ｐグリッドに跨って位置する。重複する遺構はないが、北側の建物を構成する柱の一部が撹乱によって削平された可能性がある。
＜柱穴＞　建物を構成している柱穴はＰ25～30の６個であり、Ｐ25・28・30で柱痕を確認した。柱痕径は16～18cmの範疇である。Ｐ27で礎盤が確認された。
＜平面規模＞　遺構の北半一部が撹乱を受けていることと、調査区外へと延びることから、南北（桁行き）の規模は不明であるが、調査した部分では南北の長さは394cm、東西（梁行き）は２間で400cmの方形状の建物跡である。＜柱間寸法＞　柱間距離はP28－【184cm】－P30－【210cm】－P25、P25－【200cm】－P26－【200cm】－P27、P27－【190cm】－P29をそれぞれ測る。
＜出土遺物＞　なし。
＜時期＞　検出状況から近世以降の可能性が高い。

３号掘立柱建物跡（第23図、写真図版15・16）
＜位置・検出・重複関係＞　Ａ区・ⅡＡ24ｖ・24ｗ・25ｗ・25ｘグリッドに跨って位置する。３号溝と重複し、建物を構成している（Ｐ45－46間の）柱穴１個が配列から、これに切られている可能性がある。
＜柱穴＞　建物を構成している柱穴はＰ44～52の９個であり、（１個は重複のため確認できず）。いずれからも柱痕を確認でき、柱痕径は12～22cmの範疇である。礎盤は確認されなかった。
＜平面規模＞　平面形は長方形、２間×３間の建物規模で桁行きは両側とも約552cm（18.2尺）であるが、梁行きは南北で異なり、北辺が約374cm（12.3尺）、南辺356cm（11.7尺）の規模である。桁行きの軸方向はＮ－10°－Ｅ、面積は20.64㎡（6.2坪）である。
＜柱間寸法＞　柱間距離はP44－【168cm】－P52－【188cm】－P51、P46－【196cm】－P47－【180cm】－P48、P48－P49－P50－P51間が各184cm、P44－P45間が184cmをそれぞれ測る。
＜出土遺物＞　なし。
＜時期＞　検出状況から近世以降の可能性が高い。

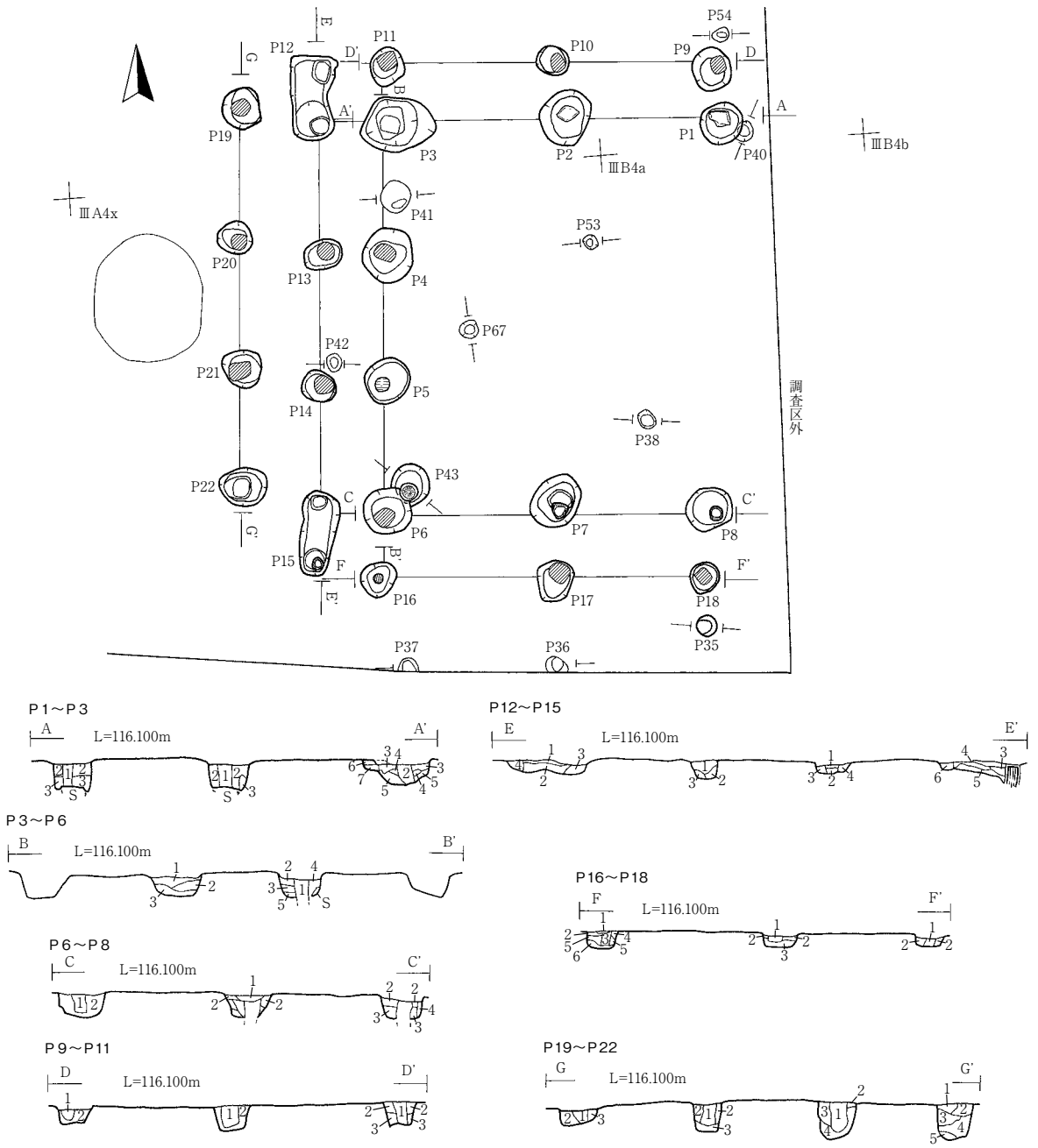
（６）柱穴状土坑（第21 ～ 25図）

Ａ～Ｃ区から61個検出した。このうち37個が規則的な配列で掘立柱建物跡を構成する柱穴であることが分かった。それ以外の24個については配列は不明である。各柱穴の規模・埋土等は第５表のとおりである。

第５表　柱穴状土坑一覧表

PNo	地点	径（cm）	深さ（cm）	検出面標高（m）	柱痕径（cm）	備考
1	ⅢＢ３ａ、ⅢＢ４ａ	65×62	36	115.74	23	１号掘立柱建物跡、P40と重複し、これを切る。
2	ⅢＡ３ｙ、ⅢＡ４ｙ	83×74	36	115.77	24	〃
3	ⅢＡ３ｙ、ⅢＡ４ｙ	112×82	38	115.80	26	〃
4	ⅢＡ４ｙ	80×78	34	115.78	24	〃
5	ⅢＡ４ｘ、ⅢＡ４ｙ	66×64	38	115.82	22	〃
6	ⅢＡ５ｘ、ⅢＡ５ｙ	72×68	36	115.80	25	〃　、P43と重複し、これを切る。
7	ⅢＡ５ｙ	80×69	37	115.80	27	〃
8	ⅢＢ５ａ	69×63	34	115.78	26	〃
9	ⅢＢ３ａ	63×54	28	115.76	26	〃
10	ⅢＡ３ｙ	46×44	40	115.77	20	〃
11	ⅢＡ３ｙ	53×50	38	115.45	30	〃
12	ⅢＡ３ｘ	58×58	20	115.79	26	〃
13	ⅢＡ４ｘ	56×44	26	115.78	27	〃
14	ⅢＡ４ｘ	50×42	18	115.76	28	〃
15	ⅢＡ５ｘ	54×53	32	115.78	18	〃
16	ⅢＡ５ｘ、ⅢＡ５ｙ	54×49	26	115.78	21	〃
17	ⅢＢ５ｙ	60×54	22	115.78	29	〃
18	ⅢＢ５ａ	44×42	18	115.80	20	〃
19	ⅢＡ３ｘ	62×54	26	115.71	25	〃
20	ⅢＡ４ｘ	54×50	46	115.80	22	〃
21	ⅢＡ４ｘ	60×54	58	115.82	27	〃
22	ⅢＡ５ｘ	72×58	55	115.79	26	〃
23	ⅢＢ21ｂ	44×39	24	115.48		
24	ⅢＢ21ｃ	－	－	115.44		遺構の一部は調査区外のため検出のみ
25	ⅢＢ22ｑ	50×43	37	115.10	18	２号掘立柱建物跡
26	ⅢＢ22ｏ、ⅢＢ22ｐ	50×40	18	115.06		〃
27	ⅢＢ22ｐ	43×41	14	115.04	30	〃

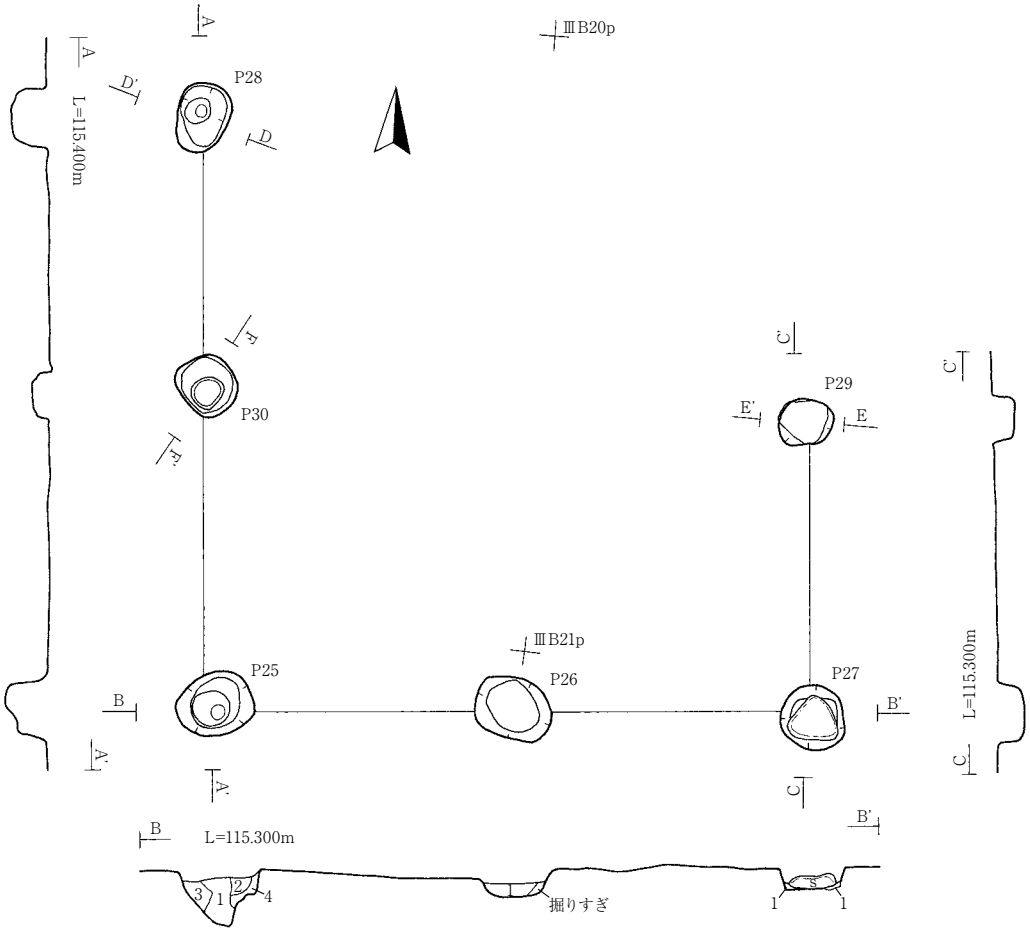
PNo	地点	径 (cm)	深さ (cm)	検出面標高 (m)	柱痕径 (cm)	備考
28	ⅢＢ21ｏ	48×46	20	115.06	17	２号掘立柱建物跡
29	ⅢＢ21ｐ	34×28	28	115.02	－	〃
30	ⅢＢ21ｏ	34×34	10	115.05	20	〃
31	ⅡＢ13ａ	100×60	43	115.25	－	
32	ⅡＢ13ａ	－	30	115.25	－	P31と重複し、これに切られる。
33	ⅡＢ13ａ	54×38	16	115.28	－	
34	ⅡＡ13ｙ	50×41	28	115.27	－	
35	ⅢＢ５ａ	32×30	14	115.68	16	
36	ⅢＡ５ｙ、 ⅢＡ６ｙ	34×27	22	115.71	－	
37	ⅢＡ５ｙ	－	16	115.68	－	遺構の一部は調査区外
38	ⅢＡ５ｙ、 ⅢＢ５ａ	27×24	18	115.72	－	
39	ⅢＡ４ｙ	28×28	18	115.69	15	
40	ⅢＢ４ａ	32×29	23	115.72	－	P1と重複し、これに切られる。
41	ⅢＡ４ｙ	46×42	36	115.71	－	
42	ⅢＡ４ｙ	26×22	4	115.70	－	
43	ⅢＡ５ｙ	60×(46)	48	115.77	27	P6と重複し、これに切られる。
44	ⅡＡ25ｘ	47×30	20	115.65	18	３号掘立柱建物跡
45	ⅡＡ25ｗ	46×44	30	115.69	17	〃
46	ⅡＡ24ｗ	27×26	14	115.71	12	〃
47	ⅡＡ24ｗ	36×28	12	115.67	16	〃
48	ⅡＡ24ｖ	32×30	18	115.67	17	〃
49	ⅡＡ25ｖ、 ⅡＡ25ｗ	38×35	15	115.71	14	〃
50	ⅡＡ25ｗ	43×38	22	115.71	22	〃
51	ⅢＡ１ｗ	36×30	19	115.75	18	〃
52	ⅡＡ25ｗ、 ⅢＡ１ｗ	40×32	33	115.79	18	〃
53	ⅢＡ４ｙ	23×21	15	115.73	－	
54	ⅢＢ３ａ	26×20	13	115.72	－	
55	ⅡＡ20ｕ	27×24	20	115.69	－	
56	ⅡＡ20ｕ	26×25	16	115.72	－	
57	ⅡＡ21ｕ	32×30	16	115.76	－	
58	ⅡＡ21ｖ	28×26	20	115.69	－	
59	ⅡＡ21ｖ	26×26	10	115.64	－	
60	ⅡＡ20ｖ	26×24	8	115.69	－	
61	ⅢＡ２ｖ、 ⅢＡ３ｖ	－	14	115.82	－	



P１～22
1　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまりあり 10YR8/1（灰白色粘土）１～２％含む。
2　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりあり
3　10YR3/2 黒褐色シルト 粘性・しまりあり 10YR8/1（灰白色粘土）５％含む。
4　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりややあり にぶい黄燈色粘土（10YR6/4）10％含む。
5　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性・しまりあり 10YR6/4（にぶい黄燈色粘土）１％含む。
6　10YR6/4 にぶい黄燈色粘土 粘性・しまりあり
7　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりあり 10YR8/1（灰白色粘土）１％以下含む。

0　100　2m

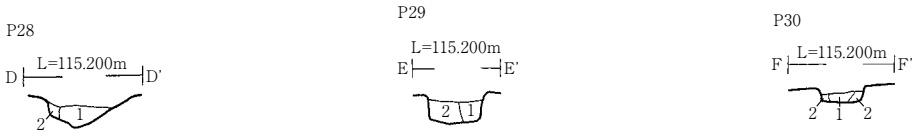
第21図　１号掘立柱建物跡



P25
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）10％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）３％含む。
3　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト50％、10YR8/6 黄燈色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり
4　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト60％、10YR8/6 黄燈色粘土40％の混合土層。粘性・しまりあり

P26
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり

P27
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり



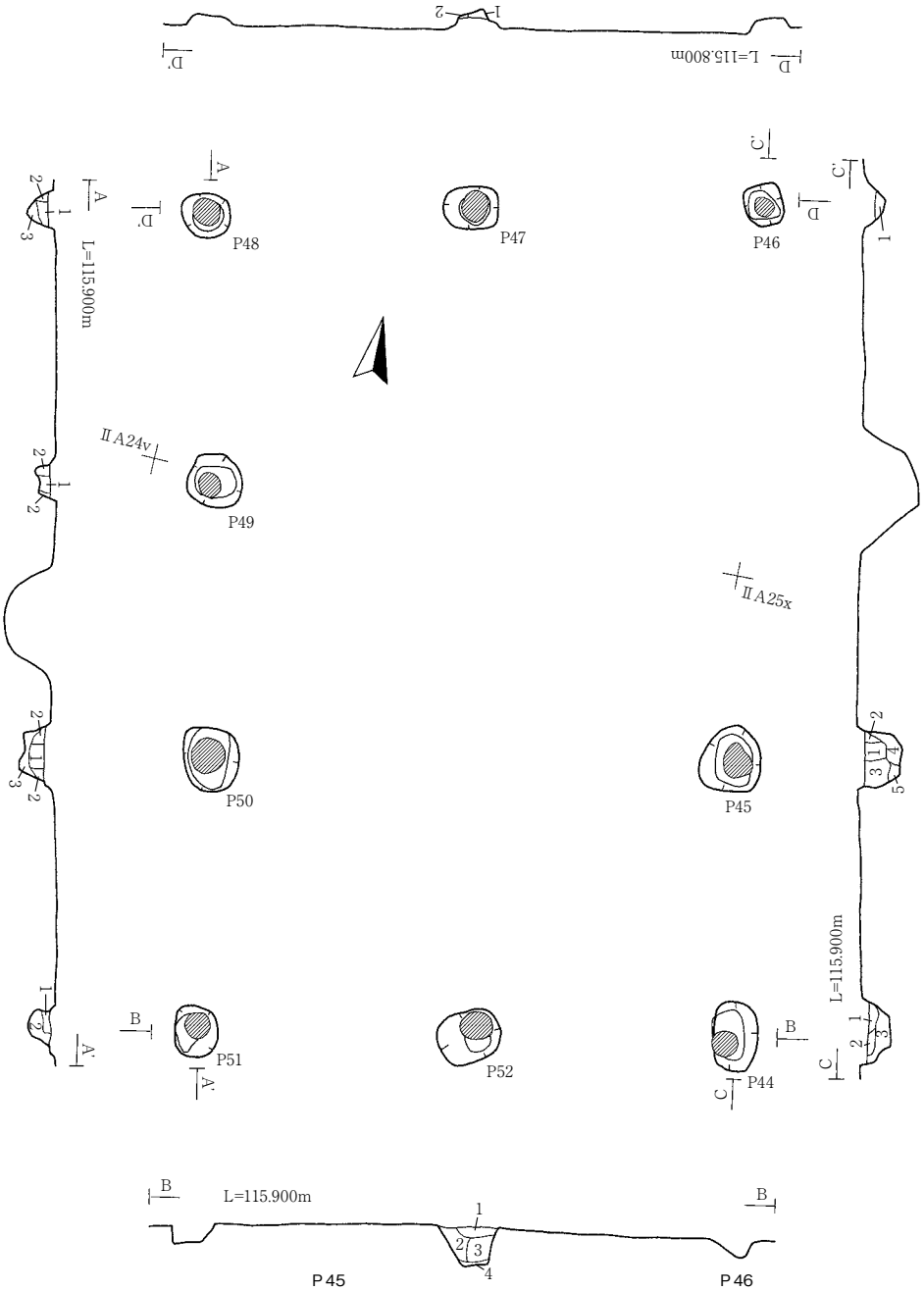
P28
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト70％、10YR8/6 黄燈色粘土30％の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト30％、10YR8/6 黄燈色粘土70％の混合土層。粘性・しまりあり

P29
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）20％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト40％、10YR8/6 黄燈色粘土60％の混合土層。粘性・しまりあり

P30
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）10％含む。
2　10YR8/6　黄燈色粘土90％、10YR3/1 黒褐色粘土質シルト10％の混合土層。粘性・しまりあり

0　1:50　1m

第22図　２号掘立柱建物跡



P44
1　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり
　黄燈色粘土（10YR8/6）10％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土20％、10YR8/6
　黄燈色粘土80％の混合土層。粘性・しまりあり
3　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり
　10YR8/6　黄燈色粘土３％の混合土層。

P47
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・
　しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）
　１～２％含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり

P50
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・
　しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）20％混入。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・
　しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）
　10～15％混入。
3　10YR8/6　黄燈色粘土90％、10YR3/1
　黒褐色粘土質シルト10％の混合土層。粘性・
　しまりあり

P45
1　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり
　黄燈色粘土（10YR8/6）５％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりあり
3　10YR8/6　黄燈色粘土90％、10YR3/1
　黒褐色粘土10％の混合土層。粘性・しまりあり
4　10YR3/1　黒褐色粘土60％、10YR8/6
　黄燈色粘土40％の混合土層。粘性・しまりあり
5　10YR3/1　黒褐色粘土　粘性・しまりややあり

P48
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト60％、 粘性・
　しまりあり　黄燈色粘土（10YR8/6）
　１～２％含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり
　黄燈色粘土（10YR8/6）５％混入。

P51
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト50％、10YR8/6
　黄燈色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト90％、10YR8/6
　黄燈色粘土10％の混合土層。粘性・しまりあり

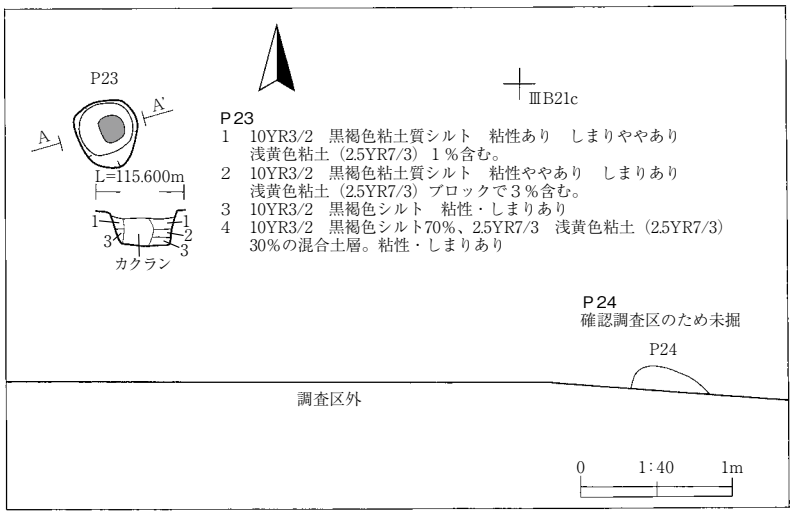
P46
1　10YR2/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・
　しまりあり

P49
1　10YR8/6　黄燈色粘土60％、10YR3/1
　黒褐色粘土40％の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト70％、10YR8/6
　黄燈色粘土30％の混合土層。粘性・しまりあり

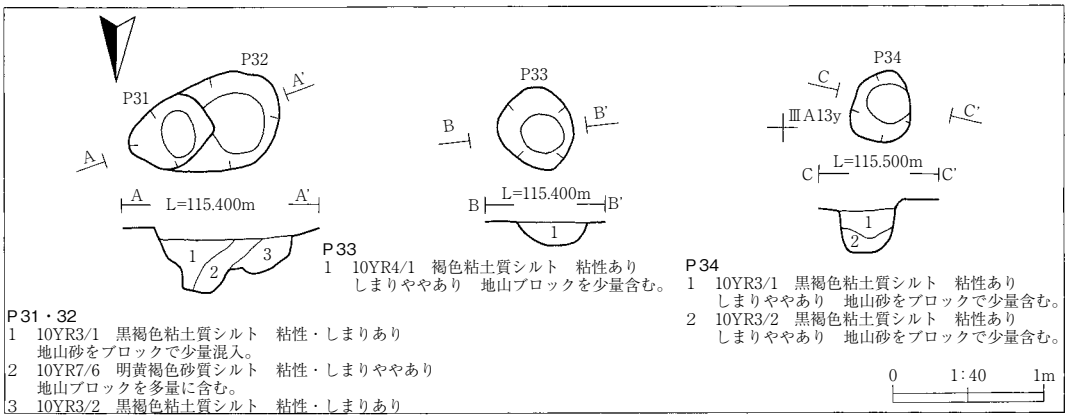
P52
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト90％、10YR8/6
　黄燈色粘土10％の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト50％、10YR8/6
　黄燈色粘土50％の混合土層。粘性・しまりあり
3　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト50％、10YR8/6
　黄燈色粘土50％の混合土層。粘性・
　しまりややあり
4　10YR2/2　黒褐色粘土質シルト　粘性・
　しまりややあり

0　1:50　1m

第23図　３号掘立柱建物跡



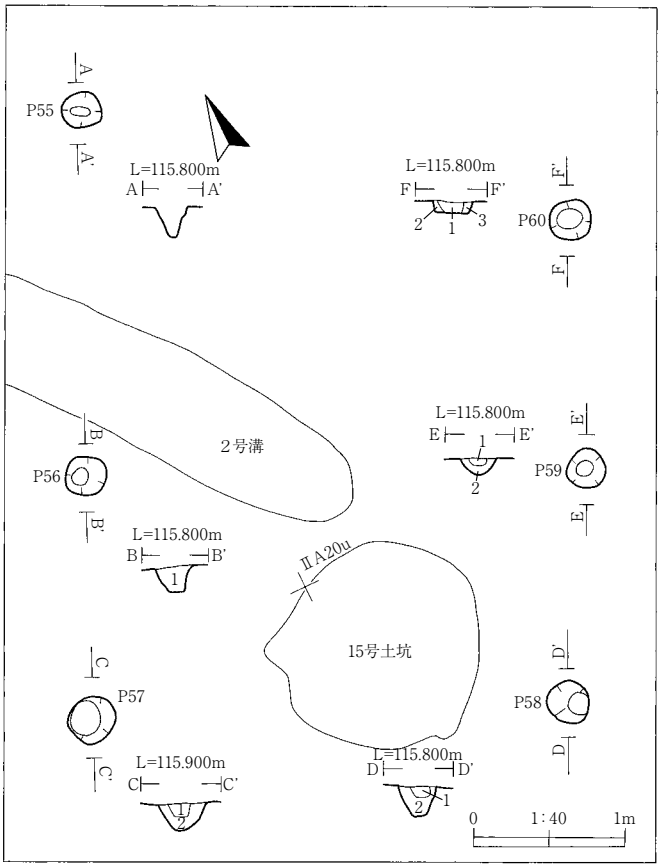
P23
1　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　粘性あり　しまりややあり
　浅黄色粘土（2.5YR7/3）１％含む。
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　粘性ややあり　しまりあり
　浅黄色粘土（2.5YR7/3）ブロックで３％含む。
3　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり
4　10YR3/2　黒褐色シルト70%、2.5YR7/3　浅黄色粘土（2.5YR7/3）
　30%の混合土層。粘性・しまりあり

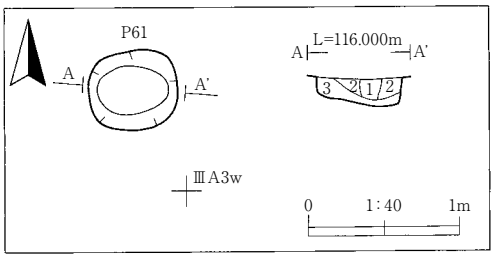


P33
1　10YR4/1　褐色粘土質シルト　粘性あり
　しまりややあり　地山ブロックを少量含む。

P34
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性あり
　しまりややあり　地山砂をブロックで少量含む。
2　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　粘性あり
　しまりややあり　地山砂をブロックで少量含む。

P31・32
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり
　地山砂をブロックで少量混入。
2　10YR7/6　明黄褐色砂質シルト　粘性・しまりややあり
　地山ブロックを多量に含む。
3　10YR3/2　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり





P56
1　10YR2/1　黒色粘土質シルト　粘性・しまりあり
　明黄褐色粘土（10YR6/6）１％含む。

P57
1　10YR2/1　黒色粘土質シルト　粘性・しまりあり
　径２～３㎜の炭化物１％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり
　黄燈色粘土（10YR8/6）５％含む。

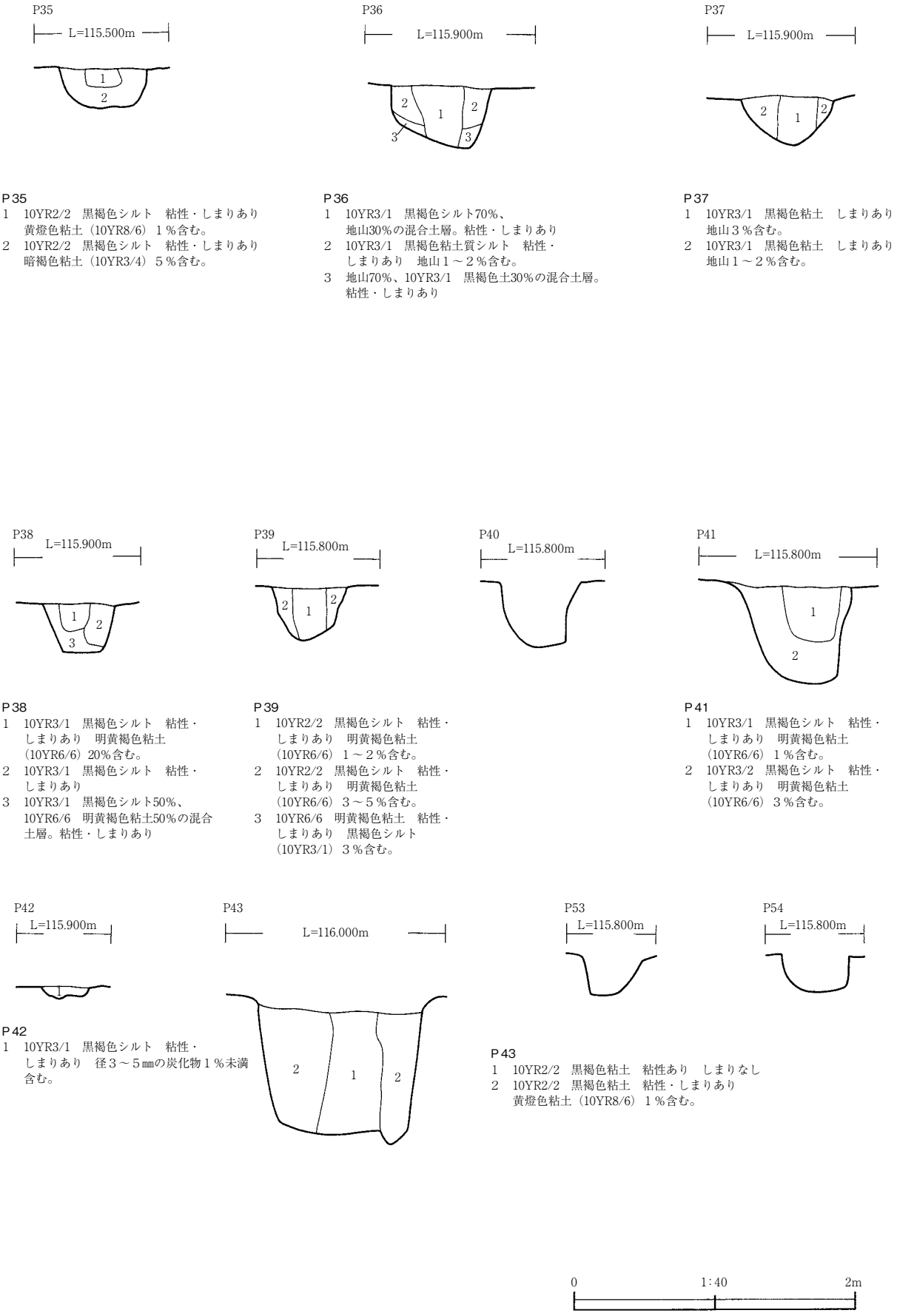
P58
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性あり　しまりややあり
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり
　地山１～２％含む。

P59
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性あり　しまりあり
2　10YR2/1　黒色粘土質シルト50%、地山50%の混合土層。
　粘性・しまりあり

P60
1　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・しまりあり
　地山１～２％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト70%、地山30%の混合土層。
　粘性・しまりあり
3　地山90%、10YR3/1　黒褐色粘土質シルト10%　粘性・しまりあり
　掘りすぎ？

P61
1　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり　明黄褐色粘土
　（10YR6/6）１～２％、明褐色焼土粒（7.5YR5/6　径３㎜）１％未満含む。
2　10YR2/1　黒色シルト　粘性・しまりあり　明黄褐色粘土（10YR6/6）
　３％、明褐色焼土粒（7.5YR5/6　径10㎜）１％未満含む。

第24図　柱穴状土坑（P23・24・31～34・55～61）



P35
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり
　黄燈色粘土（10YR8/6）１％含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・しまりあり
　暗褐色粘土（10YR3/4）５％含む。

P36
1　10YR3/1　黒褐色シルト70％、
　地山30％の混合土層。粘性・しまりあり
2　10YR3/1　黒褐色粘土質シルト　粘性・
　しまりあり　地山１～２％含む。
3　地山70％、10YR3/1　黒褐色土30％の混合土層。
　粘性・しまりあり

P37
1　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり
　地山３％含む。
2　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり
　地山１～２％含む。

P38
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり　明黄褐色粘土
　（10YR6/6）20％含む。
2　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり
3　10YR3/1　黒褐色シルト50％、
　10YR6/6　明黄褐色粘土50％の混合
　土層。粘性・しまりあり

P39
1　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり　明黄褐色粘土
　（10YR6/6）１～２％含む。
2　10YR2/2　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり　明黄褐色粘土
　（10YR6/6）３～５％含む。
3　10YR6/6　明黄褐色粘土　粘性・
　しまりあり　黒褐色シルト
　（10YR3/1）３％含む。

P41
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり　明黄褐色粘土
　（10YR6/6）１％含む。
2　10YR3/2　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり　明黄褐色粘土
　（10YR6/6）３％含む。

P42
1　10YR3/1　黒褐色シルト　粘性・
　しまりあり　径３～５㎜の炭化物１％未満
　含む。

P43
1　10YR2/2　黒褐色粘土　粘性あり　しまりなし
2　10YR2/2　黒褐色粘土　粘性・しまりあり
　黄燈色粘土（10YR8/6）１％含む。

第25図　柱穴状土坑　P35～43・53・54

Ⅴ　遺構外出土遺物

縄文土器

Ｃ区のグリッド付近から小コンテナ１箱分出土した。８点掲載した（31 ～ 38）。いずれも完形品ではなく破片での出土である。31は深鉢の口縁部破片で縄文中期前半、32 ～ 34は後期後半の深鉢の口縁部破片である。35 ～ 38は弥生時代の土器でいずれも口縁部の破片である。35は高坏の台部破片で、平行沈線およびミガキが施されている。36は突起を挟んだ表裏に中央部を押圧した円形粘土を貼付し、突起を挟んだ頂部と表裏の外縁に沿って沈線文が施されている。37・38は深鉢の口縁～胴部上半の破片で接合できなかったが同一個体の可能性が高い。口縁の波状突起には刻みが入り二又状になっている。また、口縁部にはナデ、口唇頂部には浅い沈線文が施されている。

古代土器

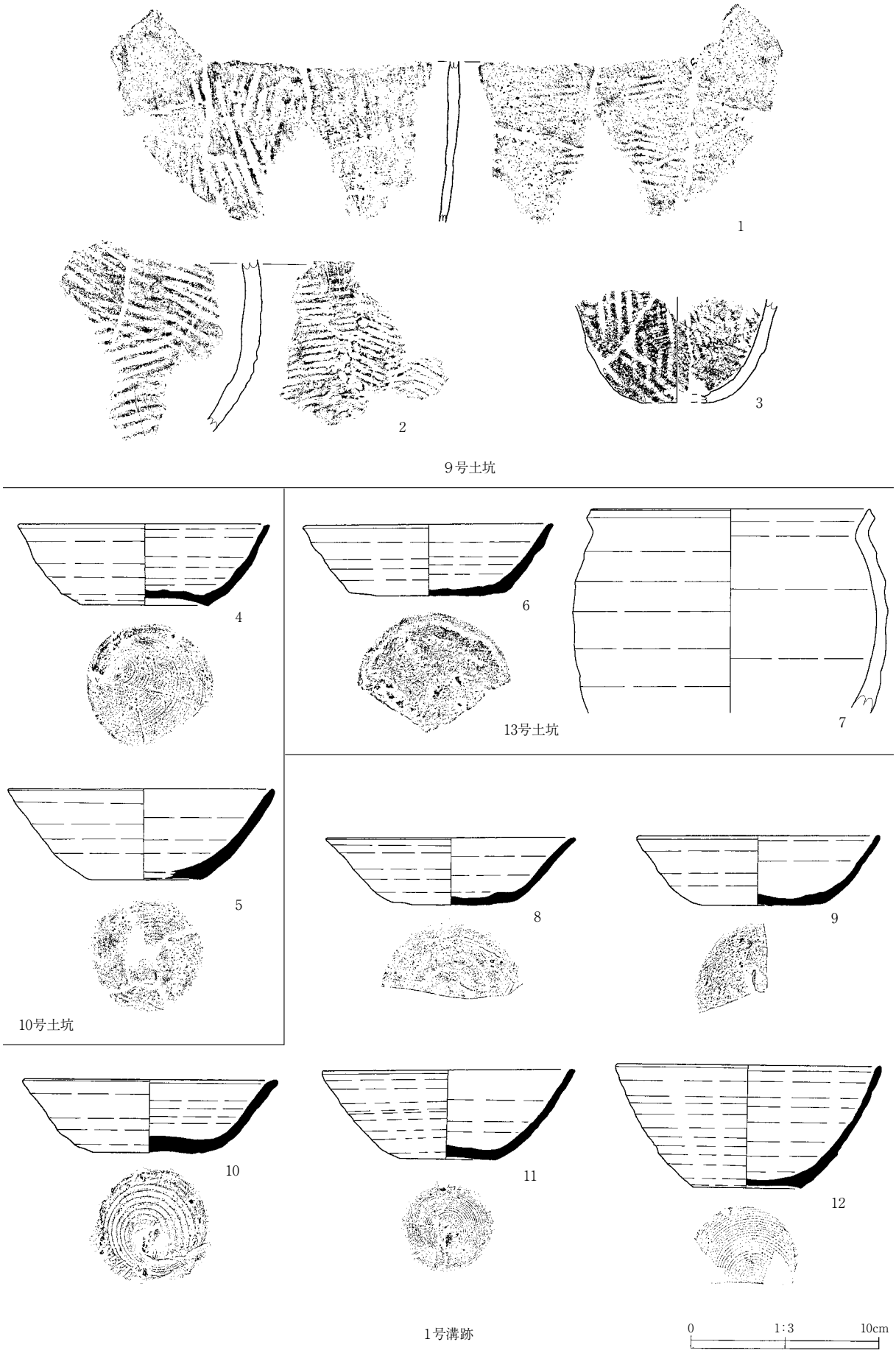
19～30が出土した。いずれもＡ区から出土し、器種は須恵器坏・台付坏・坏蓋・甕、土師器甕がある。19～24は須恵器坏ですべてロクロ成形によるもので底面の切り離し技法は19～21が回転ヘラ切り、22～24が回転糸切による。21・24は切り離し後、再調整が施されている。25は須恵器の台付坏で台部以外は欠損している。底部は回転糸切による切り離し技法である。26は須恵器蓋の摘み部で本遺跡では１点のみ出土した。27～29は土師器甕の口縁～胴部上半の破片で器面調整は29は摩滅のため不明であるが、27・28はロクロナデによる。30は須恵器甕の口縁～胴部上半で器面調整は口縁部が内外面ロクロナデ、胴部が外面はタタキ、内面はアテグ痕が残る。

石器

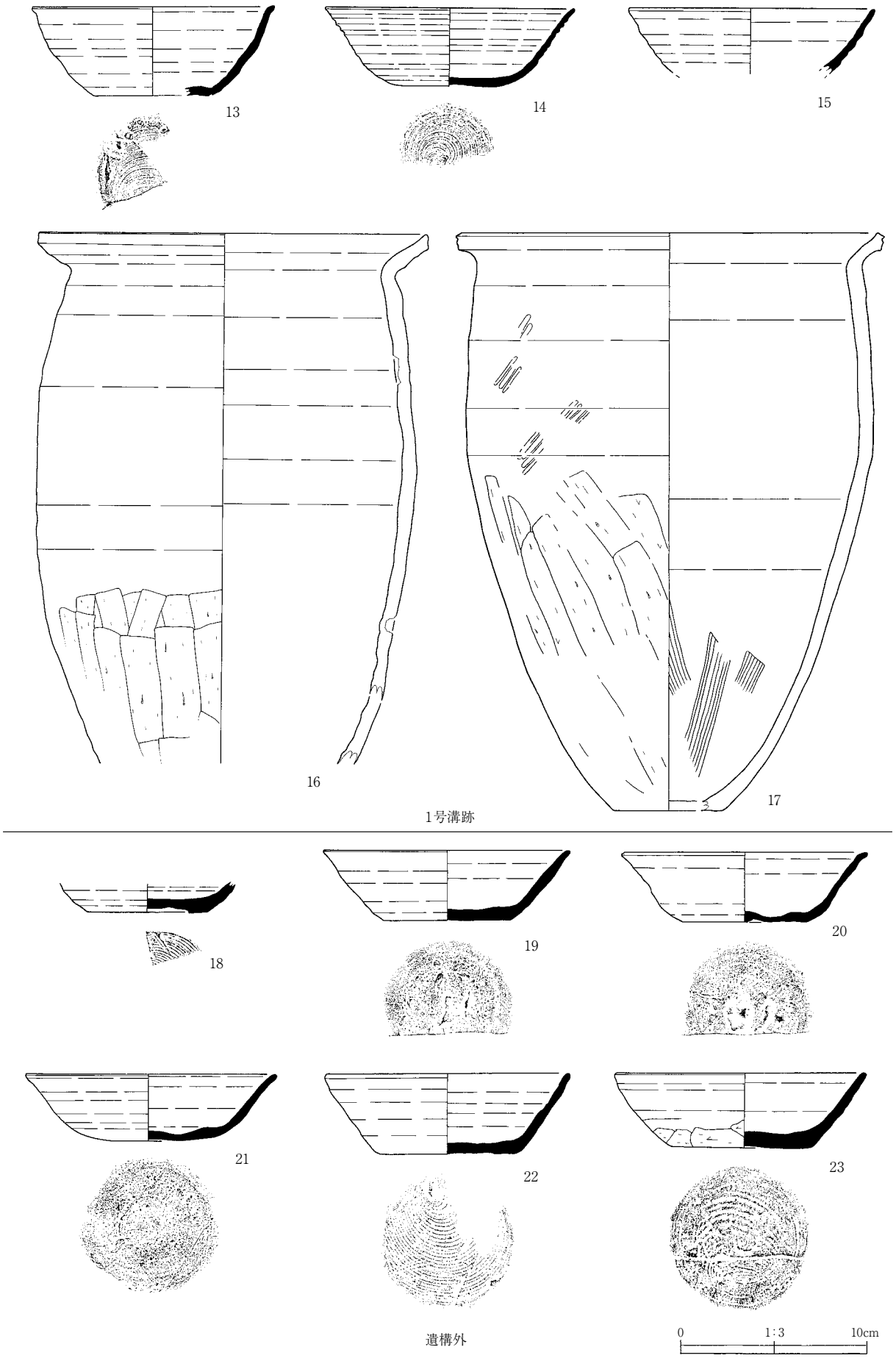
39～44が出土した。縄文土器同様、Ｃ区から出土した。39は石鏃で石材には黒曜石が使用されている。40は石匙で石材には頁岩が使用されている。41・42は刃部をもつ剥片石器で41は上部以外のすべて、42は下面に刃部があり、上面が欠損している。いずれも石材は頁岩である。43は石篦で石材には頁岩が使用されている。使用石材が頁岩である40～43のうち40～42が黄灰色で、43のみ灰白色である。44は片面に磨痕が認められる石器で石皿・台石などに使用したものと考えられるが欠損のため、詳細は不明である。石材は安山岩が使用されている。

古銭

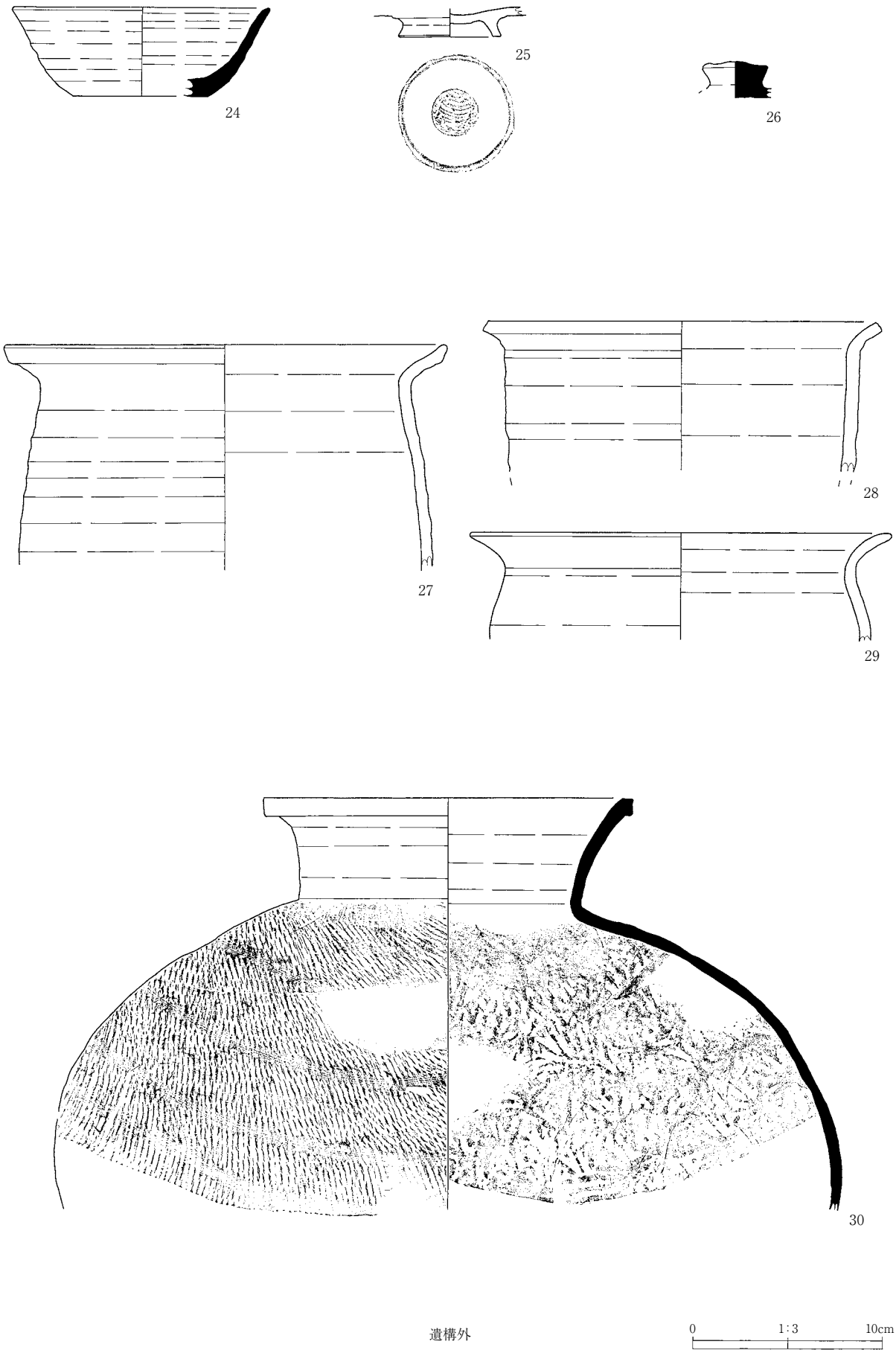
大半が墓壙内からの出土であるが、37・38が遺構外からの出土である。墓地内で出土したことから元来、墓壙内に納められていたものであったと考えられる。37は寛永通宝、38は元祐通寶で遺構内出土のものも含め北宋銭は33と38のみで、他はすべて寛永通宝である。また、寛永通宝はすべて銅銭である。



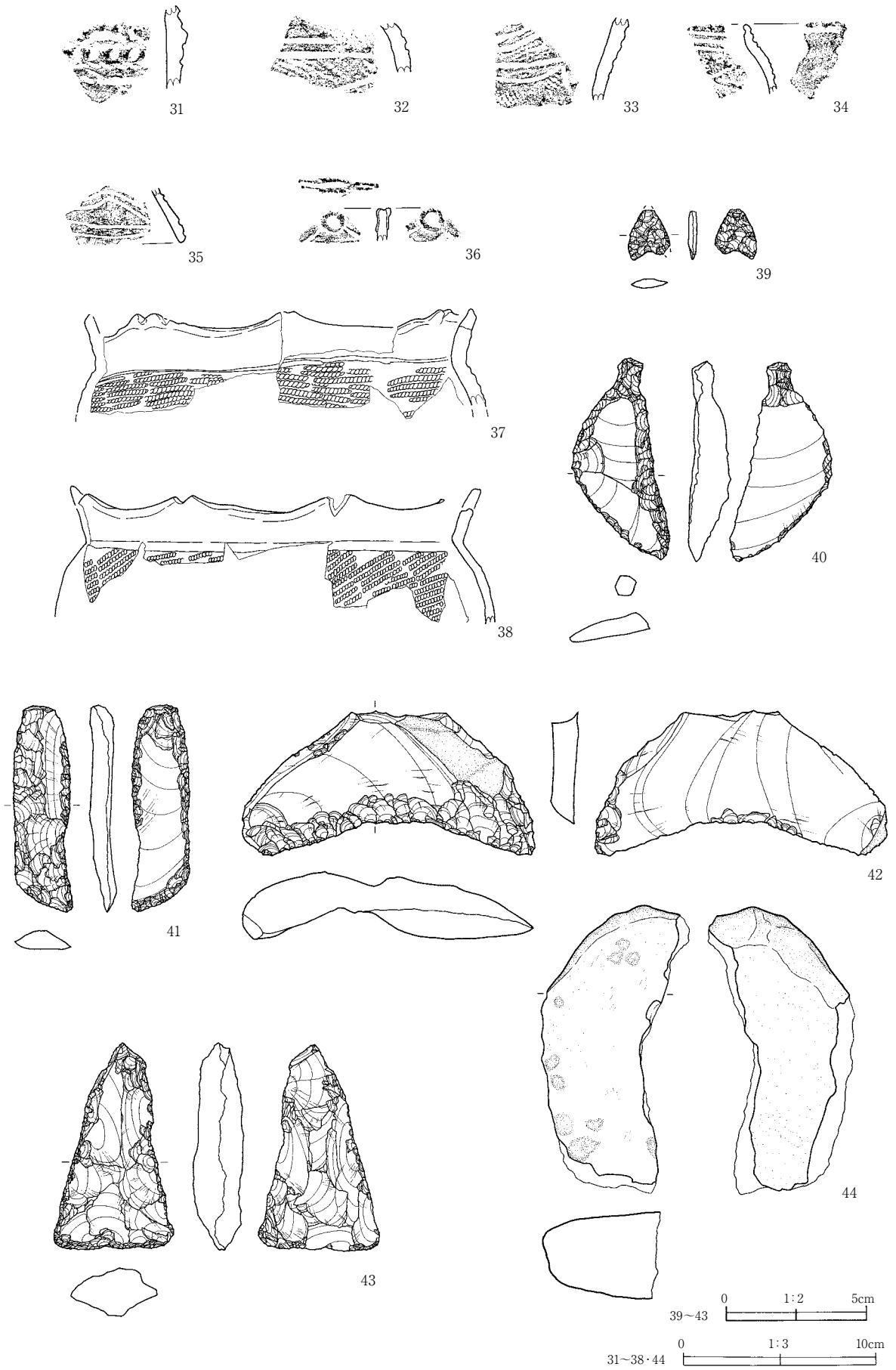
第26図　出土遺物１（古代土器）



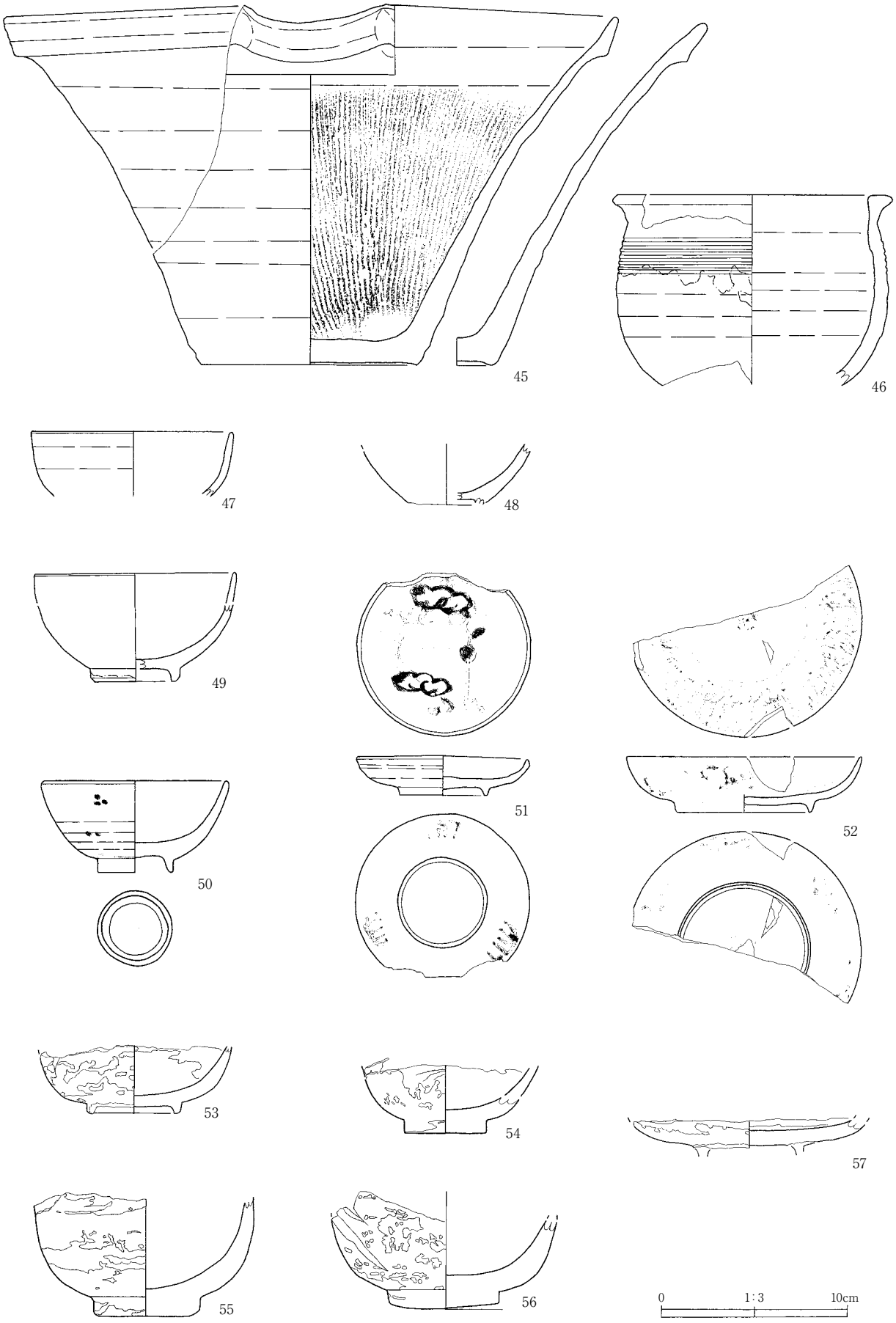
第27図　出土遺物２（古代土器）



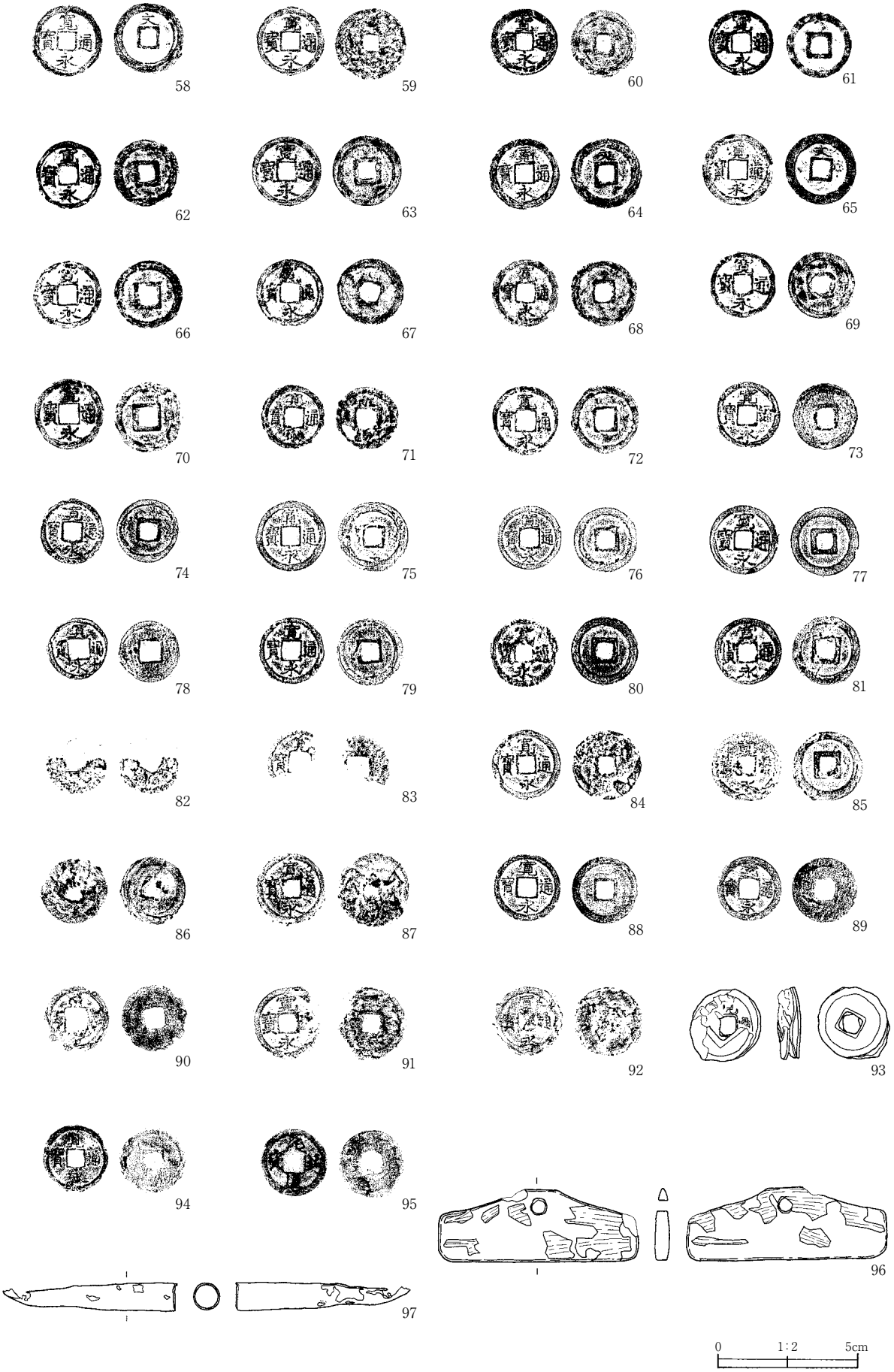
第28図　出土遺物３（古代土器）



第29図　出土遺物４（縄文土器・石器）



第30図　出土遺物５（陶磁器・木製品）



第31図　出土遺物６（金属遺物）

第６表　古代土器観察表

No	出土地点	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底部	重量（g）	備考	図版	写図
1	9号土坑	埋土	土師器	甕	胴部	—	—	—	タタキメ	アテグ	—	86.55		26	18
2	9号土坑	埋土	土師器	甕	胴部	—	—	—	タタキメ	アテグ	—	72.34		26	18
3	9号土坑、3号溝埋土、ⅢＡ１ｖ	埋土	土師器	甕	胴～底部	—	—	—	タタキメ	アテグ	—	39.87		26	18
4	10号土坑底面、3号溝、ⅢＢ24ａ、ⅡＡ19ｙ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏	口縁～底部	13.6	4.3	6.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	93.94		26	18
5	10号土坑土器②	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	14.3	4.9	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切→ヘラケズリ	150.59		26	18
6	13号土坑	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	(13.4)	3.8	(8.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切痕	76.62		26	18
7	13号土坑	埋土	土師器	甕	口縁～胴部	(15.0)	(10.9)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	115.37		26	18
8	1号溝、ⅡＡ20ｗ	埋土上位	須恵器	坏	口縁～底部	(13.4)	3.6	(7.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切→ナデ	53.95		26	18
9	1号溝、ⅡＡ20ｗ	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	13.0	3.7	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切→ナデ	32.11		26	18
10	1号溝、ⅡＡ19ｖ	埋土上位	須恵器	坏	口縁～底部	(13.6)	3.9	5.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	122.08		26	18
11	1号溝、ⅡＡ21ｂ	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	(13.6)	5.0	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	64.27		26	18
12	1号溝、ⅡＡ20ｗ	埋土上位	須恵器	坏	口縁～底部	14.2	6.5	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	101.52		26	18
13	1号溝、ⅡＡ19ｖ	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	(13.0)	4.7	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	63.82		27	19
14	1号溝、ⅡＡ21ｂ	埋土	須恵器	坏	口縁～底部	(13.2)	4.2	(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	134.5		27	19
15	1号溝、ⅡＡ21ｂ	埋土	須恵器	坏	口縁部	13.2	(3.4)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	30.2		27	19
16	1号溝、ⅡＡ19ｖ	埋土上位	土師器	甕	口縁～胴部	21.1	(28.2)	—	口～胴上位：ロクロナデ　胴下半：ヘラケズリ	ロクロナデ	—	1664.51		27	19
17	1号溝、ⅡＡ19ｖ、20ｖ	埋土上位	土師器	甕	口縁～胴部	(22.2)	(30.7)	(5.8)	口～胴上位：タタキ→ロクロナデ、胴下半：ヘラケズリ	胴上位～中位：ロクロナデ、胴下位：ヘラナデ(縦位)	摩滅	1507.35		27	19
18	4号溝、ⅡＡ21ｘ	埋土	須恵器	坏	胴～底部	—	(1.5)	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	23.28		27	19
19	ⅡＡ17ｗ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏	口縁～底部	(13.3)	3.8	(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	67.33		27	19
20	ⅡＢ18ｂ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏	口縁～底部	(13.2)	3.7	(6.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	60.03		27	19
21	ⅡＡ19ｙ	Ⅱ～Ⅲ層	須恵器	坏	口縁～底部	(13.5)	3.6	7.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切→ナデ	77.35		27	19
22	ⅡＡ22ｕ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏	口縁～底部	(13.2)	4.3	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	82.41		27	19

No	出土地点	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	底部	重量（g）	備考	図版	写図
23	ⅢＡ１ｘ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏	口縁～底部	13.5	4.1	7.6	ロクロナデ　胴下半：ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切→ヘラケズリ	149.12		27	19
24	ⅡＡ25ｘ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏	口縁～底部	(13.7)	4.7	(7.0)	口：ロクロナデ、胴：ロクロナデ	口：ロクロナデ、胴：ロクロナデ	摩滅	46.65		28	20
25	ⅡＡ18ｘ	撹乱	須恵器	台付坏	台部	—	(1.5)	5.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	39.63		28	20
26	ⅢＡ１ｙ	Ⅰ～Ⅱ層	須恵器	坏蓋	摘み部	紐直径3.6	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	23.4		28	20
27	ⅡＡ22ｕ	撹乱	土師器	甕	口縁～胴部	(23.5)	(11.9)	—	口：ロクロナデ、胴：ロクロナデ	口：ロクロナデ、胴：ロクロナデ	—	111.32		28	20
28	ⅡＡ21ｖ	Ⅰ～Ⅱ層	土師器	甕	口縁～胴部	(20.6)	(7.8)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	99.85		28	20
29	ⅡＡ21ｕ	撹乱	土師器	甕	口縁～胴部	(22.2)	(5.6)	—	摩滅	摩滅	—	44.48		28	20
30	ⅡＡ18ｘ	Ⅱ～Ⅲ層	須恵器	甕	口縁～胴部	19.6	(21.7)	—	口縁：ロクロナデ、胴部上位：タタキ	口縁：ロクロナデ、胴上位：アテグ	—	1916.59		28	20

＊（　）は口径・底径が推定値、器高は残存値。

第７表　縄文・弥生土器観察表

No	出土地点	層位	器種	部位	外面（文様）	内面（文様・調整）	重量（g）	備考	図版	写図
31	ⅡＡ18ｌ	Ⅲ層	深鉢	口縁部	貼付隆線(隆線上にＬ側圧)、原体圧痕文	ナデ	15.64		29	20
32	ⅡＢ12ｄ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	沈線文、ＬＲ縄文	ナデ	18.14		29	20
33	ⅡＢ12ｃ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	沈線文、ＬＲ縄文	ミガキ	15.57		29	20
34	ⅡＢ12ｄ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	沈線文、口唇部裏面に沈線文１本	—	4.35		29	20
35	ⅡＢ13ｄ	Ⅱ層	高坏	台部	平行沈線文	ミガキ	7.81		29	20
36	ⅡＢ13ｄ	Ⅱ層	深鉢	口縁部（突起部分？）	波状口縁の頂部内外面に円形の貼付文、口唇頂部と内外口縁に沈線文	ミガキ	3.14		29	20
37	ⅡＢ12ｄ	Ⅱ層	深鉢	口縁～胴部	波状口縁の突起部分に刻み、口唇頂部に浅い沈線文、ＬＲ縄文	ナデ	125.41	38と同一個体？	29	20
38	ⅡＢ12ｄ	Ⅱ層	深鉢	口縁～胴部	波状口縁の突起部分に刻み、口唇頂部に浅い沈線文、ＬＲ縄文	ナデ	115.33	37と同一個体？	29	20

第８表　石器観察表

No	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質・産地・時代	備考	図版	写図
39	石鏃	ⅡＢ22ｂ	Ⅱ層	(1.68)	(1.42)	0.36	0.64	黒曜石・産地不明	先端および基部の一部欠け	29	20
40	石匙	ⅡＢ12ｂ	Ⅱ層	6.60	3.13	1.08	14.53	頁岩・奥羽山脈・新生代第三紀		29	20
41	石匙	ⅡＡ18ｖ	Ⅰ～Ⅱ層	7.13	2.01	0.89	12.52	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三紀	摘み部欠け？	29	20
42	スクレーパー？	Ｃ区	Ⅱ層	5.01	10.19	2.28	75.05	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		29	20
43	石篦	ⅡＢ12ｂ	Ⅱ層	7.17	4.19	1.77	43.11	頁岩・奥羽山脈・新生代新第三紀		29	20
44	石皿？	ⅢＡ１ｙ	Ⅰ～Ⅱ層	(14.9)	(7.7)	4.95	604.45	安山岩・奥羽山脈・新生代新第三紀	台石か？	29	20

＊（　）は残存値。

第９表　木製品観察表

No	出土地点	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考	図版	写図
53	４号溝東端	埋土	椀	―	(4.8)	(3.4)	口縁部欠損、漆付着	30	21
54	４号溝	底面	椀	―	4.4	(3.6)	〃	30	21
55	４号溝	底面	椀	―	5.7	(6.6)	〃	30	21
56	４号溝	埋土	椀	―	5.9	(6.2)	〃	30	21
57	４号溝(ⅡＡ22ｗ)	埋土	皿	―	―	(1.5)	〃	30	21

＊（　）は底径が推定値、器高が残存値を示す。

第 10 表　陶磁器観察表

No	出土地点	層位	器種	種類	胎土	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	文様	備考	図版	写図
45	３号溝（ⅡＢ24ｘ）	埋土	擂鉢	炻器	2.5YR5/2灰赤色	(33.0)	(11.6)	19.2	883.73	口縁帯内面櫛目		30	21
46	３号溝（ⅡＢ24ａ）	埋土	甕	陶器	5Y6/1灰白	(15.0)	—	(10.2)	138.08			30	21
47	４号溝（ⅢＡ21ｘ）	埋土	碗	陶器	2.5Y8/1灰色	(10.8)	—	(3.5)	8.14			30	21
48	４号溝（ⅡＡ３ｙ）	埋土	碗	陶器	2.5YR8/2灰白色	—	—	(3.3)	24.68			30	21
49	４号溝（ⅢＡ21ｘ）	埋土	碗	陶器	2.5Y7/1灰色	—	(4.2)	(4.2)	33.67			30	21
50	４号溝（ⅡＡ22ｖ）	埋土	碗	磁器	2.5Y7/1灰白色	(9.8)	4.0	4.9	76.94	外面：梅草花文	肥前産	30	21
51	４号溝（ⅡＡ22ｖ）	埋土	皿	磁器	2.5Y7/1灰白色	9.4	4.8	2.0	71.85	外面：源氏香文	肥前産	30	21
52	４号溝（ⅡＡ20ｙ）	埋土	皿	磁器	2.5Y8/1白色	12.6	7.1	3.0	68.58	見込み：竹文、二重圏線、五弁花 外面：唐草文 裏底銘：二重角内に銘？	肥前産	30	21

＊（　）は口径・底径が推定値、器高は残存値を示す。

第 11 表　古銭観察表

No	出土地点	層位	銭名	素材	銭径(A)／銭径(B)(mm)	内径(C)／内径(D)(mm)	銭　厚(mm)	重量(g)	備考	図版	写図
58	2号墓壙	検出面	寛永通寶	銅	25.18／24.95	20.35／20.16	1.17～1.32	3.23	背文字『文』	31	22
59	2号墓壙	検出面	寛永通寶	銅	24.68／24.87	19.46／19.77	1.02～1.19	3.54		31	22
60	2号墓壙	検出面	寛永通寶	銅	23.85／23.97	18.67／17.74	1.20～1.36	3.26		31	22
61	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.37／23.35	19.17／19.84	1.38～1.42	3.67		31	22
62	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.82／23.99	19.87／19.78	1.13～1.24	3.06		31	22
63	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.60／24.59	19.94／20.00	1.02～1.14	3.05		31	22
64	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	25.08／25.09	19.51／19.68	1.20～1.22	2.98	背文字『文』	31	22
65	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	25.22／25.27	19.66／19.85	1.31～1.40	3.56	背文字『文』	31	22
66	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.03／24.27	19.65／19.82	1.18～1.25	2.96		31	22
67	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.39／23.69	18.66／18.63	0.96～0.98	2.34		31	22
68	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.73／24.08	18.72／19.07	1.03～1.15	2.63		31	22
69	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.79／23.80	19.71／19.64	1.27～1.36	3.38		31	22
70	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.68／24.86	19.73／19.98	1.14～1.25	2.68		31	22
71	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	22.36／22.38	18.36／18.08	0.88～0.94	(1.10)		31	22
72	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.31／23.92	20.25／20.33	1.13～1.16	2.42		31	22
73	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.19／23.09	19.12／19.04	1.26～1.30	2.66		31	22
74	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	22.97／22.86	18.72／18.88	1.20～1.26	2.44		31	22
75	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	25.10／25.17	19.78／19.78	1.14～1.17	3.24	背文字『文』？	31	22
76	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	22.96／22.91	18.36／18.37	1.02～1.12	2.72		31	22
77	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.52／24.48	19,74／19.72	1.15～1.25	3.18		31	22
78	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	21.89／21.24	18.43／18.37	0.93～0.95	1.61		31	22
79	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.62／23.58	19.27／19.34	1.05～1.15	2.43		31	22
80	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.27／24.11	19.72／19.68	1.12～1.14	2.62		31	22
81	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	24.65／24.16	19.83／19.88	1.16～1.23	2.93		31	22
82	3号墓壙	底面	寛永通寶	銅	／	／	―	(0.66)		31	22

＊（　）は残存値

No	出土地点	層位	銭名	素材	銭径(A)／銭径(B)(mm)	内径(C)／内径(D)(mm)	銭　厚(mm)	重量(g)	備考	図版	写図
83	3号墓壙	埋土	寛永通寶	銅	／	／	0.68～0.70	(0.45)		31	22
84	6号墓壙	埋土	寛永通寶	銅	24.71／24.62	19.71／19.55	1.35～1.46	3.23		31	22
85	6号墓壙	埋土	寛永通寶	銅	24.47／24.46	19.59／19.48	1.05～1.12	2.42		31	22
86	6号墓壙	埋土	寛永通寶？	銅	23.31／23.43	(17.71／17.65)	1.16～1.25	2.78		31	22
87	6号墓壙	埋土	寛永通寶	銅	24.39／24.56	19.82／20.10	ー	(4.93)	付着物あり	31	22
88	7号墓壙	底面	寛永通寶	銅	23.38／23.27	19.16／19.10	0.90～0.96	2.13		31	22
89	7号墓壙	底面	寛永通寶	銅	22.92／22.92	17.82／18.00	0.66～0.76	1.72		31	22
90	7号墓壙	埋土	元豊通寶？	銅	23.70／23.68	18.85／18.79	1.10～1.20	2.20	北宋銭1078年～	31	22

＊（　）は残存値

第12表　金属遺物観察表

No	出土地点	層位	器種	素材	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版	写図
96	2号墓壙	埋土	火打金	鉄	2.55	7.0	0.5	19.97		31	22
97	2号墓壙	埋土	煙管雁首	銅	(6.1)	0.95		2.20	雁首部欠損	31	22

Ⅵ　ま　と　め

本遺跡は紫波郡矢巾町大字下矢次地区に所在し、北上川右岸の沖積台地に立地している。今回の調査は周知の遺跡範囲の約10％である。周知の遺跡範囲は南北に長く、今回の調査では南北に横断するように北側・中央・南側にトレンチ状の調査区が載り、中央部で標高が高く、遺構・遺物が密集していると考えられる箇所には調査面積の半分以上が載っていたため、断片的ではあるが、ある程度、遺跡の性格が掴めたと理解している。今回Ｄ区では遺構・遺物が見つからなかったが、同じく微高地上にあるＡ区では縄文～近世までの各時代に亘って遺構・遺物が見つかっている。また、Ｂ区では近世以降と考えられる井戸跡、掘立柱建物跡、Ｃ区でも近世以降と考えられる柱穴状土坑、溝跡の他に旧沢跡（旧河道？）の西側で縄文・弥生時代の土器・石器が出土している。

今回の調査で明らかになった事項を各時期ごとに本文中の補足も兼ねて述べていきたい。

地形

本文中にも記したが、本遺跡の載る下矢次地区は北上川によって形成された沖積平野を西部山岳地帯を水源とする岩崎川がこれを横切って開析し、微高地とその谷間とによって形成されていることが明らかになった。今回の調査でもＡ区とＤ区の西側が微高地にあり、Ｂ・Ｃ区が谷間地形にあったことが判明した。

縄文・弥生時代

縄文時代の遺物は土器・石器で小コンテナ１箱分出土した。大半がＣ区のⅡＢ12ｄ～13ｄグリッドからの出土であるが、Ａ区からも少量出土した。時期は縄文後期と弥生前半のものが多い。また、これらに伴う遺構は見つかっていない。隣接する遺跡の過去の調査でも縄文時代の遺構は見つかっておらず、散布地的な出土傾向の域をでるものではない。

古代

古代に属する遺構は９・10・13号土坑の３基で、いずれも埋土や遺構底面から遺物が見つかっている。13号土坑の底面には焼土が広い範囲にあり、何らかの目的のために焼成を行ったものと考えられる。また、９号土坑から出土した土師器の甕の胴～底部にかけての破片は外面にタタキ目、底部が丸い形状を呈するもので、これは当時日本海側にある地域で使用された技法で、北陸系甕・出羽甕と呼ばれるものである。これらの遺構の年代観は土器の特徴から９世紀前半代である。また、１号溝の埋土上～中位からも９世紀代前半の須恵器坏や土師器甕が出土しているが、同じ埋土内に灰白色火山灰（白頭山苫小牧テフラ、Ｂ－Ｔｍ）が混入していることから、遺物は二次混入である可能性が考えられ、遺構の年代はＢ－Ｔｍ降下以降の10世紀中葉以降であると考えている。

近世

近世の遺構としては１～12号墓壙、３・４号溝がある。墓壙内からは副葬品として当時の流通貨幣である「寛永通寶」や煙管、火打金が出土している。遺構の一部は東側の調査区外へと延びており、墓域はさらに東側へとの広がるものと考えられる。３・４号溝からは近世陶磁器が出土しているが、４号溝からは他に木製椀・皿、近世以降の陶磁器やガラス製品なども出土しており、18世紀以降、長

期間に亘って使用されていた遺構であったことが分かった。

その他

掘立柱建物跡が３棟検出されている。１号掘立柱建物跡については土師器の破片が柱穴埋土から出土しているが時期の詳細は不明である。２・３号掘立柱建物跡からは遺物は出土していないが、検出状況から時期は近世以降に属する可能性が高い。

分析資料について

今回の調査で９世紀前半代の遺物が多量出土した１号溝跡の埋土上～中位層に含まれる灰白色火山灰の起源を特定するべく分析依頼した。分析にあたっては当初、降下堆積が東北地方一帯に認められている、西暦915年に十和田カルデラより噴出した十和田aテフラを予想し、遺構の埋没時に堆積したものと考え、遺構の時期を判断する根拠になるものと考えた。

しかし、分析の結果、白頭山苫小牧テフラ(B-Tm)に由来すると考えられるとの結果を得た。同テフラの出年代はTo-aより後の年代に位置付けられる暦年代で西暦942年前後とされ、同じ遺構埋土内に含まれていた土器片とは約100年ほどの時期の隔たりがあり、分析結果文中に指摘されているように、遺構の構築年代＝遺物の年代であれば、遺構埋没時にTo-aが含まれる可能性が高い。さらに遺構の下位の埋土には遺物および灰白色火山灰が全く含まないことから、１号溝跡は白頭山苫小牧テフラ(B-Tm)の降下以降（10世紀中葉以降）前後に構築されたものである可能性があることが明らかになった。

総括

今回行った発掘調査では前述のとおり遺跡全体の約10％に過ぎず、調査区も４箇所に分かれていたため、散発的な調査成果であった感は否めない。今回の調査に限っていえば、遺跡の主体は古代（９世紀前半）と近世に大きく分かれる。

縄文～弥生時代はＡ・Ｃ区の一部の限られた箇所でのみ見つかったが、これは、縄文時代の遺物を包含するⅢ層が後世の開発による影響で、他に残っていなかったことにもよる。ただし、遺構などは遺物の出土範囲も含め、全くなかったため、今回の調査では縄文～弥生時代に限っては遺物散布地の域をでるものではない。

古代については土坑３基のみが当該期の遺構と考えられるが、遺物は１号溝をはじめ、他の遺構の埋土からも出土している。また、遺構外からも出土していることから、今回の調査では居住を裏付ける住居跡は見つからなかったが、集落に隣接する可能性が高い。出土した遺物には９世紀前半代に見られる須恵器坏で、底部をヘラ切りによって切り離す技法を用いた特徴をもつものも出土している。９世紀前半代には本遺跡から南東約2.6㎞の場所に律令国家最後の城柵である史跡『徳丹城』があるが、今回の調査では直接これに関わる遺構・遺物は見つかっていない。

近世については墓地・掘立柱建物跡・溝などがあり、この場所に居住していた痕跡が確認された。遺物には墓壙に埋葬されていた銭貨・火打金・煙管、溝から出土した陶磁器・木製椀などが見つかっている。

また、近世墓壙をはじめ古代の土坑、その他掘立柱建物跡・柱穴状土坑など遺構の多くがＡ区の中央部より東側にあることから、調査区外の東～南東部に遺跡の主体が延びているものと考えられる。

参考文献

岩手県教育委員会　1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅲ－』（岩手県文化財調査報告書第35集）

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『金附遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集）

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2010『野沢Ⅱ・舟渡Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第586集）

矢巾町教育委員会　2010『徳丹城跡－第69次発掘調査－』

附編　高畑遺跡の自然科学分析

火 山 灰 分 析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県紫波郡矢巾町に所在する高畑遺跡は、北上低地帯北部の北上川右岸に広がる沖積低地に位置する。発掘調査所見によれば、本遺跡付近は周辺よりやや高い微高地に相当することから、本遺跡は北上川によって形成された自然堤防に由来する微高地上に立地すると考えられる。

今回の分析調査では、調査区内で検出された溝埋積層中に認められた火山灰（テフラ）とされる堆積物について、それを構成する砕屑物の特徴を調べ、その重鉱物組成および火山ガラスの形態を明らかにすることにより、火山灰であることを確認する。さらに、火山ガラスを含む火山灰である場合には、火山ガラスの屈折率の測定を行い、既知の指標テフラとの対比を行う。

１．試料

試料は、１号溝の埋積土層から採取された灰白色を呈する砂質シルト１点である。試料名は「１号溝埋土中火山灰サンプル」とされている。１号溝の埋積土層は、検出面から最大で深さ約80cmを測り、その上部から中部付近の層位で、試料が採取された灰白色を呈する不定形のブロック状堆積物が認められている。発掘調査の結果、試料採取層準付近からは、９世紀初頭とされる土師器や須恵器の破片が出土している。

２．分析方法

（１）テフラの検出・同定

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

（２）重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は上述したテフラの検出同定と同様である。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

３．結果

（１）テフラの検出・同定

結果を表１に示す。処理後の砂分中には微量の火山ガラスが認められた。火山ガラスは無色透明のバブル型と無色透明の塊状の軽石型が混在する。火山ガラス以外の砂分は、極細粒砂径以下の長石類と思われる鉱物粒である。

表1. テフラ分析結果

試料名	スコリア	火山ガラス		軽石
	量	量	色調・形態	量
1号溝埋土中 火山灰サンプル	−	＋	cl・bw,cl・pm	−

凡例　−:含まれない. (+):きわめて微量. ＋:微量. ＋＋:少量.
＋＋＋:中量. ＋＋＋＋:多量.
cl:無色透明. bw:バブル型. md:中間型. pm:軽石型.

（２）重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定結果を表２、図１に示す。重鉱物組成は、斜方輝石が最も多く、約60%を占め、次いで単斜輝石が20%程度、不透明鉱物が10数%であり、他に微量のカンラン石などが含まれる。火山ガラス比では、無色透明のバブル型火山ガラスが微量、無色透明の軽石型火山ガラスが極めて微量認められた。火山ガラスの屈折率の測定結果を、図２に示す。レンジはn1.519-1.523、モードはn1.520-1.521である。

表2. 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1号溝埋土中 火山灰サンプル	3	63	20	13	1	100	10	1	5	234	250

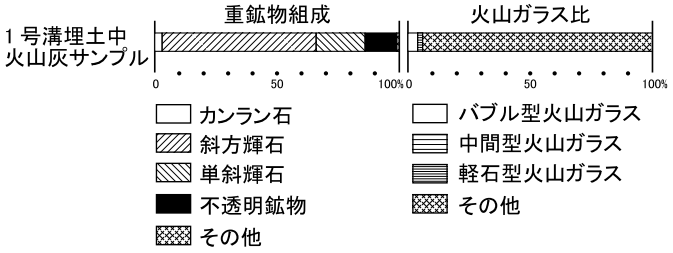


図 1. 重鉱物組成および火山ガラス比

４．考察

試料から検出された微量の火山ガラスは、その形態と高い屈折率の値および高畑遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981;984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（2003）など）との比較から、白頭山苫小牧テフラ（B-Tm）に由来すると考えられる。B-Tmは、10世紀に中国と北朝鮮の国境に位置する白頭山から噴出したテフラであり、岩手・秋田県北部以北と北海道のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981;町田・新井,2003）。なお、その詳細な噴出年代については、早川・小山（1998）が歴史記録の解釈から、西暦946年としている。その後、Yatsuzuka et al.（2010）は、白頭山北東麓における火砕流堆積物中の炭化材の放射性炭素年代測定により、B-Tmの噴出年代を暦年代で西暦942年前後という年代を提示している。なお、B-Tmの斑晶鉱物含量は極僅かで、重鉱物は単斜輝石が認められるという記載（町田・新井,2003）から、今回の重鉱物分析で示された重鉱物組成はB-Tmに由来するものではないと考えられる。その組成と高畑遺跡の地理的位置から、秋田駒ヶ岳や岩手山などのテフラに由来すると考えることができ、B-Tmと周辺の土壌が混じった状態と言える。

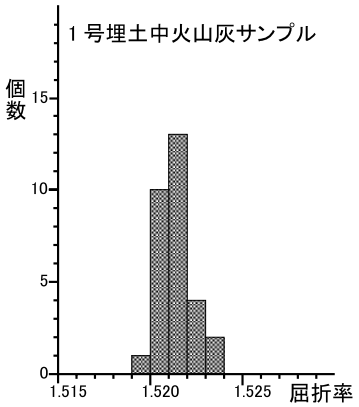


図 2. 火山ガラスの屈折率

今回の分析試料では、火山ガラスの含有量は少なかった。試料とともに添付資料として提供された

写真によると、この火山灰を含む埋積土層の断面の特徴から、B-Tm降下堆積物が堆積後に撹乱を受けたことが想定される。すなわち、１号溝の埋積が上位～中位に及んだ頃、B-Tmの降灰があった可能性がある。その場合、１号溝の構築と使用時期は、上述したB-Tmの噴出年代の10世紀中頃より以前と言うことになる。

ところで、B-Tmの噴出の約30年前（西暦915年）には十和田カルデラの噴火があり、同カルデラより噴出した十和田aテフラ（To-a）の降下堆積が東北地方一帯に認められている（町田ほか,1981）。当社におけるこれまでの分析事例においても、盛岡市周辺では細粒の軽石と火山ガラスからなるTo-aの降下堆積物が認められている。その周辺における産状を考慮すると、１号溝の機能時あるいは埋積時にもしTo-aの降灰があった場合には、ほぼ確実に火山灰層として溝内の埋積土層中で確認できると予想される。今回の発掘調査では、それに相当する堆積物が認められなかったことから、１号溝はTo-aの降灰の後に構築された可能性がある。今回の発掘調査所見より、試料採取層準付近から古代の土器（９世紀前半代）が出土したとされることと、前述した今回の分析試料の火山灰分析結果に基づき推定した１号溝の構築年代とは、およそ100年間の隔たりがあることとなる。今後その年代の決定にあたっては、溝内の埋積土の堆積過程や遺物が包含されるまでに由来などを含めて検討されることが望まれる。また、調査区周辺の基本土層におけるTo-aの産状を確認するなど、自然科学的な側面からの検討が、さらに必要となると考えられる。

引用文献

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyauchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K, 1986, Catalog for late quaternary marker-
tephras in JapanⅡ－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, 223-250.

古澤　明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.

早川由紀夫・小山真人, 1998, 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－. 火山, 43, 403-407.

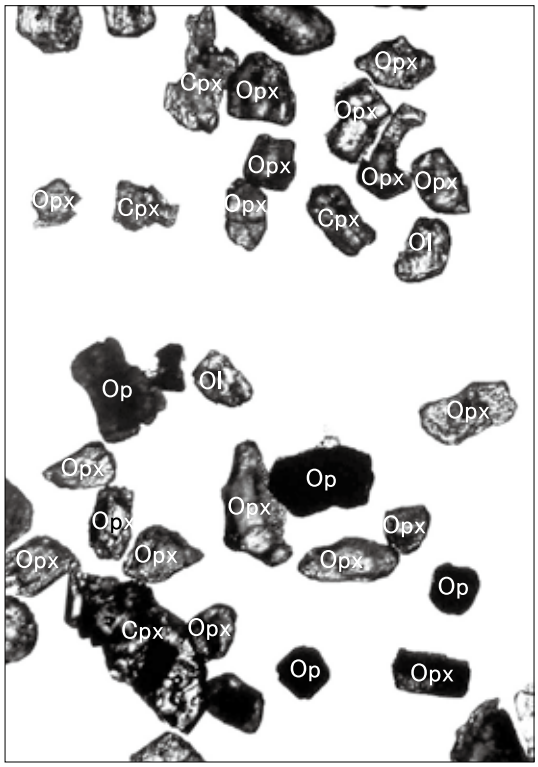
町田　洋・新井房夫, 2003, 新編　火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広, 1981, 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, 562-569.

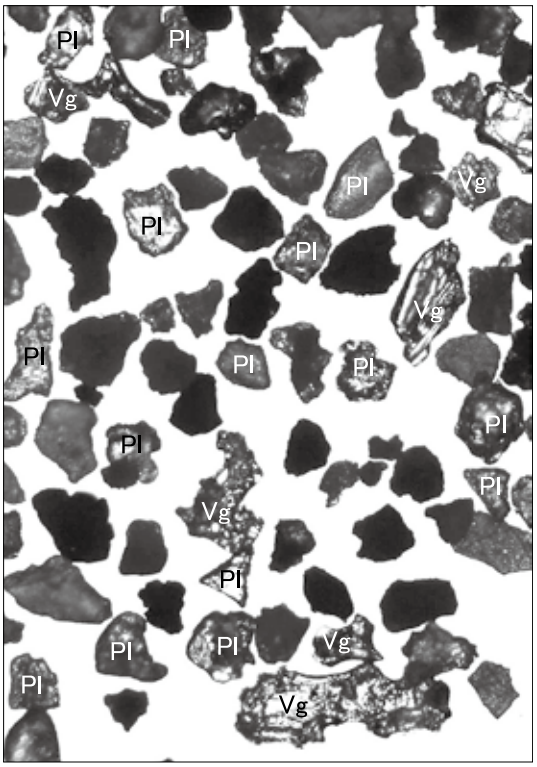
町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦, 1984, テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－. 渡辺直経（編）古文化財に関する保存科学と人文・自然科学. 同朋舎, 865-928.

Yatsuzuka, S.・Okuno, M.・Nakamura, T.・Kimura, K.・Setoma, Y.・Miyamoto, T.・Kyu, H. K.・Moriwaki, H.・Nagase, T.・Xu, J.・Bo, L. J.・Takahashi, T.・Taniguchi, H. , 2010, 14C Wiggle-Matching of the B-Tm Tephra, Baitoushan Volcano. RADIOCARBON, Vol52, 933-940.

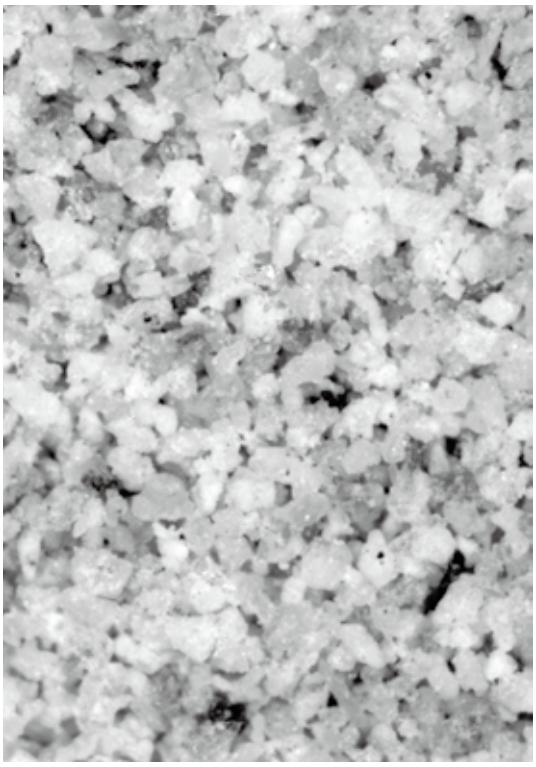
図版1　重鉱物・火山ガラス・砂分の状況



1.重鉱物(1号溝埋土中火山灰サンプル)



2.軽鉱物(1号溝埋土中火山灰サンプル)



3.砂分の状況(1号溝埋土中火山灰サンプル)

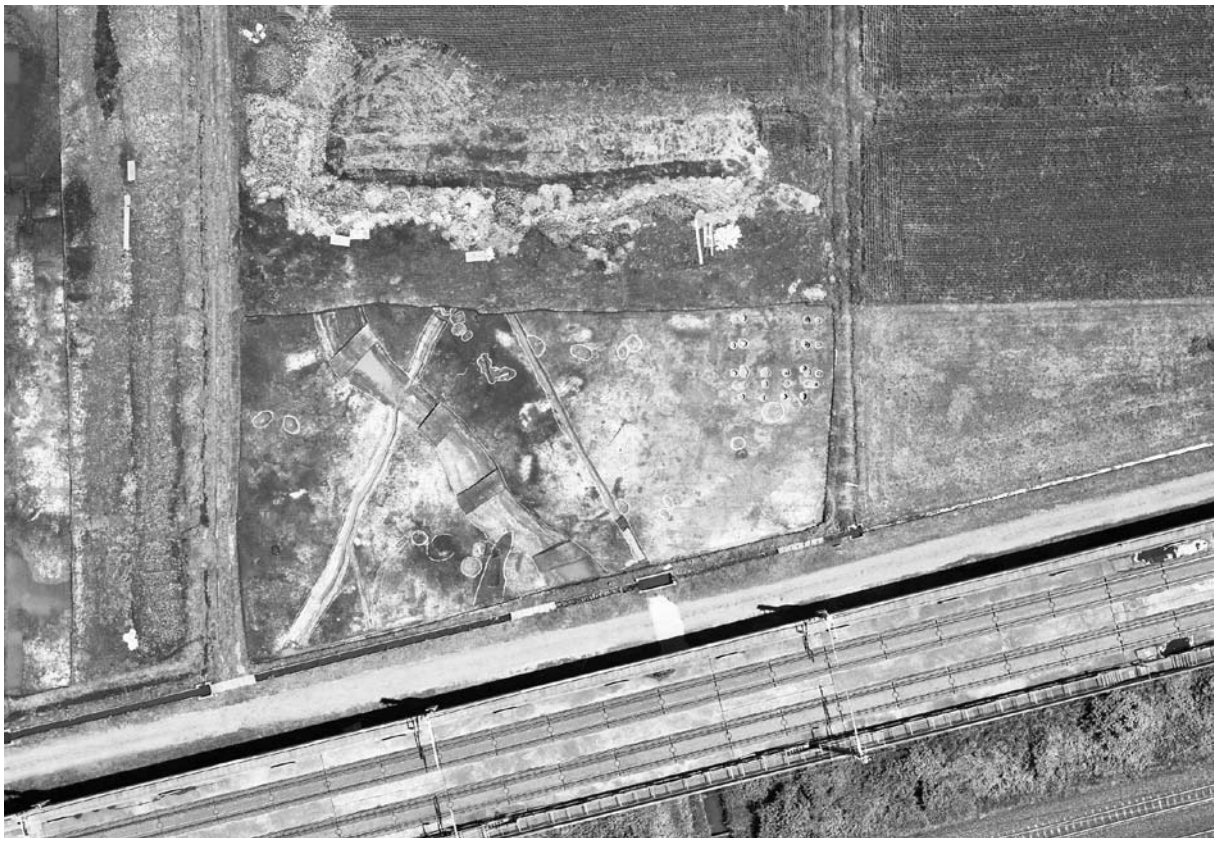
Ol:カンラン石．Opx:斜方輝石．Cpx:単斜輝石．Op:不透明鉱物．Vg:火山ガラス．Pl:斜長石．

写　真　図　版

遺跡遠景・NW→

調査区全景（上が西）

写真図版１　航空写真



調査区近景（上が東）

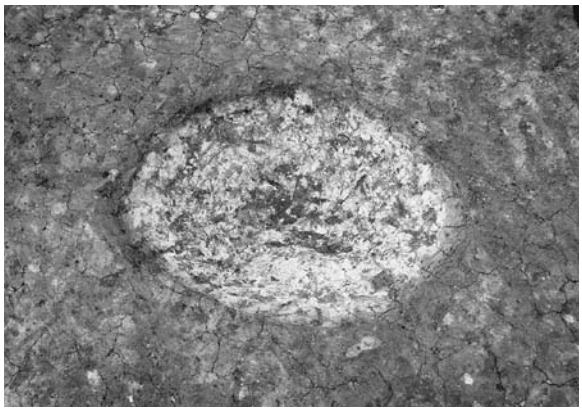
調査前風景・NW→

写真図版２　調査区近景、風景

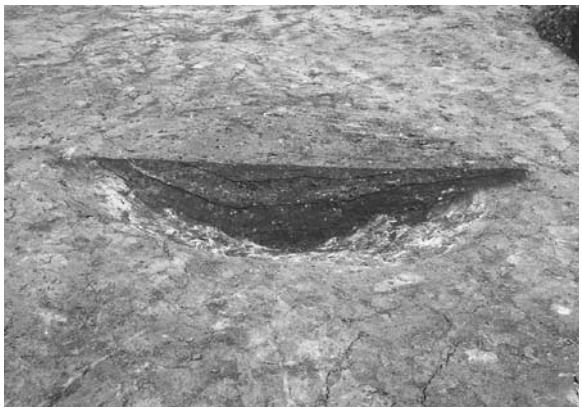
調査区北側近景・ＳＷ→

基本土層・S→

写真図版３　調査区、基本土層



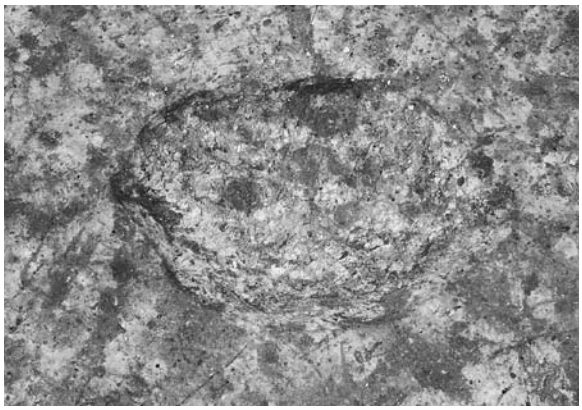
１号土坑完掘・SE→



１号土坑断面・SE→

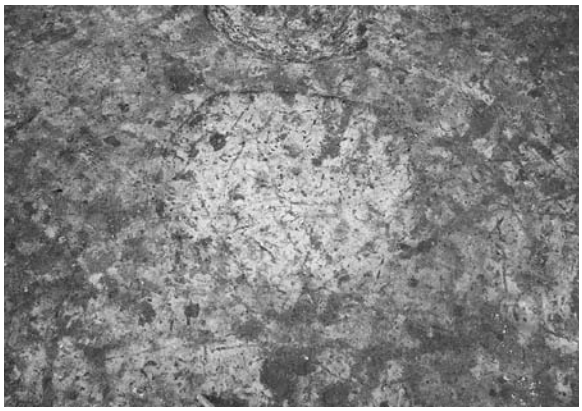
２号土坑完掘・NE→

２号土坑断面・SW→

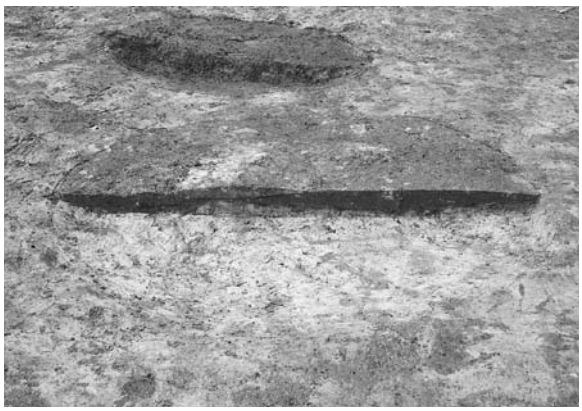


３号土坑完掘・S→

３号土坑断面・S→

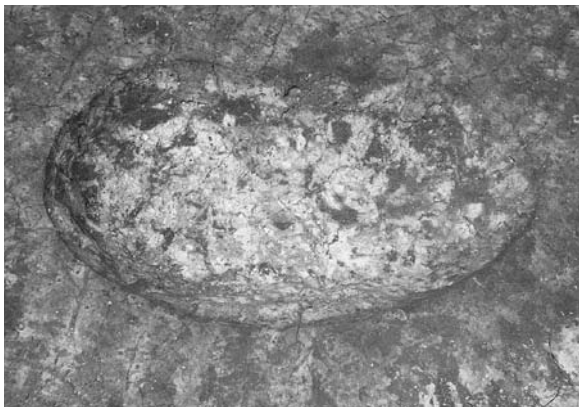


４号土坑完掘・SE→

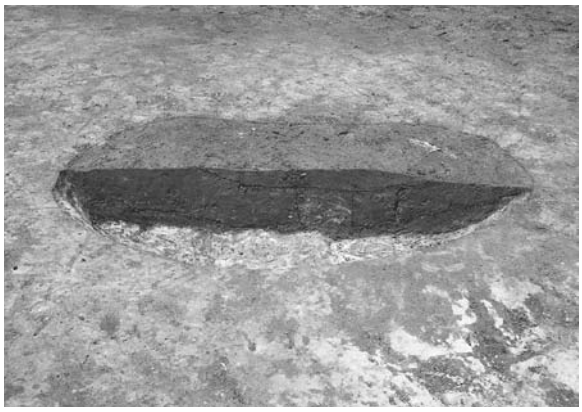


４号土坑断面・S→

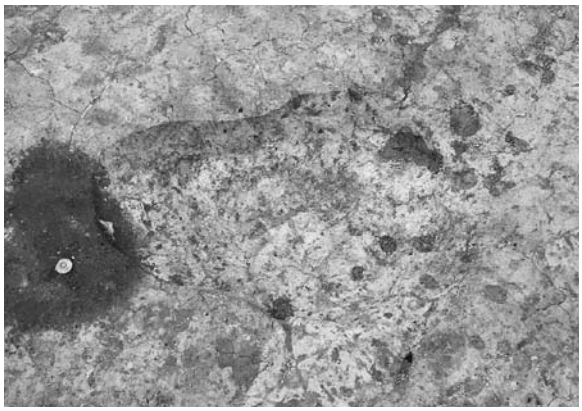
写真図版４　１～４号土坑



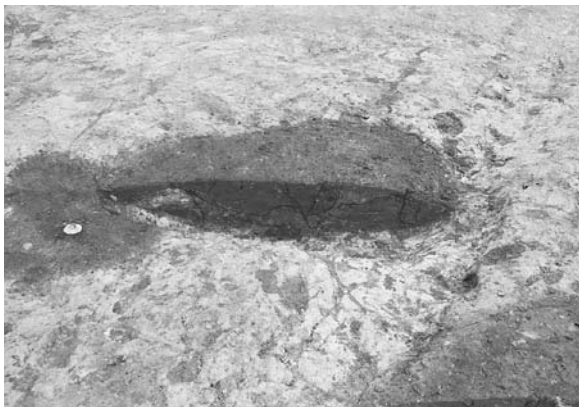
５号土坑完掘・SE→



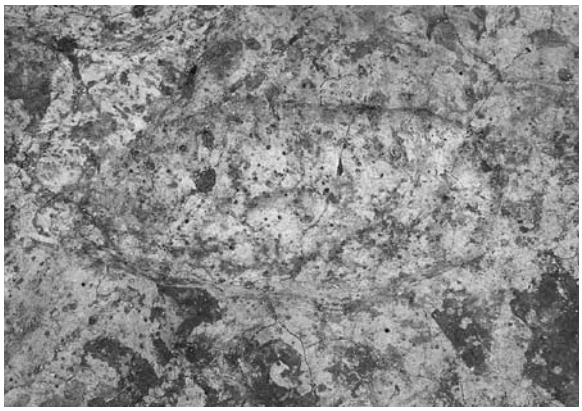
５号土坑断面・SE→



６号土坑完掘・S→



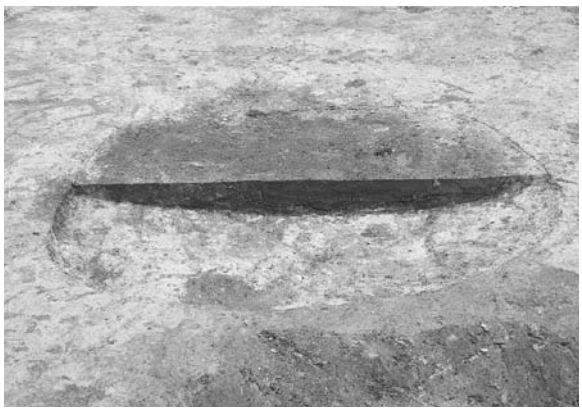
６号土坑断面・S→



７号土坑完掘・S→

７号土坑断面・S→

８号土坑完掘・S→



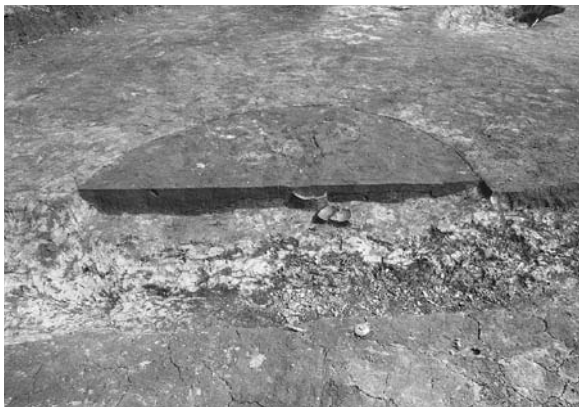
８号土坑断面・W→

写真図版５　５～８号土坑

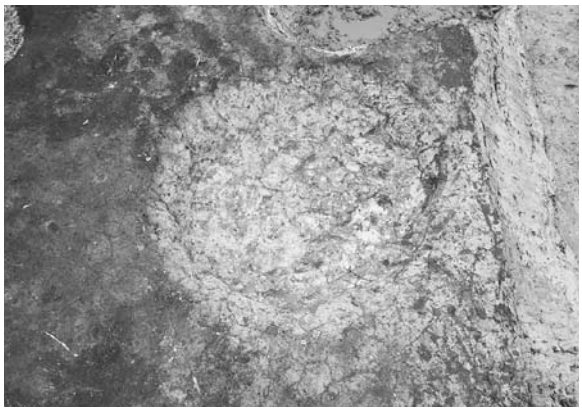
９号土坑完掘・N→

９号土坑断面・N→

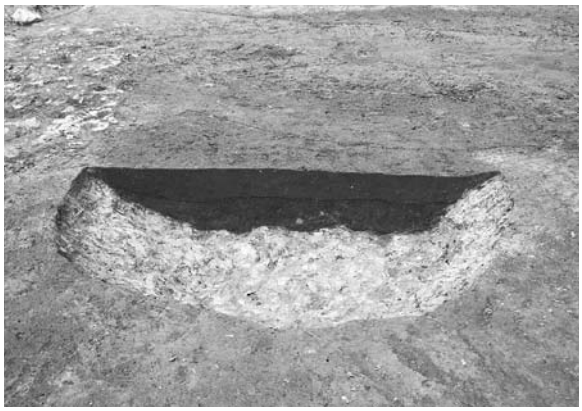
10号土坑平面・N→



10号土坑断面・N→

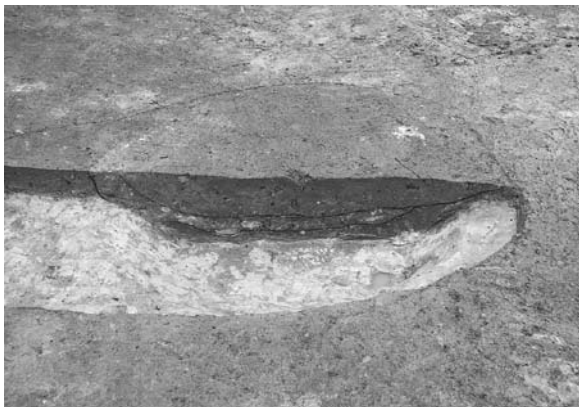


11号土坑完掘・W→



11号土坑断面・N→

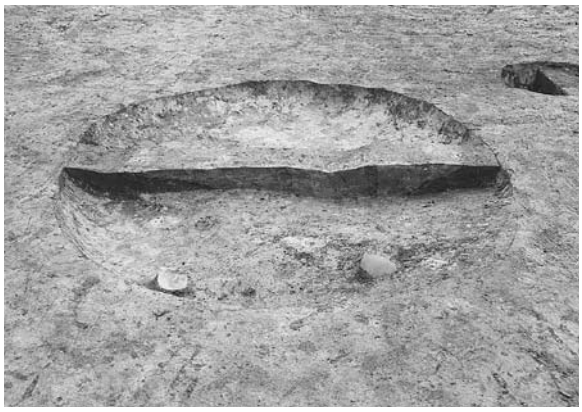
12号土坑完掘・SE→



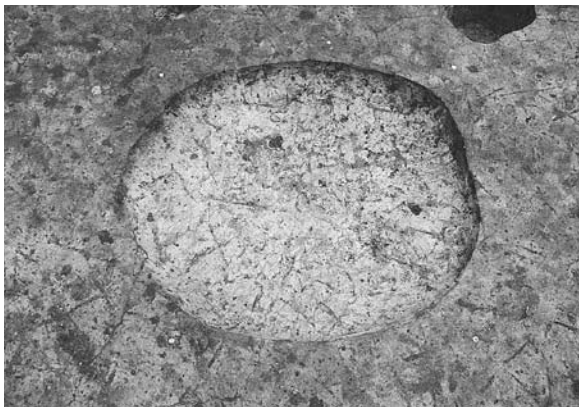
12号土坑断面・SE→

写真図版６　９～12号土坑

13号土坑内遺物出土状況・S→



13号土坑断面・S→

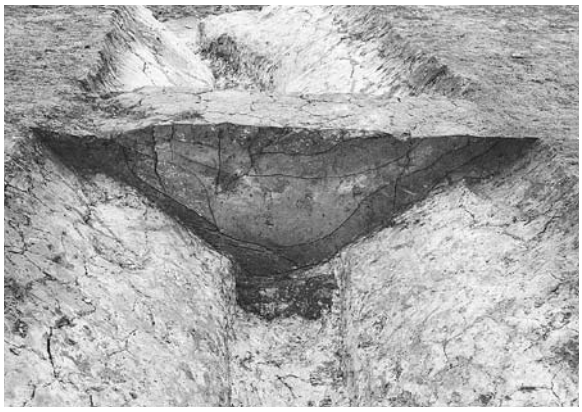


13号土坑完掘・W→

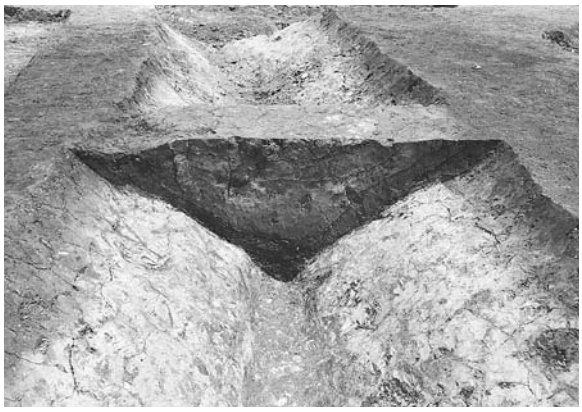
13号土坑内焼土断面・NW→.

1号井戸跡平面・N→

1号溝跡完掘・SE→

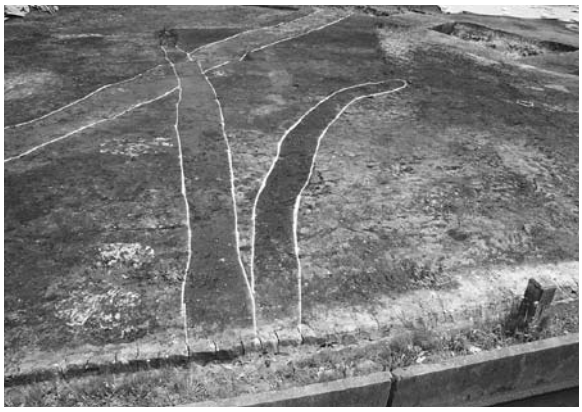


1号溝跡西側断面・W→



1号溝跡東側断面・W→

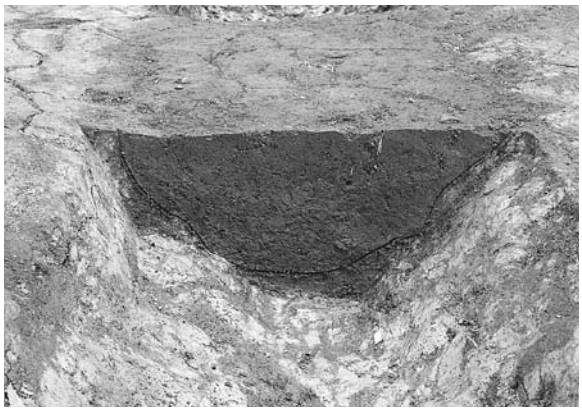
写真図版７　13号土坑、1号井戸跡、1号溝跡



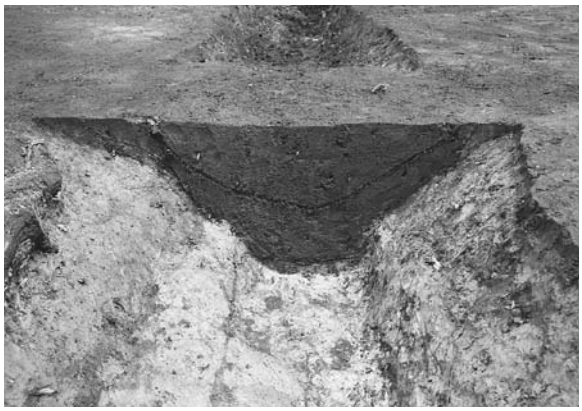
２号溝跡検出・W→

２号溝跡断面・E→

３号溝跡完掘・W→



３号溝跡西側断面・W→



３号溝跡東側断面・W→

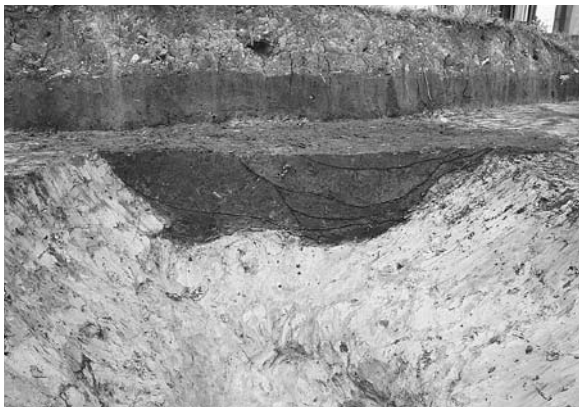
３号溝跡遺物出土状況・S→

４号溝跡平面・ＳＷ→

４号溝跡断面・SW→

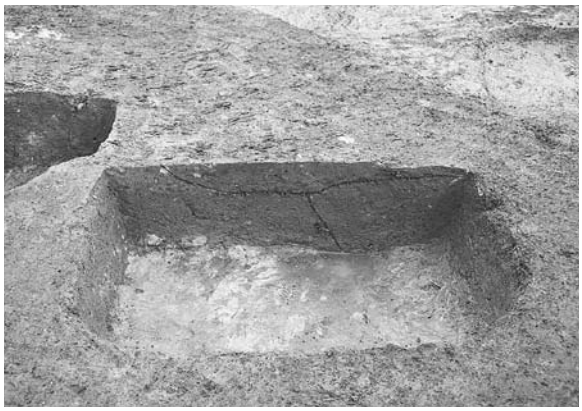
写真図版８　２～４号溝跡

５号溝跡完掘・Ｓ→



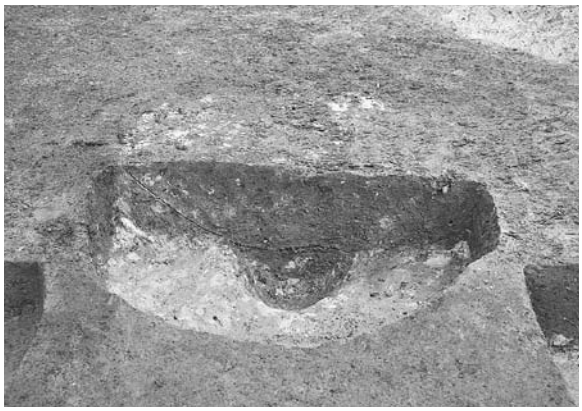
５号溝跡断面・Ｅ→

１号墓壙完掘・S→



１号墓壙断面・SE→

２号墓壙完掘・S→



２号墓壙断面・SE→

３号墓壙検出・W→

３号墓壙断面・SW→

写真図版９　５号溝跡、１～３号墓壙

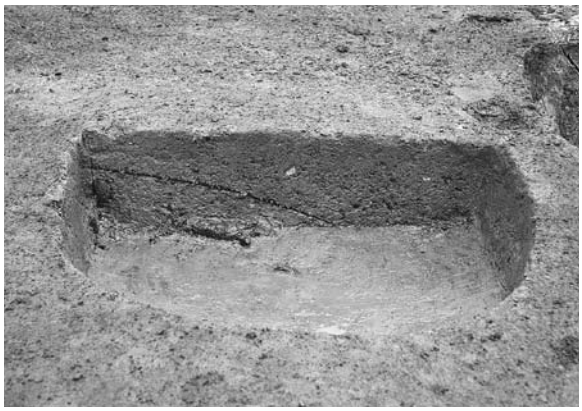
３号墓壙平面・W→

３号墓壙遺物出土状況・W→

４号墓壙平面・W→

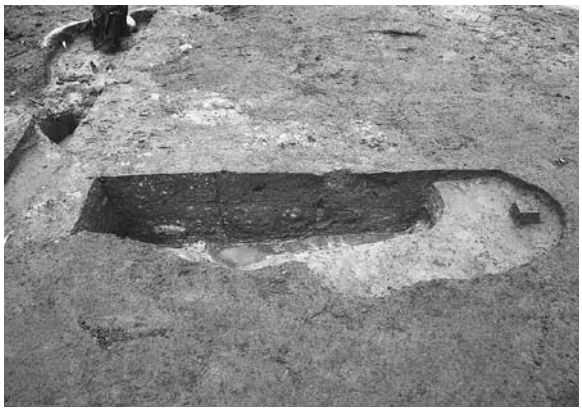
４号墓壙断面・W→

５号墓壙完掘・S→



５号墓壙断面・SE→

６号墓壙平面・W→



６号墓壙断面・N→

写真図版10　３～６号墓壙

７号墓壙平面・N→

７号墓壙完掘・N→

８号墓壙完掘・S→

９号墓壙完掘・N→

10号墓壙平面・N→

11号墓壙完掘・NW→

10（右）・12（左）号墓壙完掘・N→

７・９～12号墓壙断面・N→

写真図版11　７～12号墓壙

１号掘立柱建物跡検出・E→

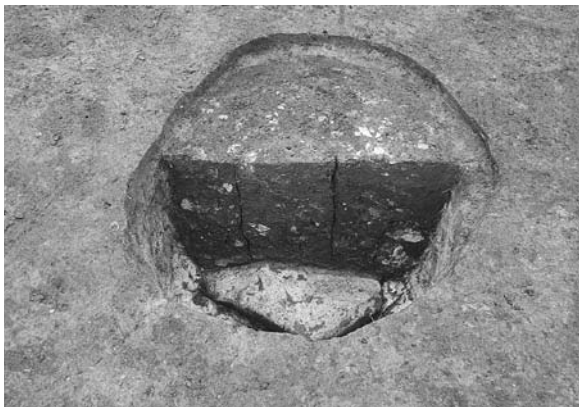
１号掘立柱建物跡完掘・N→

写真図版12　１号掘立柱建物跡（１）

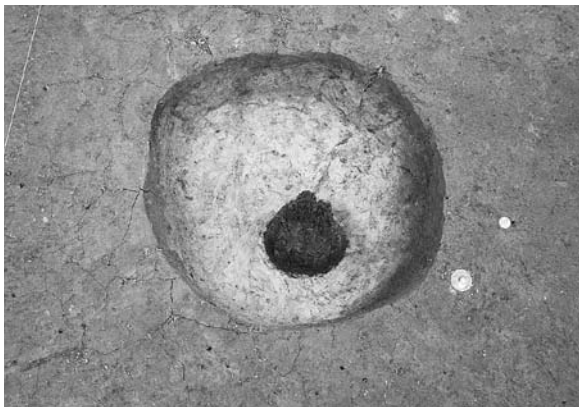
Ｐ１平面・N→

Ｐ１断面・W→

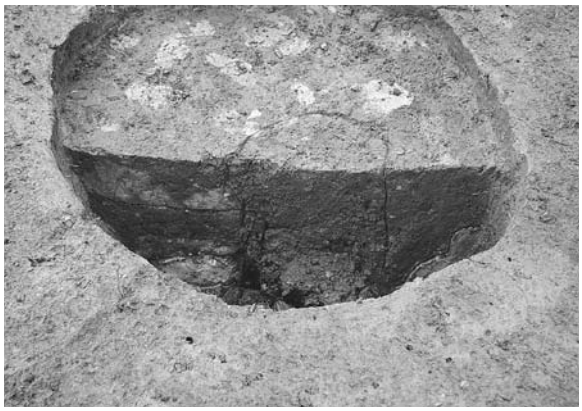
Ｐ２平面・N→



Ｐ２断面・N→



Ｐ５平面・W→

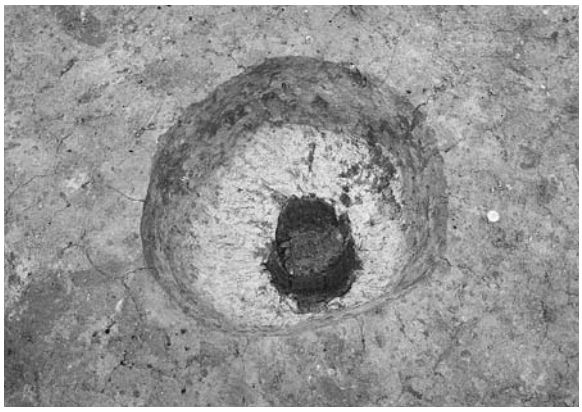


Ｐ５断面・W→

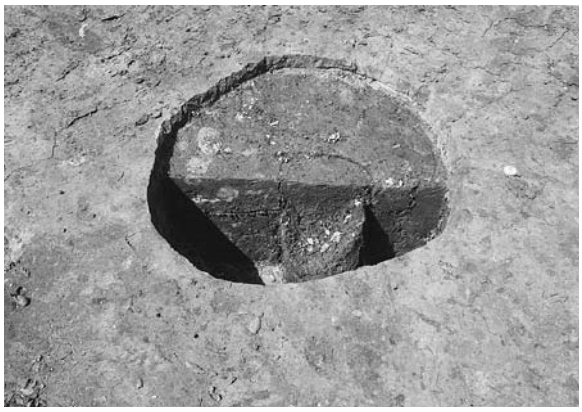
Ｐ７平面・S→

Ｐ７断面・S→

写真図版13　１号掘立柱建物跡（２）



Ｐ８平面・Ｓ→

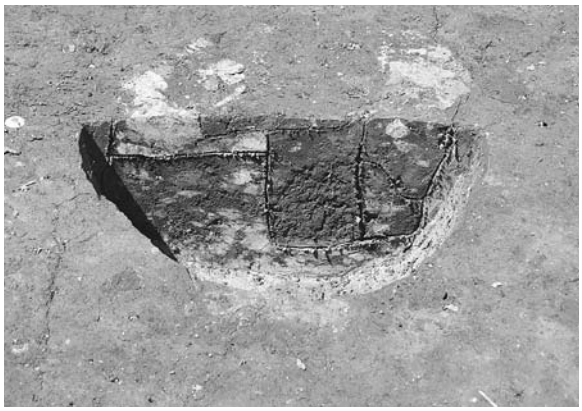


Ｐ８断面・Ｓ→

Ｐ15平面・Ｗ→

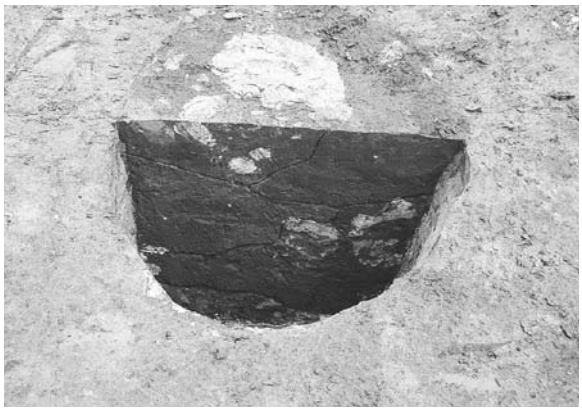
Ｐ15断面・Ｗ→

Ｐ16平面・Ｓ→



Ｐ16断面・Ｓ→

Ｐ22完掘・Ｗ→



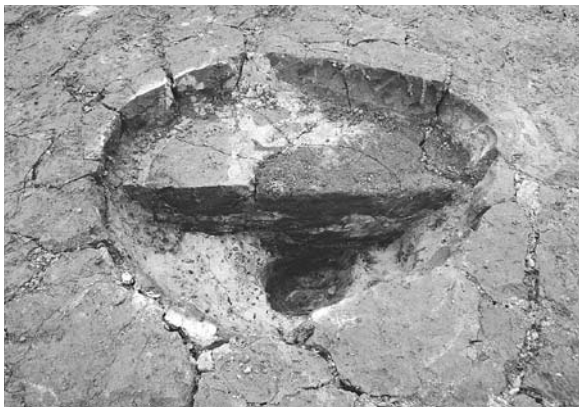
Ｐ22断面・Ｗ→

写真図版14　１号掘立柱建物跡（３）

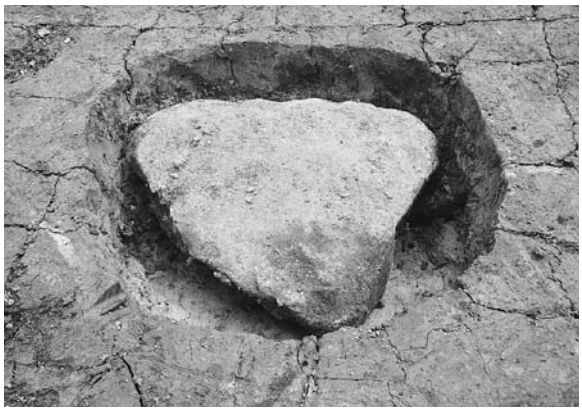
２号掘立柱建物跡完掘・E→

３号掘立柱建物跡完掘・S→

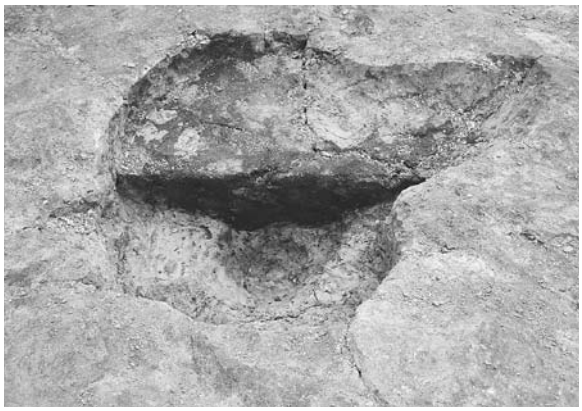
写真図版15　２・３号掘立柱建物跡（１）



２号掘立柱建物跡－P25断面・N→



２号掘立柱建物跡－P27断面・N→

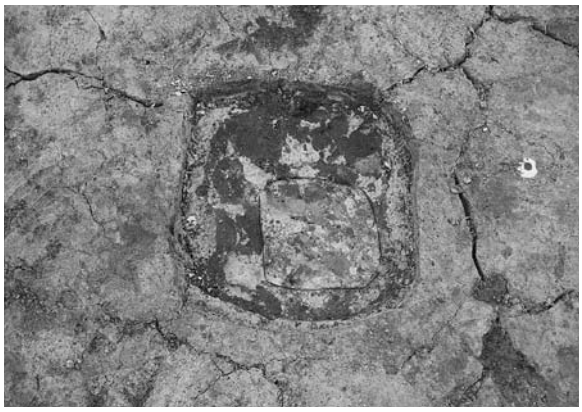


２号掘立柱建物跡－P28断面・N→

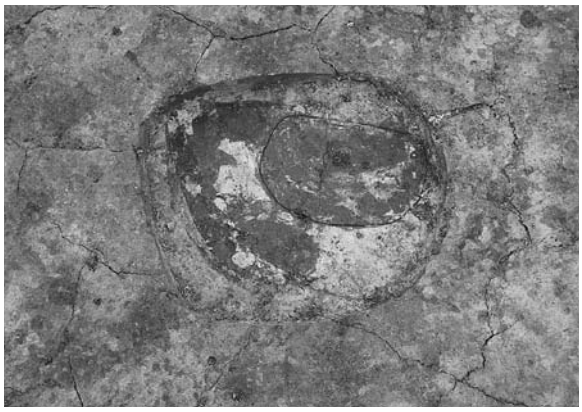
２号掘立柱建物跡－P29断面・N→

２号掘立柱建物跡－P30断面・W→

３号掘立柱建物跡－P46検出・E→



３号掘立柱建物跡－P49検出・W→



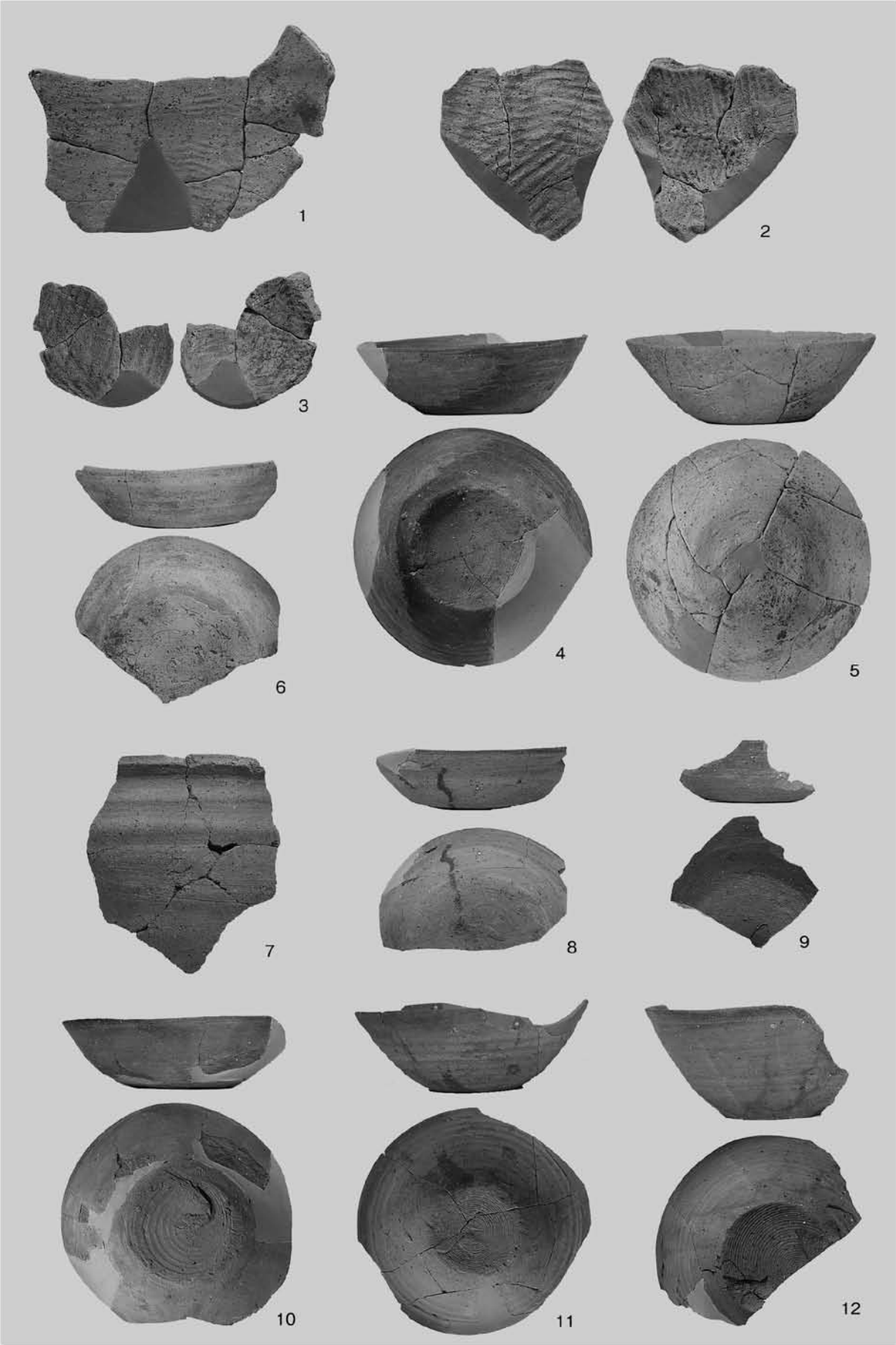
３号掘立柱建物跡－P52検出・S→

写真図版16　２・３号掘立柱建物跡（２）

C区西側・E→

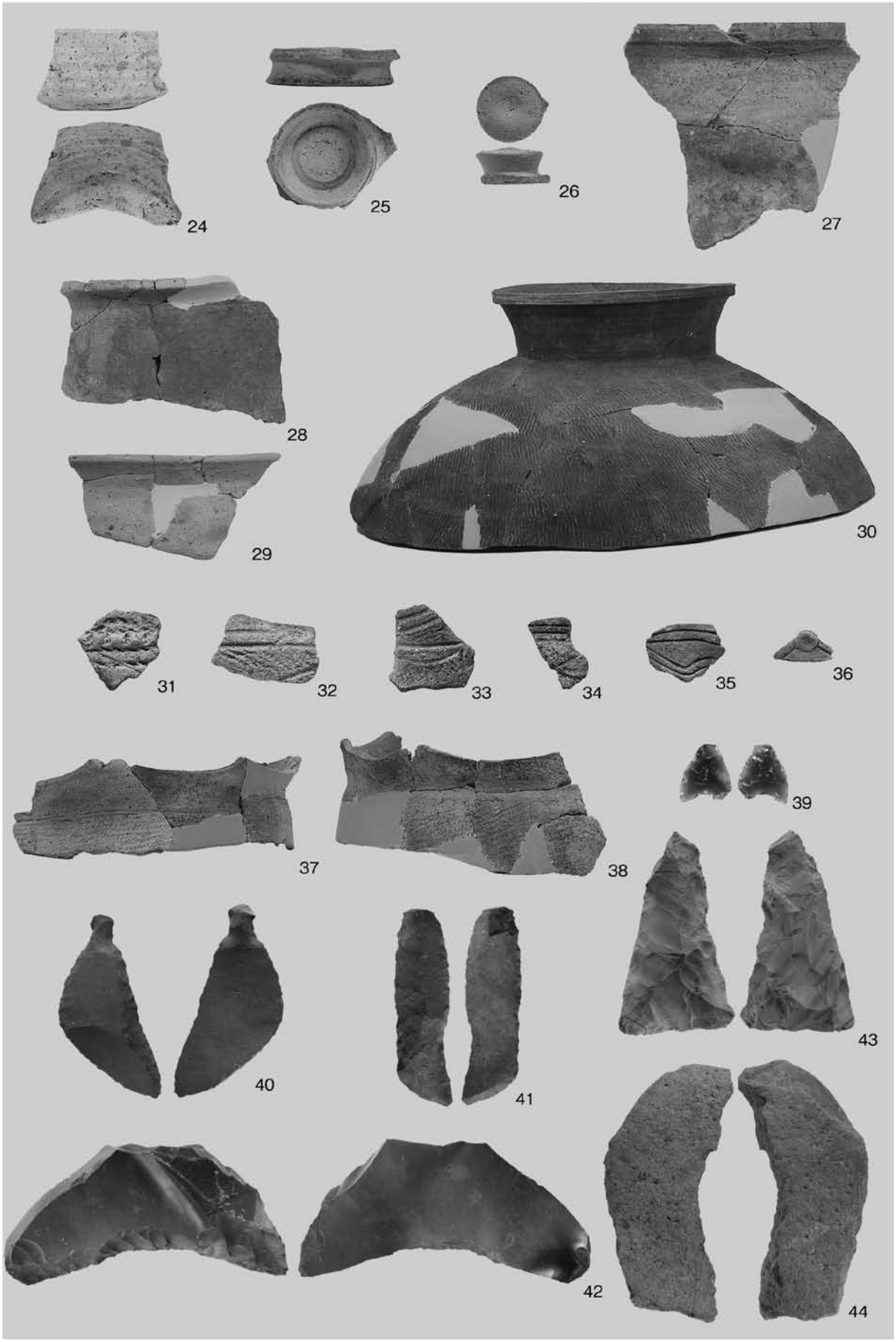
D区・E→

写真図版17　C・D区近景



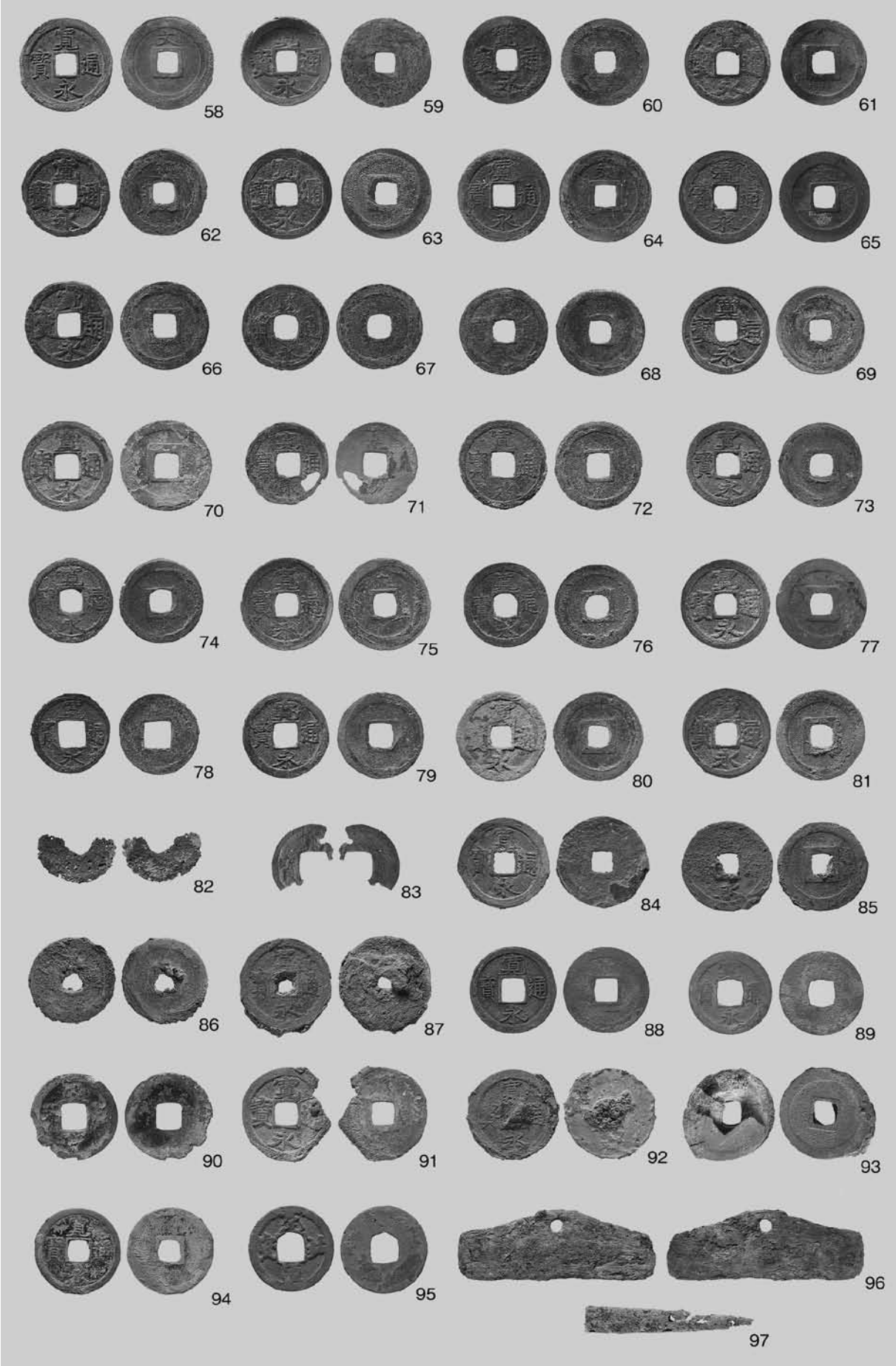
写真図版18　出土遺物（古代土器１）

写真図版19　出土遺物（古代土器２）



写真図版20　出土遺物（古代土器３　縄文土器、石器）

写真図版21　出土遺物（陶磁器、木製品）



写真図版22　出土遺物（金属遺物）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たかばたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	高畑遺跡発掘調査報告書
副　書　名	経営体育成基盤整備事業下矢次地区関連遺跡発掘調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 597 集
編 著 者 名	溜 浩二郎・西澤正晴
編 集 機 関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 020–0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地　TEL (019) 638–9001
発 行 年 月 日	2012 年 3 月 5 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
たかばたいせき 高畑遺跡	いわてけんしわぐん 岩手県紫波郡 やはばちょうおおあざした 矢巾町大字下 やつぎだいちわり 矢次第４地割 ばん 151 番ほか	03322	LE46-0301	39 度 37 分 26 秒	141 度 08 分 47 秒	2010.05.06 ～ 2010.07.02	2,634㎡	経営体育成基盤整備事業下矢次地区関連事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高畑遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器、石器	縄文･平安時代の散布地、近世集落および墓地
		古代	土坑６基	土師器、須恵器	
	集落跡	近世以降	墓壙12基、掘立柱建物跡２棟、井戸跡１基、溝跡３条	陶磁器、金属遺物、木製品	
		その他時期不明	掘立柱建物跡１棟、柱穴状土坑24個、溝跡２条、土坑７基		

要　　約	今回調査を行った高畑遺跡は縄文～近世まで断続的に利用されてきた複合遺跡で、縄文～平安時代は遺物散布地、近世以降は掘立柱建物跡･墓地を伴う集落跡であったことが判明した。また､古代の遺物は古代の城柵跡である『徳丹城』と同じ９世紀前半代のものが出土している。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 597 集

高畑遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業下矢次地区関連遺跡発掘調査

印　刷　平成24年２月27日
発　行　平成24年３月５日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒 020-0853　岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話（019）638 － 9001

発　行　岩手県盛岡広域振興局農政部農村整備室
〒 020-0023　岩手県盛岡市内丸 11 番 1 号
電話（019）629 － 6699

（公財）岩手県文化振興事業団
〒 020-0023　岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話（019）654 － 2235

印　刷　（株）橋本印刷
〒 020-0015　岩手県盛岡市本町通 1 丁目 15 番 29 号
電話（019）652 － 1354

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012